

21世紀教育実践の手引き

言語攻略の音声表現教室

江端義夫 編

広島大学教育学部国語文化教育研究室

はじめに

「言語攻略の音声表現教室」とは何でしょうか。子供たちがテレビゲームで「攻略」ものに興じていますね。あれと同じです。ことばによって相手を攻略すること、そのゲーム的な方略が「言語攻略」です。知的であるとともに、極めて人間的な営みです。言葉の戦略行為を「言語攻略」と定義して、私どもは、『言語攻略の話し言葉教育』（2000年3月）を刊行してきました。私どもの言語生活において、日記以外の全ての行為は、「言語攻略」なのです。相手を説得しなければなりません。意識するとなしとの違いはあっても、言語攻略であることは否定できないのです。そのように認識した上で、よりよい言語生活のために「言語攻略」の向上を教育的に考えることが必要になります。そこで、今回の『言語攻略の音声表現教室』が設定されました。

「言語攻略の音声表現教室」は、二部構成になっています。第一部は「三位一体の音声表現指導」です。すなわち、

1. 「意味」を聞き取る音声表現指導
2. 「科学的事実」を聞き取る音声表現指導
3. 「事物の価値や文化のネットワーク」を聞き取る音声表現指導

この三つを有機的に統一して指導するようにするのが三位一体の音声指導です。「理」と「情」とを総合した方法です。従来の国語教室では、音声表現の指導に適切な理論や実践がみられませんでした。ほとんど名人芸でしたね。しかし今回のように、情理を踏まえた三位一体方式であれば、いろいろの方に応用いただけるのではないのでしょうか。教室での実践に役立つように、新鮮な課題を取り上げて指導案を作っています。

さて、第二部は、「相互発信型の音声表現教室」です。ここでは、意見を発表したり、情報適応教育などをしたり、言語攻略の典型であるところのディベート学習を提案したりしています。また、筋立ててものをのべたり書いたりする指導を最後にもってきて、国語の学習を感性中心のキレル子を育てるのではなく、論理的な子を育てるのを狙いにしています。とりあげる内容は、極めて斬新であり、青少年の現実を十分に把握したものになっていますが、分析は大変に「理知的なもの」を求めています。感情に走ったりイメージだけで判断することのないように、理詰めで深く交流する子供を育てることが構想されています。感情よりも理性に勝った子を育てたいと思っているからです。それが今回の主な目的です。感想や観賞中心の国語科の授業からの脱皮が示唆されていることをお読みとりいただきたいと存じます。

今回の新しい試みは、広島大学教育学部大学院生が平成12年度に、江端の担当する「国語科内容学演習」において提示された課題に、誠実に取り組んだ成果の集大成です。これらをお読みいただき、少しでも教育実践の参考にさせていただければ幸いです。

(江端 義夫)

目次

はじめに

…0

第一部 三位一体の音声表現教室

第一章 「意味」を聴き取る音声表現教室

第一節 文章を聴き取る授業の一試案

—単元「流行の歌詞をさいてみよう」を通して— 小柳真一郎 …3～11

第二節 落語を教材とした聴くことを楽しむ授業 滑川史子 …11～18

第二章 「科学的事実」を聴き取る音声表現教室

第一節 映像表現を聴くことの学習指導 森 宣浩 …20～29

第二節 自分の考えをもちながら聞くことを意識した授業
—インタビューを通して— 滑川史子 …30～42

第三節 ニュースをきちんと聞くことの学習 石窪太郎 …43～48

第四節 「きちんと問い・聞き・答える」基礎レッスン 信木伸一 …49～57

第三章 「事物の価値や文化のネットワーク」を読み取る音声表現授業

第一節 情報を聴き取る授業の一試案

—単元「ひいきのチームは一体どこ？」を通して— 小柳真一郎 …59～66

第二節 対話の中で話し手のことばを受けとめるためのレッスン
—テレビ番組を使って— 信木伸一 …67～78

第三節 プレゼンテーションを使用した聞くことの授業 石窪太郎 …79～83

第二部 相互発信型の音声表現教室

第一章 意見発表の指導

第一節 素敵なスピーチを目指した授業 石窪太郎 …86～93

第二節 スピーチクレームを通して他人の
考えに触れ、自己の考えを育てる授業 滑川史子 …94～107

第二章 情報適応教育の実践

第一節 鑑識眼を育成する国語教育 森 宣浩 …109～114

第二節 情報を批判的に捉え、発信する授業
—ポスター・CM・ホームページづくりを通して— 滑川史子 …115～126

第三章 言語攻略の指導

第一節 サブカルから社会問題を考える授業 森 宣浩 …128～133

第二節 楽しめるディベート学習の試み
—楽しめるディベートによる「話し合う」活動を楽しむためには— 小柳真一郎 …134～141

第四章 筋道を立てて考える指導

第一節 論文体験学習の試み 小柳真一郎 …143～148

第二節 科学的にレポートを書く授業
—超掃除人— 石窪太郎 …149～154

おわりに

…155

第一部

三位一体の音声表現教室

第一章 「意味」を聴き取る音声表現指導

第一節 文章を聴き取る授業の一試案

単元「流行の歌詞をきいてみよう」を通して

小柳真一郎

目次

1. 「伝え合う力」について
2. 本稿の目的
3. 音楽使用の意義
4. 授業への提案・学習指導案
5. まとめと今後の課題

参考資料

1. 「伝え合う力」について

新学習指導要領中学校の目標に「伝え合う力を高める」ことが加えられた。それはコミュニケーション能力のうち、話す能力だと受け取られ、その技術の育成こそが目的であると理解されがちであることは、「伝える」イコール「話すこと」、と受け取る危険性をはらんでいると指摘できる。「話すこと・聞くこと」という領域にまとめられたのだから、「聞くこと」も「離すこと」と同じだけの指導を行うべきであろう。

実際に行われている授業の中、「話すこと・聞くこと」の内、「聞くこと」の活動の方が明らかに多いはずであるのに、発問などに対する返答の方に目が奪われがちであり、いかに返答を導くかという発問を考えることに、教師も終始しているように思われる。それ以前に、教師の発言を聴こうとし、その内容を理解しようとする、その「聴く」姿勢が、もっと注目されてしかるべきである。

これまで、人の発表を聞く、音読を聞く、教師の説明を聞く、といった活動が「聞いて当たり前である」という前提のもと行われてきたのではないだろうか。これらを生徒に何となく聞かせていたのでは、「伝え合う力」を育成するのに重要な「聴くこと」の重要性が、それこそ伝わらないといえるであろう。

2. 本稿の目的

本稿では、中学校国語科の授業における、学習者の「きくこと」の行為、またその内容を認識し、自らが再構成することについて、考察することを目的とする。現在、話し言葉教育が注目されてはいるが、そのコミュニケーション能力のうち、いかに話したら効果的であるのか、といった技術的な面が強調されていると思われる。しかし、会話や対話といったものは、話すことよりも前にまず、「きくこと」から始まるのではないか。最初にことばを発するものでさえ、「この話題を話そう」という自らの内言に耳を傾け聞いているはずである。すなわち、話すこととは、「きくこと」が前提で発生するものであり、その前提がなければ存在しなくなってしまう。よって、話す技術よりも「きくこと」の重要性がもっと取り扱われてよいはずである。

「きくこと」を重要視してこなかったせいもあるのか、実際に教壇に立った際、こちらの話、説明などをしっかりと聞いている生徒の数は少ないことを知った。そんな時、大きな声をあげて、注意することが度々ある。教師側の発問が悪いという問題はひとまず置いておくとして、生徒達は、自分の興味関心があることのみには、耳を傾けようとしにくいことが多いと思われる。しかし、情報化

社会といわれる現代、興味のあることばかりを聞いて生活するわけではない。様々に飛び交う情報を、正確に聞き取り認識する行為が必ず必要となってくる。また、その認識した事柄を、自ら再構成する能力も、また必要だといえる。本稿では、正確に聞き取り認識し、それを再構成する能力がどのようなものであるのか、それをどのように指導していけばよいのかを、初歩的な段階から考察し、実際に行う際の授業案を提示する。また、その授業の教材に音楽を使用することについての意義を述べていきたい。

3. 音楽使用の意義

普段の生活において、何かを聞くということは、ことのほか多い。テレビ、ラジオ、携帯電話の普及、情報の発信源は周りに溢れている。その中でも、もっとも耳にすることが多いジャンルは音楽である。事実、稿者が勤務している中学校でも、昼の休憩時間に放送委員が流行の音楽を全校放送で流すなど、音楽情報に対する敏感な反応が窺える。しかし、その情報のうち、曲に対して注意を払うことが多く、歌詞を明確に聴いている人は少ない。単に耳に入る「聞く」であり、注意して「聴く」ではないのである。流行の曲であるから、テレビでよく流れているから、耳にしたことがある、聞いたことがある、という感想は、歌詞よりも先にその曲調に対してのことであろう。更には、歌の流行の移り変わりは激しく、いちいち歌詞にまでこだわってられないというのが現状であろうと思う。

では、身近に流れる流行の歌の歌詞には、どのような意味を持っているかを取り上げることで、普段何気なく「聞いていた」状態を、これから「聴く」に変化させることが出来ると考えたのである。

今回取り扱うことにした、「ゆず」というバンドは20代前半の男性二人組で、中高生を中心に昨年から人気が出てきおり、知名度も高い。実際に現在の中学生がどれぐらいの割合で「ゆず」を知っているのかアンケートを実施してみたところ、半数以上の生徒が知っていると回答している。これについては下記の表を見て欲しい。「ゆず」は歌詞に英語を用いることが比較的少なく、生徒の興味関心が得やすいこともあり、中学校国語科の授業に使用出来ると考えた。興味関心が得やすいだけでなく、普段聞き過ごしている歌詞に注目させてやることで、「聴く」姿勢の意識を芽生えさせることも可能であろう。

実際に行ったアンケートの結果を簡単な表にまとめた。

調査者 小柳真一郎

調査対象者 阿戸中学校一年一組(34名)

実施日2000年5月2日

Q1. 「ゆず」というバンドを知っていますか？

知っている	34名中30名
知らない	34名中1名
無回答	34名中3名

Q2. 「ゆず」のCDを持っていますか？

持っている	34名中7名
持っていない	34名中24名
無回答	34名中3名

4-1授業の提案

<単元設定の理由>

「聴くこと」の初歩的な段階としては、まず、身近なものに耳を傾けてやることである。何気なく聞き過ぎしてしまう事柄を、意識的に「聴かせる」ことで、「聴く」という姿勢の第一歩を踏み出せることがねらいである。今回その身近な題材として音楽を選択し、生徒の興味関心を得ることも図った。ここで注意しておきたいことは、知っているということは歌詞自体ではなく、音楽家としての知名度、興味関心があるのは聞いたことのある曲調に対して、ということである。

方法としては、「ゆず」の「贈る詩」という歌を教材として取り上げ、この歌詞を繰り返し聴くことを通して、どのような内容の歌であるのかを聴き取らせる。「贈る詩」の歌詞については、資料を参照してもらいたい。内容については、心に残った歌詞は何か、誰が誰に対して歌ったものであるのか、何のために、また伝えたい思いは何であるのか、歌詞を聴き取った上で考えさせていきたい。ただ、内容の理解、認識は聴き取ることが出来て、はじめて可能なのであって、本授業案の目的は聴き取らせることにあることを再度明記しておく。

そのためには「贈る詩」を何回か流すことを通して聴かせることが望ましいと考えられる。一回目は「この曲を聴いたことがあるかどうか」という発問に留め、生徒の興味を惹きつけ、二回目に「誰が誰に対して歌ったものか聴いてみよう」といったように、徐々に聴く姿勢をとらせるように配慮する。また一回曲が流し終わるごとに「心に残った歌詞は何か」「伝えなかった思いは何か」などの問いに対する意見を、配布したプリントに書き込んでもらい、口頭作文の形で発表してもらおう。その形式については、付属の資料を参考にされたい。発表を聴く人も、ただなんとなく「聞く」だけではなく、自分との違いを注意して「聴く」ことを、ここでも意識させたい。そのためにも、この発表に対する評価プリントを配布して、聴き取り、これにより、他者と自分との感じ方の違いを認識し評価するといった活動を行わせる。このプリントについても資料を参考にしてもらいたい。

また、生徒になぜこのような学習を行わなければならないのか、という疑問を持たせたまま学習することは、当然避けなければいけない。そのためにも、一回目の曲を流し終わった後で、この歌の内容が理解できたかどうか問い、普段何気なく耳にする音楽の歌詞をじっくりと聴いてみることを提案し、「聴き取る」姿勢の重要性を説明する必要がある。詳しい授業展開は、次に載せる学習指導案を見てもらうことにする。

4-2 学習指導計画

一 単元「流行の歌を聴いてみよう」ー〈計一時間〉

対象 中学校一年生

本時の学習目標

- ・ものごとを聴く姿勢をとることができる。
- ・歌詞を正確に聴き取り、内容を認識することができる。

学習活動	指導上の留意点
1 「贈る詩」を聴く	<ul style="list-style-type: none"> ・ラジカセを用意し、「今から流す曲を知っているか」と問いかけて、興味を惹きつけた後に曲を流す。 ・今流した曲の歌詞をどれだけ聴き取れたか聞き、その認識があやふやではないか考えさせる。
2 「聴くこと」について考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・歌詞をよく聴き取ることを提案し、聴くことの重要性を説明する。生徒の反応を確認後プリント配布。
3 最初の問いに注意して聴きプリントに書き込む。	<ul style="list-style-type: none"> ・プリントの「心に残った歌詞は何か」に注意して聴くように指示し、プリントに書き込ませる。
4 二つ目の問いに注意して聴き書き込む。	<ul style="list-style-type: none"> ・二つ目の問い「誰が誰に対して歌ったものか」に注意して聴くように指示する。聴いた後プリント書き込むように指示する
5 三つ目の問いに注意して聴き書き込む。	<ul style="list-style-type: none"> ・三つ目の問い「この歌で伝えたかった思いは何か」について注意して聴くように指示し、プリントに書き込ませる。
6 書き込んだ事柄を整理し口頭で発表する。評価プリントに書き込む。	<ul style="list-style-type: none"> ・書き込んだ事柄を整理し、口頭作文の形で発表してもらおう。他の生徒の発表を聴いて、自分とのえ方、感じ方の違いを見つけ、評価プリントに書込ませる。
7 再度曲を聴き、授業の最初と「聴くこと」がどう変化したか感想に書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・何人かに発表してもらった後、もう一度曲を流す人の意見を聞いた後に、再度曲を聴いてから感想を書いてもらう。 ・感想は後日プリントにまとめて配布する。

5 まとめと今後の課題

今回は、漢詩や古典の歌などを使用せず、現在の中学生に比較的好く知られている、「ゆず」というバンドの歌を教材として取り上げ、新しい聴き取り指導の授業案を提示してみた。課題として考えられるのは、現代の歌を取り扱ったことにより、その歌を歌っているバンドを知っている生徒と、知らない生徒、という状況が僅かながらもできあがってしまうことである。これが「奥の細道」や「春望」といった教材であったならば、生徒全員が知らない状況であるために、先入観の入る余地なく、「聴くこと」ができるのかも知れない。しかし、普段聞き流すことの多い、現代で流れている音楽の歌詞というものを意識して「聴く」という活動を行うことで、「聴く」姿勢が養われるはずだと考えている。また、音楽の歌詞を注意して繰り返し聴くことで、人の話も注意して「聴く」という状態にまで指導するには、一時間という授業では多少難しいのではないかと不安である。普段の授業でも「聴き取る」ことの重要性を常に指導していくことが必要だと考えている。その方法が今後の課題だと言える。最後になりましたが、今回のアンケートに協力して下さった、阿戸中学校と一年一組の皆さんに、深く感謝の意を記す次第です。

資料1

「贈る詩」 作詩・作曲北川悠仁

時計の針が二十四時を回り わずかな荷物を持って走り出す
街を歩く人達みんな白黒に見えて 君の家へ向かう道だけにハッキリ色がつく

お金もない時間もないけれど今日は君がこの世に生まれた日だから
今の僕に出来るたった一つの贈り物

君の心へこの唄が届きますように
優しい笑顔曇らぬようにこの唄を贈ります

悲しい時 寂しい時もあるけれど 君らしくいてくれる事を願いながら
今の僕に出来るたった一つの贈り物

君の心へこの唄が届きますように
優しい笑顔曇らぬようにこの唄を贈ります

資料2
配布プリント

「流行の歌詞を聴いてみよう」学習プリント 名前()

1. この歌で心に残った歌詞をあげてみよう。

2. この歌の主人公はどういった人物で誰に対して歌っていると考えましたか。

に歌っていると考えました。

3. この歌で伝えたかった思いは何だと考えましたか。

という思いだと考えました。

資料3
評価プリント

「流行の歌詞を聴いてみよう」評価プリント 名前()

() さんの発表を聴いて、自分と

という点が違うと思いました。

《以下同様の記述を3～4個記載する》

*授業の感想

・最初に曲を聴いたときと、人の意見を聞いた後で何か変化はありましたか。

・「きくこと」についてどう思いましたか。

第二節 落語を教材とした聞くことを楽しむ授業

滑川史子

目次

- 1, 目的及び方法
- 2, 落語使用の意義
- 3, 落語の「間」
- 4, 授業への提案
- 5, 学習指導案
- 6, まとめと今後の課題

1, 目的及び方法

現在、様々なメディアが急速に発達し、それは「映像文化」として顕著にあらわれている。その中でも身近に触れることができ、しかも見る側に大きな影響力を与えるものとしてテレビが挙げられる。

最近のテレビ番組ではテロップが頻繁に使用されている。出演者の話している内容全てをテロップで流す番組も存在する程である。

このような番組を見続けていると、聞くことを見ることで補ってしまい、見ることに注意が集中し、聞く力が衰えてしまうという恐れがある。

私たちは聞くことによって、話の内容を想像し、話の世界を自らの中で再構成することで話を理解する。聞く力が衰えてしまうことによって、話を想像する力、話の世界を自らの中で再構成する力が貧弱なものとなり、話を理解することができなくなってしまうだろう。

テレビを観る時には、番組制作者に与えられた視点で見たり聞いたりすることになってしまい、対象の捉え方が制限され、それは想像力を制限することにつながると考える。

「話すこと・聞くこと」の教育が注目され、「論理的に話す」、「批判的に聞く」というように、それぞれの能力を高めることが目標とされているが言葉を「話すこと・聞くこと」自体を学習者は楽しいと感じていないと思われる。その中でも特に、言葉を「聞くこと」は「話すこと」よりも楽しさを見いだせない状況にあると考える。

そこで、聞くことによって話の世界を想像し楽しむ授業を構想したい。その際、教材としては視覚に頼らず、テレビにはない魅力をもつものを取り上げるのがよいだろう。

キチッとした芸は、テレビではなかなか育むのが難しい。笑いは消費しますが、練り上げたり熟成させたりしません。ただ、広く名前を知ってもらったり、面白い人なんだとわかってもらえるのには、テレビはたいへんありがたいメディアなのです。

落後の場合、これはテレビ向けではないとされました。まず動かない。座ったまんまですもんねえ。しかも、映像で済ませられるものを、イメージで伝えようとする。落後はそれを求めるわけですからね。（『NHK人間講座 文珍流・落語への招待』P105～p106）

このように、落語は見ることを中心とするテレビには適さない。聞くことに集中させ聞くことだけで話の世界を想像させるには落語が適していると思われる。よって、今回教材として落語をしようしたい。

2, 落語使用の意義

落語はしぐさや視線など視覚に訴える要素もあるが、やはり中心は「話術」である。

落語の元素は人間と世間、あとは言葉なのです。高座という空間を使って、言語による仮想現実を笑い話として作り上げていって、一瞬のうちにオチというもので終わる。（中略）演者側は豊富な語彙、ボキャブラリーというものを駆使して、その人なりの言語スタイルを持つことが大事なのですが、それをキャッチするお客さんのアンテナの感度も、実は同じくらいに重要なんですよ。（『NHK人間講座 文珍流・落語への招待』P10～p11）

落語に必要な舞台道具は、めくりと座布団だけであり、舞台装置や衣装替えなどを必要としない。落語家の「しゃべり」のみで作られるという、言葉を重視した芸能である。落語家の言葉によって作り出される世界を受け止めるにはまず、聞くということが非常に重要となってくる。そして客は笑いによってその世界を共有することができるのである。

このように、落語では落語家の言葉と客（聞き手）の役割が重視される。これは、落語とそれを聞くという学習者という関係に置き換えることが可能である。よってこのような点からも、教材として落語は適していると思われる。

劇場のお客様の前では、客席の呼吸を感じながら、なるべく笑いを待つようにしています。それはどういうことかという、笑いの反応というのは人によって時差といいますか、個人差があるものです。即座にポーンと返ってくる方もあれば、少し間が合って笑われる方もおられます。劇場の規模にもよりますが、基本的には反応を待たないと大きな笑いにはつながっていかないのです。ただ演者が若い時というのは、なかなかこれが待てない。次から次へとネタをたたみかけていかないと不安で不安で……。ネタを重ねて笑いを大きくしたい時には、「間」を効かせ、ちょっと引いた芸をしないとダメなのですが、テレビが登場してから、特に間を取らない笑いというか、間を待てない。推す一方の芸が増えたように思います。それは、テレビというメディアの特性でもありましょう。そりゃあそうですよ、インパクトのある、スピ

ード感のある芸がテレビでは好まれるでしょうからね。それと、間を学び、間を身につけたライブ育ちの芸人が減ったという面もあるのでしょう。(『NHK人間講座 文珍流・落語への招待』P105～p106)

現在、テレビによる芸の受容が一般的となり、その形態は「引く芸」から「押す芸」へと変化した。よって、落語の際立った特徴として「引く」つまり、「間」が挙げられよう。

学習者に落語を聞かせることで、日常慣れ親しんでいるテレビとは異なった「聞く」活動を行わせ、「間」を感じ取らせることができると考える。

3. 落語の「間」

それでは、落語の「間」とは何か、文献をもとに定義したい。

ハナシによって、コトバを並べることは絶対条件であるが、そのハナシに生命を深刺として元気あらしむるためには、も一つ肝腎な条件が潜んでいるのです。ハナシというものは、喋るものですが、そのハナシの中に、喋らない部分がある。これを「間」という。(中略)ただ生理的に無神経に、言葉と言葉との区切れをつけるのではなく、張りつめた神経を鋭敏に働かして、レーダーの如く、正確無比に適不適を計るところの「沈黙の時間」なのです。(中略)ハナシをする場合、コトバだけの研究では足りません。そのコトバにもたせる「マ」の研究、話している間の表情動作すべてにわたるバランスの研究、そこまで行かないと満点とはいえません。

では、その研究はどうするんだ？

答えは平凡です。たくさん経験をつむこと、絶えずその心構えでいること、これです。

「何か「マ」の簡単に分る虎の巻は無いかい？」

だってそんなものはありませんよ。何しろカンの問題ですからネ。

ハナシの場合でも、この「マ」が正確である時、聴衆は快感を味い、陶酔の境地まで入るのであります。いい換えれば、バランスに対する快感です。

—「話術」とは「マ術」なり。

—「マ」とは動きて破れざるバランスなり。(『話術』徳川夢声p38～P44)

話をすること、それは言葉を並べることでありと考へがちであるが、言葉と言葉の隙間、つまり「間」が重要な役割を果たしていると言える。言葉と間のバランスによって、その話が聞き手にとっておもしろかったり、つまらなかつたりするということが起こる。

「間」には、場面を転換したり客(聞き手)に期待をもたせたりという役割があるだろう。その中でも最も重要であると考えられるのは、笑いを引き起こす「間」であると言える。

落語を聞いて笑う、それは言葉と間の良さゆえである。言葉を客(聞き手)に投げかける、そこで間をおく、これは聞き手が言葉を受け取り、想像し、世界を作り上げて理解するま

で待つことでもある。聞き手は「間」をおかれることによって、理解し、笑うことができるのである。

このように落語における「間」は非常に重要なものである。落語だけではなく、日常生活における会話の中でも「間」は重視されるべきであると考えられる。自分勝手に一方的に話したいことを話していても相手(聞き手)は話を理解し、その世界を共有することはできなだろう。「間」をおき、相手の理解や反応を待つことで、お互いが話の世界を共有することができるのである。

しかし「間」は「カン」で感じ取らなければならないものであり、それは経験を積み重ねないと得ることができない。落語になじみの薄いと思われる学習者に、落語を一度聞かせただけで「間」を習得させることは困難である。そこでまずは、「間」の存在に気付かせたい。それによって話を想像することの楽しさを感じることであればよいと考える。

4. 授業への提案

今回は落語を教材として使用することで、聞くことを楽しむということを目指とする。落語を取り扱うにあたって問題になるのは、学習者の興味・関心を喚起できるかという点である。落語は学習者の日常において全くといっていい程に親しみのないものであろう。

しかし、学習者に比較的なじみのある漫才やコントに代表される若手の芸は、ネタのナンセンスさが重視されているため、先に述べてきたねらいが達成できなくなってしまう。

学習者の興味・関心を喚起しつつ、今回のねらいを達成するために「桂枝雀」を取りあげる。桂文珍は桂枝雀について次のように語る。

どうしたら落語が受け入れられるんだろうということを真剣に考え、ずっと自分自身と格闘しながら、なおかつネタをど真ん中正々堂々とやろうとされた努力の人ですね。(『NHK人間講座 文珍流・落語への招待』P75)

落語家は、「間」の置き方やネタの出し方などをその時々客(聞き手)に合わせて工夫する。桂枝雀もその1人であり、特にその工夫に力を入れた人物であるため、学習者のとつても理解しやすいと思われる。

今回は「代書」という話を聞かせる。マクラにおいて、落語には「緊張と緩和」、「陰と陽」があるということを桂枝雀が述べる。マクラは本題に入る前に話され、

- ①客の反応をみる
- ②本題に関わる小噺
- ③さげの伏線
- ④風俗・習慣の解説 (『落語の言語学』p53)

という4種類の形式・機能があるという。「代書」におけるマクラは②にあたり、教師側が聞く視点を与えなくてもマクラを聞くことで、それを自然と知ることができる。枝雀は「緊張が緩和された時笑いが起こる」と述べる。間によって笑いが生じるということを考えると、「緊張と緩和」と「間」は深く関わっていると言える。この点において、桂枝雀の「代書」を扱うことは「間」を意識させやすい。

落語を聞かせた後、「どの点がおもしろかったか、「おもしろくするための演者の工夫は何か（緊張と緩和をもとに考える）」ということについて考えさせる。後者について考えることは、学習者にとって難しいことであると予想されるため、班ごとに話し合っただけで考えさせる。次にそれを発表させ、学習者間でお互いに気がつかなかった観点に気付くことができるだろう。

今回の授業以後、「論理的に聞く」、「批判的に聞く」など、聞く力を更に高めていく授業を展開する必要があり、今回はそれらの授業における最初の段階に位置付けられる。よって、対象学年は入門期にあたる高校1年生とする。

5, 学習指導案

対象学年 高校1年生

学習目標 ①落語を楽しんで聞くことができる。

②「緊張と緩和」から落語における「間」の役割について気付く。

本時の指導過程

学習活動	指導上の留意点
1、本時の学習目標を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・落語を聞いたことがあるか、どのような落語家を知っているかを聞く。 ・落語について簡単な説明をし、本時の学習目標を告げる。
2、落語を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> ・桂枝雀「代書」のCDを聞かせる。 ・「緊張と緩和」について考えながら聞き、プリント①②を記入することを指示する。
3、話の設定を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・登場人物や場など、話の設定を発表し、確認させる。
4、演者の工夫について考えることを通して「間」の役割について気付く。	<ul style="list-style-type: none"> ・5人で1班をつくり、班ごとにプリントを使って「どの点がおもしろかったか」、「おもしろくするための演者の工夫は何か」について考えさせることで、「間」の役割について気付かせる。
5、発表を通して他の視点を知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・4でプリントに記入したことを発表させメモをとらせる。

6、本時のまとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・他の学習者の観点を知ることで「聞くこと」について意識させる。 ・4、5の活動をふまえて感想を書かせる。 <p>プリントを提出させ、後日まとめた上で配布する。</p>
----------	--

評価の観点

- ・おもしろいと感じる言葉や、やりとりをあげることができたか。
- ・落語の「間」の役割について気付くことができたか。

6、まとめと今後の課題

今回は、学習者に「聞くこと」を楽しませることを第一とした。今回の活動を通して学習者が言語生活を楽しむということにつながることを期待する。それを促進するためにCDやテープで聞くだけではなく、実際に寄席に行ってしぐさや視線にも注目しながら聞けばより楽しむことができるだろう。また、落語を造ってみたい、落語家のまねをしてみるなど、自ら経験することでもより理解が深まると考えられる。そして、4でも述べたように、今後は更に「聞く力」を高める授業を行っていかなければならない。

今回は落語のみを聞く1時間の授業にとどまった。それは1時間以上行うことで、学習者の興味・関心を持続させることが困難であること、落語の内容、特に「間」について忘れてしまう恐れがあること、という2つの危惧が生じるからである。

しかし更に時間をかけて、漫才や日常会話といった他のやりとりと比較することで、落語の特徴が明確になるとともに日常会話における「聞くこと」に意識をむけさせることができるだろう。また、「間」をとりながら「話すこと」にもつながると思われる。

同じネタで異なった落語家の落語を比較することで、落語における「間」についてより認識が深まると考える。

<参考>

「代書」

代書屋さんの店先に履歴書を書いてほしいと男がとびこんでくる。

この男、なかなか冗談の好きそうな人物で、氏名、生年月日、学歴など聞き出すだけでえらい手間がかかる。職歴に至っては、やろうと思てがやらなんだ仕事とか、二時間でやめた商売を書かされたあげく、しまいには友達と女郎買いにいったことまで書かされてしまう。

履歴書は「一行抹消」と消印だらけ。「賞罰」の段になると男は新聞に写真入りで載って表彰されたことがあるという。

「そういうことは書いとかないかん」と詳しく聞いてみると、町内の大食い競争で優勝して表彰されたというものであった。(『桂枝雀のらくご案内』P145)

「桂枝雀」

本名・前田達(まへだ・とおる)1939年に神戸に生まれる。61年神戸大学文学部を中退し、桂米朝に入門。翌年、桂小米(こよね)となり、73年に二代目桂枝雀を襲名。「爆笑王」の異名をとる上方落語のスター的存在となる。旺盛な研究心から英語落語という新たなジャンルを開拓し、たびかさなる海外公演でも好評を博している。弟子には93年11月に三代目桂南光を襲名したべかこをはじめとして、桂三郎、雀松、雀々、九雀、文雀、む雀、紅雀がいる。1999年4月没。(『らくごDE枝雀』)

<参考引用文献>

- ・桂枝雀落語らいぶその(一) ・代書
- ・『話術』 徳川夢声 白揚社 1979 1 20
- 『現代落語論 笑わないで下さい』 立川談志 三一書房 1974 6 30
- 『落語の言語学』 野村雅昭 平凡社 1994 10 28
- 『落語と私』 桂米朝 文藝春秋 1986 3 25
- 『桂枝雀のらくご案内』 桂枝雀 筑摩書房 1999 3 25
- 『らくごDE枝雀』 桂枝雀 筑摩書房 1999 5 20
- 『NHK人間講座 文珍流・落語への招待』 2000年1月～三月期

<資料>

落語を聞こう

日付()
氏名()

①話し方でおもしろいと感じた所

--

②桂枝雀さんはどのような工夫をしておもしろくしていたか？

緊張	緩和	その他

③他の人はどのような点に注目して聞いていたか？

--

④落語を聞いた感想(①～③をふまえて)

--

第二章 「科学的事実」を聴き取る音声表現指導

第一節 映像表現を聴くことの学習指導

森 宣浩

目次

- 1 はじめに
- 2 教材の提案及びその理由と目的
- 3 学習指導の内容と方法
- 4 学習指導案（Ⅰ）
- 5 学習指導案（Ⅱ）
- 6 問題点と課題

1 はじめに

二十世紀は、一般に「映像の世紀」と呼ばれている。十九世紀末に映画が、今世紀中頃にはテレビが誕生した。ここ十余年の間にビデオは一般家庭の間に普及し、そして現在、コンピューターなどのデジタル技術も急速に発展し続けている。そんな中で、私たちの日常には映像は溢れ、何時どこでも映像に接することができるようになった。

しかし、忘れてならないのは、「映像」と呼ばれるものの多くのは、常に音声を伴っていることだ。無声映画は既に忘れ去られ、音声も画像と対になって我々の身の回りを埋め尽くしている。動画像（静止画と区別してこう呼ぶことにする）と音声こそが一般的な映像の実体なのである。

そこで、ここでは、映像作品の中でも特に音声、演じられる声というものに注目して映像表現を考えてゆく授業について考えてみたいと思う。

2 教材の提案及びその理由と目的

今回、例として取り上げてみたいのは、『serial experiments lain』というアニメーション作品である。この作品は、平成十年の「メディア芸術祭」（文化庁主催）のアニメーション部門で優秀賞を獲得した作品である。以下に文化庁のホームページから「受賞理由」を見てみよう。

女子中学生の玲音（lain）を軸に、ワイヤードな世界と現実の世界を交叉する現代の世相を描いた作品である。コンピュータの発達となまの人間の生き方を描きながら、現代の人間の存在を問うている点が評価された。学校での友人関係や家族の関係など扱われている内容は日常的だが、提起している問題は極めて哲学的で深い。

付け加えておくと、「ワイヤードな世界」とはネットワーク世界、サイバースペースのことである。作中では、そのまま「ワイヤード」と呼ばれ「リアル・ワールド」（現実の世界）と対比的に提示されている。カタカナで「ワイヤード」と表記されているが、「w

ired」と「weird」の二つの意味が含まれていることに注意したい。

又、「提起している問題は極めて哲学的で深い」とある。ここで本作品の内容について多く触れることは出来ないが、例えば、最近話題の「バーチャル」という言葉を思い出して頂きたい。インターネットを始めとして、様々なメディアが進歩してゆく中で、現代人は現実的で確かな生の感覚を得ることができず、全てが二次的な仮想現実の世界に生きている。特に若者においてはそれが顕著であり、学級崩壊や少年犯罪の凶悪化の原因となっている。例えば、こんな説を聞いたことはないだろうか。よくニュース番組などで真しやかに語られる言葉である。



本作品中の言葉を借りるならば、それは、ワイヤードとリアル・ワールドの区別が付かなくなったということになるだろう。作中では、英利政美という登場人物により、人間の進化として、ワイヤードとリアル・ワールドの境目は完全にかき消されようとしている。ワイヤードにこそ人間は存在すべきだとする英利は、人間は肉体という呪縛を棄て、ワイヤードに本来の自由な精神として存在すべきだと言うのである。それと対峙してゆく主人公の玲音は、友人との関係の中で身体的存在としての現実的な人間像を見いだしてゆく。恐らく、このようなことが「現代の人間の存在を問う」た「哲学的で深い」と評価された点なのだろう。

さて、このように極めて現代的な問題であり、学習者にとっては身近な事柄を描いているというのが、本作品を取り上げる理由の一つである。が、これは、今回の「聴くこと」という主題とはいささか離れているため、ここで触れることはしない。勿論、そのことに学習者が興味を示すのでは、という目論見が無いわけではないが、今回の主眼ではない。本作品を取り上げる主な理由は、その映像表現の巧みさにある。前にも述べたように、一般的な映像は動画像と音声から成る。無論、本作品もその例に漏れていない。つまり、ここで私の言う「巧みさ」とは、動画像表現の巧みさに加えて、それと連動した音声表現の巧みさというものも含んでいるのである。

実際、筆者は何人かの知り合いにこの作品を観せ、感想を求めたことがある。返ってくるのは、おおよそ、「疲れた」とか「難解だ」といった種のものであった。勿論、そこに

は内容の奥深さもあるだろうが、同時に動画像と音声の特異さというのものもある。ここにこそ、筆者が本作品を「聴くこと」の教材として取り上げる最大の理由がある。

つまり、本作品は我々が日常的に慣れている（慣らされている）映像・ドラマの文法というものと異なる表現方法が多分に用いられている。ここでそれについて詳細に記すことは出来ないが、端的に言うと、そのために観る者は画面を前にして混乱し、結果、上のような感想を抱くことになる。所詮アニメと思って観ていると、手痛いしっぺ返しをくらうことになるだろう。平たく言ってしまうと、よく観て、よく聴くことが出来ない、この作品を十分に楽しむことは出来ないということになる。

そこで、今回は、本作品を聴くことに着目して取り扱ってみたい。テレビやビデオなどの日常的な観るという行為の中では、どうしても視覚的要素に流されがちなのだが、特に、聴くということに焦点を当てることで、何気なく行っていることが、映像を鑑賞する行為の中で実際に重要な位置を占めていることを確認したい。（この点に関して、本作品を学習者は聴き取り辛く感じるだろう。）これにより、学習者達の日常に溢れる映像、その中で聴くことが盲点となっているのだが、この授業を通じてその点を発見し認識してゆくというのが目的である。又、そのことを通じ、音声言語の広がりや豊かさやそれを聴くことの不思議さや面白さも理解されるならば幸いだと考えている。

3 学習指導の内容と方法

今回は、『serial experiments lain』という作品の佳境とも言える第12話・「layer:12 LANDSCAPE」から、玲音の友人ありますが、玲音の部屋を訪れるシーンから、最後に英利政美が消えるシーンまでの一連のシーケンスを取り上げることにする。時間にして約9分ほどである。

尚、出来れば、学習者全員がここまでのこの作品、つまり第12話までを一通り観ているのが望ましい。一話が約20分であるので、一時間の授業で3話、合計四時間は使うことになる。或いは、各学期間の休養日や連休を利用して学習者に観ておくことを指示するのはどうだろうか。その際、学校側でビデオなりDVDなりを用意できなくとも、この作品は、恐らくほとんどのレンタルビデオ店に置いてあるので、各自で観ることも可能だと思われる。又、それも出来ない場合、予めこの作品のあらすじを用意することで、何とか授業を成立させることができるのではないだろうか。この点、物理的な制約があるが、容赦頂きたい。

さて、このシーケンスを用いて、具体的に何をやるかということであるが、先ず、学習活動の内容から、(I)と(II)の二つに分けることとする。初めに、このシーケンスから学習者にシナリオを作成させる。次に、そのシナリオを用いて、学習者自らがアフレコをすることで、新しいシーケンスを制作する。

最初の活動では、実際に演じられた音声を文字に起こすことで、生の音声の広がりや豊かさや書き言葉との違いについて確認したい。具体的に言えば、句読点や様々な表記記号を駆使して、学習者は出来るだけ音声に近づけた臨場感あるシナリオを書くことに悩まされるだろう。又、聴きながら意味を捉え、理解しなくてはならないので、音声を言語とし

て意味分析し理解してゆくという何気ない行為の複雑さを知ることになると思われる。

次の活動では、最初にかいたシナリオから、実際の動画像を観ながら、アフレコ、ダビングして、このシーケンスを実際に制作させてみたい。これにより、学習者それぞれの声は違えども、真似することで作中の登場人物らしい表現が出来ているかなどの観点から原作の映像と比較し、音声としての言語の面白さ・豊かさを確認できれば良いと考えている。副次的だが、作中では、かなり激しい口調の台詞や情緒的な台詞があるので、それを発する学習者が自身の声を、その身体同様に操作・制御できるようになるという狙いもある。(実際、自身の発する声を思い通りに操作するというのは、対話をはじめとした様々な発話の場合で重要なのは言うまでもないだろう。) 又、実際の映像の制作現場と同じ作業をすることで、メディアの仕組みのようなものも体験できるのではないだろうか。

尚、上に示した学習活動には、パソコンを中心としたそれなりの機器が揃っていること、及び、指導する者が実際にそれらを扱えることが前提となる。とはいえ、機器自体それほど特別なものは必要ない。ハードとしては、ビデオキャプチャーの付いたパソコン、ビデオデッキまたはDVDプレーヤー、音声入力用様のマイク。ソフトとしては、MPEGやAVIといったビデオファイルを編集するためのソフト、WAV形式で長時間録音可能なソフトがあれば良い。いずれもフリーソフトで入手可能なものであるが、ビデオ編集に関しては、市販のものの方がストレス無く作業ができるだろう。又、ハードに関しても、それなりに高性能なものが望ましいが、一般的な機種でも、ビデオカードを性能の良いものに交換したり、メモリを増設したりする程度で十分に使えるのではないだろうか。又、出来れば学習者が5名から6名が1組となって、それらの機器を使用し、且つ、アフレコの際には、防音された部屋を使用するのが望ましい。

4 学習指導案 (I)

ここでは、前項で述べた最初の学習活動について、具体的に指導案を提示してみたいと思う。尚、『serial experiments lain』という作品には、多少グロテスクな表現や刺激の強い表現が含まれているため、対象学年は高等学校二年以上としておきたいと思う。又、次の(II)と併せて、一つの単元とし、各3時間、計6時間の単元とする。

映像表現を聴くことの学習指導 (I)

本次 (第1時～第3時) の主な学習目標

映像作品中の音声言語を聴き取り、文字言語に表現することを通じて、音声言語の特色とそれが聴覚を通じて受容され、理解されていく過程を確認する。又、映像の中の音声を意識的に注意深く聴く能力の育成を目指す。

本次の主な学習活動

『serial experiments lain』 — 「layer:12 LANDSCAPE」から課題として提示された後半のシ

ークェンスを観て、その台詞を聴き取りながら、シナリオを作成してみる。その際、驚きや焦り、沈黙と言った文字にならない言語をどのように紙面に表現してゆくかに注意する。各自で、句読点以外にも「!」「?」「—」など記号を工夫してみる。又、「(ここで沈黙)」や「(ここで振り返って驚く)」など、登場人物の具体的な動作や行動を文字として表現することは出来るだけ避ける。出来上がったシナリオと実際の作品とを聴き比べ・読み比べすることで、内容の理解が出来ているかを確認する。最後に、教師側が作成したシナリオを例示（プリントの配布）して、聴き取りや表記が難しかった点を指摘しながら、注意深く聴き理解すること、音声を表記するこの難しさを再確認する。

本次の主な指導上の留意点

5名～6名を一つの班として学習活動を行わせる。パソコンを用いる場合、聴き取りのため反復してシーケンスを観ることが出来るように、各班にビデオファイルを配信しておく。又、音声のみのファイルも配信しておくといよい。

記号を用いる場合、あまりに他者が理解し辛い記号を独自に考案して用いることのないように随時注意するとよい。記号というものはそのコードがある程度共有され易いものでなくてはならない。

作中で多用されるコンピューター用語については、随時、解説する。その際、学習者が事前に本作品を観ているならば、適当なシーンを回想するなどしながら説明するとよい。

学習活動	指導上の留意点
1 班に分かれ、提示された映像を観ながら、台詞を書き起こしてみる。	記号を使って書くこと以外にも、ショットの変化に応じて、番号や改行や「」などを使い分けて書くことに着目させると良い。
2 一度書き起こした台詞を何度も映像と聴き比べ、話し合いながら、文字化するのを工夫して、シナリオを作成する。	後の総括のため、机間巡視して学習者が躓いた点を確認しておく。
3 出来上がったシナリオを一読した後、実際の映像の音声と比べてみる。	次の活動のことを考え、ストップウォッチを各班に配り、任意に時間を書き込むようにさせると良い。
4 シナリオ例と自分たちが作ったものとを比較してみることで、3までの活動を通じて、何を学んだかを確認する。	作業の進行と同時に同時に、各班毎に配役やディレクターを決めるように注意しておく。

4は、口頭での発問でよい。

参考

ここに、参考として、実際にシナリオの例を挙げておきたいと思う。これは、本作品のシナリオ集『scenario experiments lain』（小中千昭著 ソニーマガジンス 1988）を主にして、筆者が実際の映像に即して多少の変更を加えたものである。

ありす	「—これが— 玲音の部屋…？」
	「玲音…？」
	「！！！！？」
	「れっ、玲音！」
玲音	「—ありす…」
ありす	「—何を—したの？」
玲音	「何も。ただ、見てただけ」
ありす	「—何を…」
	「…」
	「あたし—、あたし自分がおかしくなったって思った。でもやっぱり違うのよ。玲音、どうしてあたしだけ残したの？ どうしてあたしだけ元の記憶を残してるの？ どうしてあたしだけ辛い事をいつまでも思い出にしていなきゃいけないの！ そんなにあたしの事が憎いの、玲音!? こんな、こんなのって、耐えられないよ…」
玲音	「違うんだよ、ありす。あたし、ありすを悲しませたくなかったから…」
ありす	「嘘！こんなことして！」
玲音	「ありすは—、大丈夫だったじゃない」
ありす	「—え…？」
玲音	「ありすは—、あたしが繋げなくっても、あたしの友達になつてくれた…」
ありす	「何の事…言ってるの…」
	「！」
玲音	「ありすだけは—、あたしの—友だち—。繋がってなくても—」
ありす	「つ、繋げるって、何の—事…」
玲音	「あたしと。みんなと」
ありす	「やっ、やめ…」

玲音 「あたしありすが好き」
ありす 「何を言ってるのか判ってんの!? 玲音」
玲音 「元々人間は無意識で繋がってる存在なんだよ。それを繋げ直した
だけ」
ありす 「—玲音が…？」
玲音 「—？—あたしは何もしないよ。あっちと、こっち側と、どっちが
本物とかじゃなく、あたしはいたの。あたしの存在自体が、ワイ
ヤードとリアル・ワールドの領域を崩すプログラムだったの」
ありす 「玲音が—プログラム…」
玲音 「ありすだって、誰だって、みんなアプリケーションでしかないの。
肉体なんて、要らないのホントは」
ありす 「—」
玲音 「—？」
ありす 「—違うよ」
玲音 「え…」
ありす 「—あたしよく判んないけど、玲音が言ってる事、間違ってると思
う。こんなに冷たいけど、でも、生きてるよ、玲音の体」
「—あたしだって、ほら…」
玲音 「—」
ありす 「—」
「ねっ—、どき、どき…」
玲音 「どき、どき」
二人 「—どき、どき…(笑)」
玲音 「どうして、どうしてかなあ？」
ありす 「—怖いからだよ。怖いからどきどきしてる」
玲音 「だって、ありす笑ってる」
ありす 「—うん、そうだよ。でも、怖い。ずっと、怖かったの。なん
でかなあ？」
玲音 「なんでだろ？」
英利 「肉体を失う事が怖いのだ」
「感覚だって脳の刺激でどうにだって得られる。嫌な刺激なんか拒
絶すればいい。楽しくて気持ちがいい事だけ選べばいいのだ。」
玲音 「そうなのかな…」
ありす 「玲音、誰かと話してるの？」
英利 「その子が好きだったら、どうして繋げてあげない？」
玲音 「—判んない。」
ありす 「玲音！誰と話してんのってば!? 玲音！」
英利 「バグっているね。ふっ、いいよ、時間を掛けてデバッグしてあげ

るからね。さあ玲音、おいで」

ありす 「！」

玲音 「一判んないのは、あなたの事、神様」

ありす 「一神様と一話してんの…？」

英利 「判らないのは、何だっていうんだい？玲音」

玲音 「あなたが出来た事は、ワイヤードからデバイスを解放する事。電話とか、テレビとか、ネットワークとか、そういうものが無くちゃあなたは何も出来なかった」

英利 「そうさ。それらは人間の進化に伴って生まれたものじゃないか。最も進化した人間はそれに、より高い機能を持たせる権利がある」

玲音 「一その権利、誰がくれたの？」

英利 「一！」

ありす 「…」

玲音 「地球の固有振動にシンクロさせたコードをプロトコル7に組み込むことで、集会的無意識を意識へと転移させるプログラム。それ、本当にあなたが考えだした事なの？」

英利 「一何を言いたいのだ。まさか一、まさか本当に神がいるなど一！」

玲音 「どっちにしろ、肉体を失ったあなたにはもう判らない事…」

英利 「一嘘だ！僕は一僕は万能なんだよ！ 僕が君をこのリアル・ワールドに肉体化させてあげたんだぞ！ ワイヤードに滞在していた君に自我を与え一それに！」

玲音 「一あたしがそうだとしたら、あなたは一」

英利 「僕は違う!! 僕は一」

ありす 「ひっ」

英利 「ぐおおおおおおお！」

玲音 「一ワイヤードは、リアル・ワールドの上位階層じゃない…」

英利 「どーゆーわけだー！」

玲音 「あなたは確かにワイヤードでは神様だった。じゃあ、ワイヤードが出来る前は一ワイヤードが今のように出来るまで待っていた誰かさんの代理の神様…」

英利 「裏切りだ一うそだあああ」

ありす 「！！！」

玲音 「ありす！」

「あなたには肉体なんて無意味、なんでしょ？」

ありす 「！！！」

玲音 「…」

5 学習指導案（Ⅱ）

映像表現を聴くことの学習指導（Ⅱ）

本次（第4時～第6時）の主な学習目標

アフレコ・ダビングの作業を通じて、映像表現の中で用いられる音声の特徴に気づき、音声表現の豊かさや広がりを理解する。

本次の主な学習活動

前時で完成させたシナリオを元にそれぞれの役割分担に従って、実際にアフレコを試みる。その後、できあがった音声と映像を編集することで、このシーケンスを制作する。又、時間に余裕があれば、出来上がったものを他の班のものと比較し評価し合う。

本次の主な指導上の留意点

アフレコで演者を担当する者は、事前に本作品を観ており、本作品の世界観をある程度理解していることが望ましい。「演じる」のではなく、一字一句を「真似る」が良い。工夫して書いたはずのシナリオでも、実際に声に出してみると、かなりの揺らぎがあることに注意させるとよい。録音する環境が一班毎にしか利用出来ない場合は、他の班の録音の様子を見て、自分たちとの相違点を考えるように指導する。

学習活動	指導上の留意点
1 前次のシナリオを元に、それぞれ役割を決め、アフレコをする。	後の編集作業が容易に進むよう、時間の尺を動画ファイルに合わせるようにアフレコを行わせる。
2 出来上がった音声ファイルを編集し、ビデオファイルにダビングする。	抑揚や間の取り方、台詞の流れ方の緩急など、特色ある表現を聴き取り、真似ることが出来るかという点に注意させる。
3 出来上がった映像を確認し、原作や他の班のものと比較してみる。	随時、机間巡視をして、作業の進み具合を見て、指導してゆく。
4 その結果を発表し合うことで、今回の学習活動を意義を確認する。	出来上がった班から、随時、他

の班のものと比較してゆく。その際、自分たちのシナリオに書き込みをしてゆくとよい。

6 問題点と課題

先ず、今回、敢えて、学習者が難解と感じるだろう『serial experiments lain』という作品を教材として取り上げたが、映像を通じて聴くことの学習指導を行うことにのみ注目するならば、もっと短くて平易な作品が良いのかも知れない。又、本作品中でも、別のシーケンスを選び出すことは可能であろう。例えば、「layer:10 Love」の最初で玲音と英利が対話するところなども良いかも知れない。

とはいえ、前にも触れたが、本作品は映像作品として評価も高く、視聴覚教育の教材として扱うにしても十分に価値あるものと思われる。これを足掛かりとして、例えば、インターネットのバーチャル世界と現実世界や身体的存在としての実存など、学習者に身近で且つ極めて現代的な問題領域を扱ってゆくような単元学習や総合学習は十分に期待されるだろう。例えば、筆者が思いつく限りでも、『情報と生命』（室井尚・吉岡洋共著 新曜社 1993）から「ソフトアエアとしての精神」という文章、或いは、『現代の哲学』（木田元著 講談社学術文庫 1991）のⅡ・Ⅲ章などを併せて読むことで、本作品が現代人に投げかける意義の大きさに気づくことが出来るのではないだろうか。

そして、筆者には、今回のような扱い方をしたとしても、本作品が、アニメという学習者の身近な領域から出発した自己学習の契機になれば良いという望みがあった。それ故、多少の強引さを感じつつも、この作品を教材として選んだ次第である。無論、聞き慣れない用語が多いことや、前後の文脈を知らないで理解し辛いなど、聴くことの困難さがあることから、「聴くこと」の教材としての価値があると判断したことも付け加えておく。この点、現実の様々なメディアの発展を省みれば、「観ること」（そこには当然「聴くこと」も含まれる）の学習指導というものが必要であるように思われてならない。

次に、今回、パソコンを中心とした機器を多く用いる授業を提案したのだが、この点に問題がある。つまり、実際にこのような授業を行うだけの環境が整備されているかどうかということである。又、後半で、学習者に録音・編集という作業をさせることで、最近、話題のメディア・リテラシーを少なからず意図したつもりであるが、ここにも物理的条件も含め問題点は多いように思える。

参考文献

『scenario experiments lain』（小中千昭著 ソニーマガジンス 1988）

『情報と生命』（室井尚・吉岡洋共著 新曜社 1993）

『現代の哲学』（木田元著 講談社学術文庫 1991）

第二節 自分の考えをもちながら聞くことを意識した授業

—インタビューを通して—

滑川史子

目次

- 1, 目的
- 2, 方法
- 3, 授業への提案
- 4, 学習指導案
- 5, まとめと今後の課題

1 目的

(1) 新学習指導要領の示唆すること

平成11年度版学習指導要領では、「話すこと・聞くこと」が重視されるようになった。しかし、「話すこと・聞くこと」は学習者にとって日常の行為である。その技術を習得させようとするだけでは、学習者は「話すこと・聞くこと」の学習に必要性を感じたり、意欲的に取り組んだりしないのではないだろうか。

学習者は「話すこと・聞くこと」によって、他者とコミュニケーションをとっている。しかし、相手にうまく伝えられなかったり、相手が伝えたいことを受け取ることができなかったりすることで、他者との間で誤解が生じ、様々な悩みを抱えていると思われる。

また、それ以前に「話すこと・聞くこと」によって伝え合い、他者と自己を理解しようとしていないのではないだろうか。つまり、学習者は他者について知りたい、理解したいという思いがないと考えられる。

(2) 生きた会話

加藤祥三氏は次のように述べている。

生きた会話と開いた心とは非常に大切な関係にある。会話と知性との関係も大切だが、それ以上だと言える。なぜなら知性が足りなくとも、開いた心からは素晴らしい会話が生まれるが、どんなに知性が高くとも、閉じた心からはいい会話が生まれてこない。(中略)自分の領域に自分の心を閉じこめた人の心は、他の人の言葉や考えを受け容れず、それで会話は、まったく発展性がないものになりがちなのだ。(『会話を楽しむ』P158～P160)

会話において心が開いているか、閉じているかという点が重要視されていることが分かる。心を閉じることで他者を受け入れることができなくなり、会話が発展しない。反対に、心が開いていれば素晴らしい会話、つまり自己を伝え、他者を理解し、会話を発展することができるのである。

よって、「話すこと・聞くこと」の力を高めるにはまず、心を開くことが必要だと言える。それは、「自分のことを伝えたい」、「相手を理解したい」という思いをもつことであると考えられる。

(3) インタビューを通してのねらい

今回、学習者が「自分のことを伝えたい」、「相手を理解したい」という思いをもって「話すこと・書くこと」という活動を行う方法として、インタビューが適していると考えられる。インタビューという活動を通して普段話さない内容を話すことで、インタビューする相手の新たな一面を知る場になると考えるからである。そこで今回は、インタビューを通して自分の考えをもちながら聞くことを意識した授業を構想する。活動中だけでなく、授業後にも「自分のことを伝えたい」、「相手を理解したい」という思いを持たせることにつながるのではないだろうか。

2 方法

(1) インタビューを深める

『音声言語指導大辞典』によると、

「インタビューとは、文章や話の取材を行うために、インタビュアーが話を聞く相手と面談することによって行う、一対一を基本とする対話である。」と定義されている。

インタビューする人は「相手について知りたい」もしくは「相手のことを知ろう」として相手に質問をする。聞かれた人はその質問に、つまり相手が知りたいがっていること、そして自分が伝えたいことを含み込んで答えなければならない。そしてインタビューする人はその答え（相手が伝えようとしていること）を聞き取り、それを広げたりする質問をしていく。このようにインタビューは、直線的ではなく、螺旋状に展開していく。また、そのように展開しなければ、話は深まっていけないだろう。

そしてより話を深めるためには話題に対しての自分の考えをしっかりとたなければならないと考える。考えをもたなければ相手に考えを求めたところで、話は発展しないであろう。自分（インタビューする人）自身も持っている考えと、相手の考えとの間に共通点や相違点を見出すからこそ話が深まっていくと考えられる。そしてインタビューする人もインタビューされる人も質問によって、自らが気付いていなかったことに気付くのではないだろうか。

(2) インタビューの場を整える工夫

先に引用した加藤氏は次のようにも述べる。

開いた心とは安心感から生じる。閉じた心は恐怖心から生じる。その関係は会話のなかに最もよく表れる。他の行為では分からなくとも、会話のなかではそれが明瞭に出る。気持よく喋りあえる時は安心感のある場所であり、話がごちない時はそこに恐怖心があるからだ。これは常識で知っていることだけれども、それを実際の会話では応用しない。相手の心が閉じているのは恐怖心のせいだと知っても、その恐怖心を取り除くような話し方をしない。自分の

場合でも自分の心が固くなる原因を除去すれば、ずっと自由な会話ができるのに、原因である恐怖心はそのままにして、ぎこちない会話をつづける。これは恐怖心が心の習性となり、無意識な支配力となっているからだ。(『会話を楽しむ』P162)

心を開いて、気持ちよく会話をするためには安心感が必要であり、恐怖心を取り除かなければならない分かる。そのために、学習者同士で日常話している言葉、方言を用いてインタビューさせることとする。それによって学習者が安心感をもたせることをねらいとしたい。

3 授業への提案

今回、「学習者が自分の考えをもちながら聞くことを意識する」ことを目的とし、インタビュー活動を行う。それによって、インタビューする相手の新たな一面を知ることができるからである。活動中だけでなく、授業後にも「自分のことを伝えたい」、「相手を理解したい」という思いを持たせることにつながると思われる。

まず、インタビューを行っている2種類のテレビ番組のビデオを見せる。そこで、インタビューを聞き、言葉の違いによる相手の反応、相手への質問やそれに対する受け答え、などの観点について比較させることで、相手に(人間そのものの深さに)深く迫るにはどうしたらよいかを考えさせる。

次にインタビューの質問項目を考える活動を行う。質問項目(話題)は、インタビューされる側にとっては、興味があることや聞いてほしいことを話したいだろう。インタビュアーにとっては、今回普段話さない相手や話さない内容をインタビューによって発見することをねらいとするため、質問しづらいと予想される。そこで、インタビューされる前に自分の興味があることを書かせ、インタビュアーに知らせる。

そして、インタビューの内容を深めるために、話題について本やインターネットを使って調べさせ、インタビュアー自身に考えをもたせる。インタビューの際には自分の考えをもち、それと相手の考えを比較することで共通点・相違点がはっきりし、会話をより深めることができると考えるからである。

インタビューは4人1組のグループで5分間ずつ行うこととし、1人はインタビューをする人(A)、1人はインタビューをされる人(B)、残りの2人はそのインタビューの様子をメモをとりながら観察し、評価する(C)。インタビューの際には、学習者が普段使っている言葉を用い、MDもしくはテープレコーダーに録音する。

インタビュー終了後には、(A)は録音したものを聞き自己評価を行い、(B)はインタビューの感想と(A)の質問や受け答えに関する評価を行う。最後に今回の授業を終えての感想を書かせることで、自分の聞き方について考えさせる。

4 学習指導案

対象 高校2年生

全4時間

学習目標 ①自分の考えを持ちながら聞くことができる。

②「自分のことを伝えたい」、「相手について知りたい」という姿勢をもつ。

第1時の学習目標

- ・インタビューの番組を見て、インタビュアーの長所と短所を考える。
- ・インタビューにおいて相手(の人間そのものの深さ)に迫る工夫について考える。

第1時の指導過程

学習活動	指導上の留意点
1、本時の学習目標を確認する。	・本時の学習目標を告げる。
2、インタビューのテレビ番組を見て比較することで、インタビュアーの長所と短所を考えさせる。	・インタビューのテレビ番組を見させる。 ・それぞれのインタビュアーを比較させることで、長所と短所を考えさせ、プリントに記入させる。
3、プリントに記入したインタビュアーの長所と短所を発表し、インタビューにおいて相手(の人間そのものの深さ)に迫る工夫について考える。	・3でプリントに記入したことを発表させ、メモを取らせる。 ・発表を元に、インタビューにおいて相手(の人間そのものの深さ)に迫る工夫について考えさせる。
4、次時予告	・次の時間にはインタビューの準備を行うことを告げる。

評価の観点 ・インタビュアーの長所と短所を考えることができたか。

・相手(の人間そのものの深さ)に迫る工夫について考えることができたか。

第2時の学習目標

- ・インタビューする話題に関して自らの考えをもつ。
- ・相手に深く迫るインタビューの質問項目を考える。

第2時の指導過程

学習活動	指導上の留意点
------	---------

1、本時の学習目標を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習目標を告げる。 ・グループ分けとインタビューを行う形態について説明する。
2、インタビューする話題に関して自らの考えをもつ。	<ul style="list-style-type: none"> ・(B)は自分が今最も興味があることについてプリントに記入し、(A)に渡す。 ・(B)がプリントに書いたこと、もしくは(A)が(B)に質問したいことについて、自らの考えを書かせる。
3、インタビューの質問項目を考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・質問項目を考えさせる。 ・その際、第1時の4の活動を元に工夫させる。 ・質問項目は相手の答えを予想しながら考えさせる。
4、次時予告	<ul style="list-style-type: none"> ・次の時間にはインタビューを行うことを告げる。

評価の観点

- ・インタビューする話題に関して自らの考えをもつことができたか。
- ・インタビューの質問項目を工夫することができたか。

第3時の学習目標

- ・自分の考えをもち、それと比較しながらインタビューを行う。
- ・インタビューを聞いて、インタビュアーの長所と短所について考える。

第3時の指導過程

学習活動	指導上の留意点
1、本時の学習目標を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習目標を告げる。
2、自分の考えと比較しながらインタビューを行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・インタビューの仕方について確認する。(1グループ四人で5分間ずつ行う。) ・各グループで録音をしながらインタビューを行う。 ・各インタビュー終了後に、メモを書かせ

3、次時予告	る。(3分間) ・本時までの活動のまとめを行うことを告げる。
--------	-----------------------------------

評価の観点 ・自分の考えと比較しながらインタビューを行うことができたか。
 ・インタビュアーの長所と短所について考えることができたか。

第4時の学習目標

- ・他者の意見をふまえて自分の聞き方について考える。

第4時の指導過程

学習活動	指導上の留意点
1、本時の学習目標を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習目標を告げる。
2、録音テープを聞き、インタビューされた人と評価者二人の評価を元に自己評価する。	<ul style="list-style-type: none"> ・インタビューされた感想とインタビュアーへの評価を第三時のメモを元にしてプリントにまとめ、インタビュアーに渡す。 ・録音をテープを聞いて、三人の評価を元に自己評価を行う。
3、本時のまとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・インタビューを終えての感想を書き、提出させる。 ・自分の考えを持ちながら「聞く」ことについて考えさせる。 ・提出した感想をまとめ、後日配布する。

評価の観点 ・他者の意見をふまえて自分の聞き方について考えることができたか。

5 まとめと今後の課題

今回は学習者同士でインタビューを行ったが、今後は学習者が初めて会う人や話をしたことがない人にインタビューを行うことによって、自分の考えを持ちながら聞く力を更に高めることができ

ると考える。それは、単元学習や総合学習の中に位置づけることで効果的に行えるだろう。そうすれば、より自然に「自分のことを伝えたい」、「相手について知りたい」という思いをもつ中で活動を行うことができると思われる。

今回の授業だけでは、学習者が「自分のことを伝えたい」、「相手について知りたい」という思いをもつことはできない。これからも「話すこと・聞くこと」の授業を行うだけではなく、国語教育全体の中で養っていかなければならないと考える。

<参考引用文献>

- ・加島祥造『会話を楽しむ』（岩波新書 1992年9月5日）
- ・高橋俊三『音声言語指導大辞典』（明治書院 1999年4月）
- ・『NHK アナウンス読本』（日本放送協会 昭和55年3月20日）

インタビューを聞いてみよう

日付 ()

氏名 ()

①どのような話題について話していましたか？		
②ゲストに対する質問の仕方(話題の出し方、話の流れ)		
③②に対するゲストの反応		
④その他(気づきや感想)		

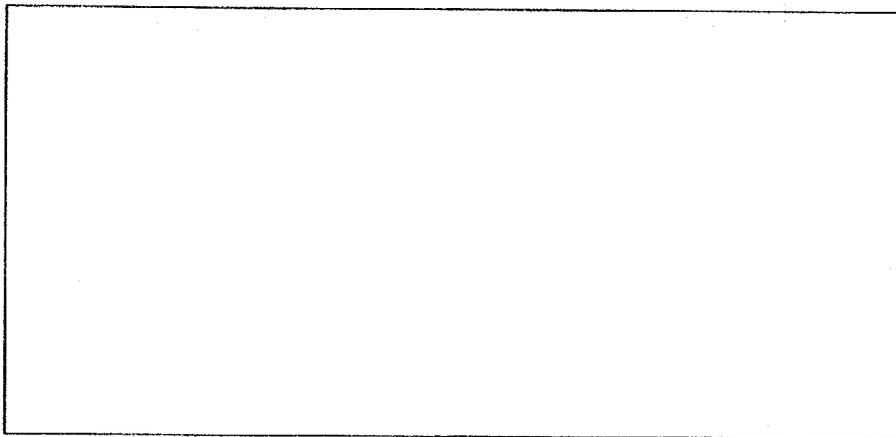
インタビューの前に

日付()

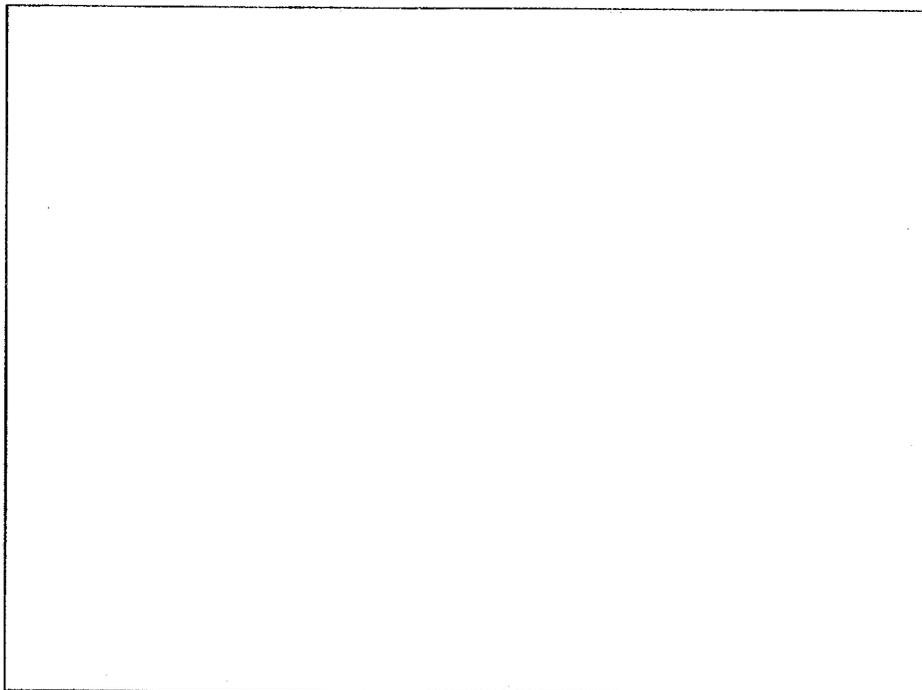
私 は、(

)について話したい。

()について調べてみると、



私が()について思うことは、



さんにインタビュー

日付()

氏名()

	質問	予想される答え
①		
②		
③		
④		

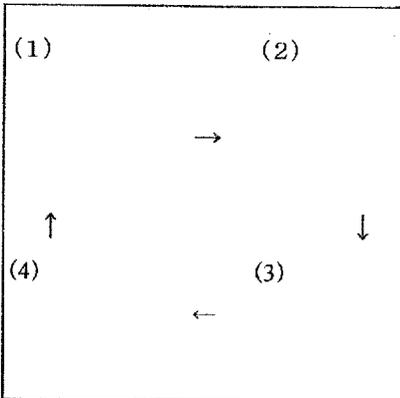
インタビューに挑戦

日付()

- ・1グループ4人。

インタビュアー→インタビューされる人 (インタビューの前にプリントを渡す)

- ・インタビューは5分間行う。
- ・各インタビューを録音する。



- ・残りの2人はインタビューを聞いて、インタビュアーの質問の仕方、それに対する反応について気付いたことをメモする。

- ・各インタビュー終了後に、それぞれプリントに記入する。(3分間)

さんのインタビューを受けて

・質問、返答について思ったこと

・その他気づいたこと

氏名()日付()

インタビュー さんについて	受け手 さんについて

インタビュー さんについ	受け手 さんについて

インタビューを終えて

氏名() 日付()

① 録音テープを聞いて気付いたこと。

② インタビューした人とインタビューを見ていた人の感想と①を比較して気付くこと。

③インタビューを終えての感想

第三節 ニュースをきちんと聞くことの学習

石窪 太郎

目次

- 1、本稿の目的
- 2、話し言葉における聞くことの重要性
- 3、ニュース使用の意義
- 4、授業への提案・学習指導案
- 5、まとめと今後の課題

1、本稿の目的

本稿では、高等学校国語科の授業において、学習者が「話し言葉」と「書き言葉」の組み立ての違いをニュースによって認識し、さらにその内容を理解するための思考過程の違いを認識し、自身の日常生活における聞く態度を改めて認識することを目的とする。

現在、話し言葉教育が注目され、聞くという行為にも注目されている。しかし、子どもたちは、情報として、ものごとをきちんと聞く姿勢は、まだまだ身に付いていないように思われる。そこで、ふだん何気なく聞き過ぎしがちなニュースを題材として使用し、改めて「話し言葉」と「書き言葉」の組み立ての違いなどを理解させ、ニュースの言葉と日常との言葉使い、文章の組み立ての違いに気付かせることを目的とする。ニュースは、聞き手に聞きやすいように作られているが、その一方で、聞き手は、どこまでニュースの内容を正確に受容しているかは疑問である。ニュースの話題によって違いはあるが、聞き手は、最初に自分の耳に入ってくる話題提示のためのトピック・センテンスによって、そのニュースを判断している可能性も多々ある。つまり、ニュースの出だしだけで、内容の大体を把握したと考えている傾向がある。マスメディアによる加工された情報は、そのまま受け取ると発信側の考えを自分のもののように錯覚してしまう恐れがあるため、主体的に取捨選択していく能力を身に付けることが望まれる。ニュースからの情報は、自分に必要なもの以外はある程度おおまかの筋がわかればそれで良いにしたとしても、日常生活には、自身に直接関わる情報も多くある。必要な情報をもニュースのように聞き流して、自己の問題として耳を傾ける態度が欠落しがちなのではないだろうか。本稿は、そのような態度を改める第一歩としたい。

2、話し言葉における聞くことの重要性

話し言葉の基本は、聞くことに始まる。話し言葉の活動は、聞くことと話すことが渾然一体となつてなされるものである。したがって、話を真剣に聞く態度を育てることは第一の基本である。重要な言葉は、繰り返し出てくるものであるし、要旨も表現を変えて繰り返されるものである。話し言葉は、書き言葉ほど文章構造のしっかりしたものがなく、何を伝えたいかが曖昧になりがちである。しかし、日常生活においては、書き言葉ほど文章の論理を正確に相手に伝える必要はなく、聞く側は、話し手の言葉を手がかりに話し手の意図を自分なりに想像する。

現代社会においては、新聞や雑誌、テレビやラジオ、さらにはパソコンの普及により情報が氾濫し

ている。このような中で、情報を正確に受け取ることが重要であるのと同様に、受け取った情報を自己の認識と照らし合わせ、自分なりの認識を修正・変容させ、築き上げていくことが必要になってくる。

そこで本稿では、まず情報を正確に受け取るということに注目し、ラジオのニュースを題材に使用する。ラジオのニュースを題材とする際には、本稿は「聞くこと」に注目するため、できるだけ完成度の高いアナウンサーを選定したい。

3、ニュース使用の意義

ニュースは、現在、情報を伝えるという役割としては、重要な位置にあると考えられる。そこで、本稿では、特にラジオのニュースに着目して取りあげた。ニュースの放送用語は、戦後、新聞記事を参考にしながら作られた。また、ニュースには原稿があり、それをアナウンサーが話すという意味で、話し言葉と書き言葉の中間に位置するものであると考える。また、ニュースは基本的にその内容を伝えるために、まず、トピック・センテンスを用い、その後、詳しく説明するというスタイルをとる。

また、ニュースは、限られた時間内で正確に伝える義務があり、そのため使われる単語は日常生活であまり接することのない「死んだことば」（常套句や、略語など）が多用されることになる。日常生活と異なる話し方、文章の組み立て、「死んだことば」を認識できるという点でニュースを使用する意義がある。

4、授業への提案・学習指導案

4-1 授業への提案

聞くことにおいて、情報を正確に聞き取る態度を育てるとともにラジオのニュースを題材として取り上げて、日常の言葉と異なる、仕組みや「死んだことば」を知ることを目的とする。

NHKと民放一社を取り上げ、3分程度のニュースを聞いてそれを記述させる。NHKは、ニュースをできるだけ事実のみを発信しようとするのに対して、民放は、事実とともにアナウンサー独自の考えを折り込み発信している。ここで、同じ内容の情報で聞き手の受け取り方に違いが出てくる。そこに気付かせ、さらに使い古されて新鮮度のなくなったことば、怠慢によって工夫されていないことばなど「死んだことば」に気付かせる。また、ニュースは、日常生活と異なり、聞き手を引き付けるためトピック・センテンスをはじめにもってきて、後に詳しく説明するという文章の組み立てがある。さらに、政治のニュースなどでは、権威を持たせるためか、漢語を多く使用していたり、一文をできるだけきらないようにしているなどの特徴にも気付かせる。

また、NHKと民放のニュースを比較することにより、その特徴をつかみ、実際にニュースを作る際に役立たせ、情報発信の技術について考えさせる。その際、作り手側の考えや意図はここでは言及しないこととする。

4-2 学習指導計画

対象：高校生

全五時間

本次（第1時～第2時）の学習目標

- ・ニュースを正確に聞き取ることができる。

学習活動	指導上の留意点
1、NHKのニュースを聞き、事柄をおさえる。 2、民放のニュースを聞き、事柄をおさえる。 3、それぞれ文字化する。 4、次回の予告をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・グループごとに、メモをとりながらニュースを聞かせる。 ・観点を示して、それぞれのニュースにおいてわかったことを書かせる。 ・テープあるいはMDに録音したものを各グループに配布し、聞き返ししながら、ニュースを文字化させる。その際、句読点などにも注意して文字化することを指示する。

本次（第3時）の学習目標

- ・日常の言葉とニュースの言葉の違いを認識できる。

学習活動	指導上の留意点
1、前時の学習を振り返る 2、NHKと民放のニュースを文字化したものを見比べ、その特徴を書く。 3、グループごとにそれぞれのニュースの特徴を発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートを参考にさせる。 ・事柄をおさえた際の観点をもとに、2つのニュースを比較させる。 ・グループごとの発表の観点を整理する。

本次（第4時～第6時）の学習目標

・実際に身の回りであることをニュースにすることで、日常の言葉とニュースの違いを理解することができる。

・ニュースとして事実を人にわかりやすく伝えるにはどのようにしたらよいのかを認識できる。

学習活動	指導上の留意点
1、グループごとに学校ニュースを作る。 2、同じニュースでもNHK風のもの、民放風のもの原稿を作る。 3、原稿を読む練習をし、発表に備える。 4、アナウンサー、タイムキーパーなどの役割を決め、発表する。	・トピック語を決め、それに準じて2、3分にニュースをまとめるよう指示する。 ・第1時～第3時で学習したことを踏まえて、原稿を作るよう指導する。 ・グループごとに発表して、それぞれの感想を書くよう指導する。

5、問題点と課題

本単元は、物事を聞く態度を育成するものである。しかし、本単元のみで聞く態度を育成し、聞く能力を身に付けることができるわけではない。しかし、情報を正確に聞き取り、取捨選択することは、日常生活において大変重要である。更に、高等学校では、教師の中には板書をしない人も出てくる。そのような中、重要な情報を耳から受容し、取捨選択しながらノートに整理していかなければならない。本単元によって、少しはそのような日常生活に還元できると考える。

しかし、ふだんからニュースを主体的に取捨選択しながら聞く習慣がまだ身につけていない学習者にとっては、本単元が一過性のものとして終わってしまう可能性もなくはない。また、今回はNHKと民放を取り上げたが、現在では、NHKの歩み寄りによってその差が分かりにくくなっていることも事実であるので、文字化することにより、使用された語彙や文体などの特徴は明らかになるかも知れないが、NHKと民放の特徴の差がはっきりと出るということは断言できない。それが今後の課題である。

資料1

「ニュースをきちんと聞こう」

名前 _____

・MEMO

・ニュースを聞いて

<NHK>

・いつ、どこで、だれが、なにを、どのようにをとらえよう。

・ニュースの内容について（ことば使い、構成など）

・その他

<民放>

・いつ、どこで、だれが、なにを、どのようにをとらえよう。

・ニュースの内容について（ことば使い、構成など）

・その他

資料2

- ・ニュースを文字にしてみよう

<NHK>

<民放>

- ・文字化して改めてわかったそれぞれの特徴

- ・人の発表を聞いて

第四節 「きちんと問い・聞き・答える」基礎レッスン

信木 伸一

目次

1. 目的および方法
2. 本単元の課題：「きちんと問い・聞き・答えること」
3. 授業の提案：学習指導案
4. このレッスンの後に
5. 参考文献

1. 目的および方法

「問い」を投げかけ、しばし考えるための間をとり、指名をして学習者が応答をする、そのような「問い—応答」のコミュニケーションは国語教室においては日常的なものである。一斉授業形態の問答法でなくとも、ディベートや討議の授業でも、「問い—応答」のコミュニケーションは基本形として随所に仕組まれている。その日常的な「問い—応答」のコミュニケーションが、稿者の教室では時としてつまづくことがある。指名されてから考えているのではないか、問いを把握していないのではないか、できるだけ楽に答えようとしているのではないかと思われる様子に出会うことがあるのである。立ち止まることは「問い」を教室に共有する機会であるが、学習者が授業についてきていない状態は深刻である。その学習者は、指名されなかったら、考えることもできなかったからである。学習者が、「どのように聞き・どのように反応するか」ということは、教室がその学習者にとってどういう場になっているかということと密接に関係する。学習者をとりまくさまざまな文化的・社会的状況、学習者が集団の中の自分をどう意識しているかということ、生活習慣のありさま、今の学校教育をどんなものだととらえているのかなど、いろいろな問題の影響下にある。そういったコンテクストを視野に入れた、学習者に価値と魅力のある授業を構築しなくてはならないのはいうまでもないが、それと同時に、「聞くこと」「話すこと」の仕方をきちんと身に付けさせていくこともまた必要である。本稿では、基礎としての「問うこと←聞くこと→答えること」の場に焦点を絞った訓練を考察する。「きちんと問うこと・きちんと聞くこと・きちんと答えること」は日々の授業の中で長期的に繰り返し実際に行いながら身につける力であるが、本稿では、特に学習者たちに自分たちのことばの使い方（言い方、聞き方）意識化させることが有効であると考え、「きちんと問うこと・きちんと聞くこと・きちんと答えること」を取り立てて訓練する授業を構想した。

2. 本単元の課題：「きちんと問い・聞き・答えること」

(1) 野地潤家氏の『話しことば学習論』からの示唆

野地潤家氏は、『話しことば学習論』（公文社 1974.12）の中で、コミュニケーションの基礎訓練の重要性を説かれ、「きちんと聞く力」を「聞解力」、「きちんと答える力」を「話

表力」の中の「応答力」として位置づけておられる。

① 授業におけるコミュニケーション技術の一つは、「指導者⇔学習者」あるいは「学習者⇔学習者」において、話し手の発言を、またその発言の内容・意図を、正確に理解する——きちんと聞き取るということである。正確にかつ的確に受け止め、理解し、それに反応していくことは、すべての学習活動の基礎となる。これを、聞解力（きちんと聞きとる技術）と名づけることもできる。

② つぎには、学習の場において、聞き手によくわかるように、話し手として、積極的にかつ的確に発言し、発表していくことも、授業におけるコミュニケーション技術の基本の一つである。これらは、話表力（きっかりと話し表わす技術）と名づけることもできる。

このコミュニケーション技術の基本としての話表力は、さらに、

(ア) 応答力—問答における答えかた

(イ) 発表力—意見・感想などの発表のしかた

(ウ) 討議力—話しあいのしかた

(エ) 司会力—話しあいの司会のしかた

と四類にわけることができる。

(ア) 応答力は、対話形態における典型的な能力の一つである。発問に対する応答であるが、それは一見受動的であって、そうではない。柔軟で的確な、即決的判断に立って、答えなくてはならない。学習の場における応答のしかたの訓練は、やはりゆるがせにできないものの一つである。((イ) 以下略)

以下、③読解力④表現力をあげられ、①から④のそれぞれの力について、大村はま氏の優れた実践をとりあげて論究されている。その中で、「聞解力（きちんと聞きとる技術）訓練の方法」として、次のように述べられている。

大村はま先生はまた、つぎのようにも、中学生に対して語られる。

「たずねられると」いっても、いろいろな場合があります。どういうとき、どういう人に、どんなことをたずねられているのか、さまざまで、それぞれに、細かい心づかいのいることですが、基本としては、

○たずねられていることはなにか

○どの程度なのか

を、正しくつかんで、

○内容がずれたり ○方向のちがうことを言ったり ○言いたりなくてわからなかったり ○よぶんのことまで言ったりしないようにすることですね。

ここには、きちんと聞きとるため、どうすべきかが、やさしく明快に道破されている。発問のたびに、学習者が漫然と答えるのではなく、たえず問われていることを確かめ、どのように答えるべきかを判断して、述べていくようにさせなくてはならぬ。

(中略)

発問法にじゅうぶん心をくばり、聞きとりを確かにさせていくよう、答え方は

すなわち聞きとりかたであるとわからせることが大事である。

(傍線稿者)

ここで述べられている「問われていること」「どのように答えるべきか」「たずねられていること」について、高校生の段階では、ものごとのどういう面・どういう論点での問い・応答なのかを明確にさせなくてはならないと考える。

また、「応答力」について述べられている次の箇所に注目したい。

「わかりません。」と安易に答えてしまうとき、自己への確かめをさせて、学習者のわかり方に応じて、そのわかっている程度・範囲を、精確に述べさせる練習が必要である。

「問い」に答えられないことは実際にあることである。それを認めた上で、「わからない」ですまさせず、自己の「わからない」状態(=どこまでかはわかっている状態)を意識化してとらえさせ、それをことばにさせる指導である。このことによって、学習者は停滞することなく、前へ進む展望が開けるのである。この「きちんと答えられないときの答え方」の指導は、実際の応答の場で役立つものであり、これをどのように実践していくかが課題である。

(2) 本稿における工夫

(a) 関係性を重視した「問い」と「応答」のあり方

本稿では、ここで取り上げられている「聞解力」と「応答力」をとりたてて、さらに「きちんと問う力」を加えて、それら三つの力がすべて学習者の中で支え合うものだととらえている。「問い」のありかたを学ぶことが、すなわち「聞き方」「答え方」を学ぶことと表裏をなすと考えるからである。また、「問い」も学習者の中に生まれるものだと考えるからである。

授業者の「発問」は、学習者には「先生の出した問題」と受け止められがちである。そこにとどまる以上、学習者の応答は「要求されたから義務的に答える」というレベルにとどまりやすいのではない。「問い」が学習者自身の疑問でなければ、学習者自身にとって考える価値のある「問い」ではないのではないだろうか。学習者自身の内面に、「本当になぜなんだろう」「本当にどういうことなんだろう」とリアリティーのある疑問として生まれなければ、知りたい・解明したいという知的な欲求が湧かないだろう。それが、たとえ、授業者が与えた問いであっても、学習者が真剣に取り組むときには、「発問」に触発されて学習者自身の問いが生まれているといえるのではないだろうか。授業者から直接に与えられたのではなく、学習者の内面に問いが浮かんできた場合には、なおさら教室に還元されなくてはならないはずである。ところが、どう問えばよいのか分からないければ、また問うことになれていなければ、「問い」は学習者の胸の内に押し込めてしまうことになる。ゆえに、「学習者自らが問うこと」のレッスンが必要であると考えられる。

授業者の「発問」のありかたについては、古くから、諸先生よりご教示いただいているところである。古田弘氏の『聞くことの教育』(習文社 1952.2)によれば、谷本富氏が

「良発問に必要な条件」(『教育学講義速記録』1897)を述べておられる。この中の次の箇所が「きちんと問う」ことについて参考になると思われる。

問いの目標が確定していること。一問一事で、一つの問いの中に、二つも三つもの答えを含んではいけぬ。その場合は一つ一つを取り出して聞けばよい。「ガラスは熱したらどうなるか。」「熱くなります。」「それでもよいが、ほかに。」「われます。」「それでもよいが、ほかに。」「膨張します。」「うん、それだ。」のようなのはいけない。

ここで言及されているのは、授業者の「発問」なのであるが、これは、学習者が「きちんと問う」ということを考えるときに注目させたいことである。ここで指摘されているように、「きちんと問う」とは、問いの中に含まれる考える条件(思考の枠組み)が曖昧でないということである。これは、要求している答えのレベルとの整合する必然的な言葉が使われているかどうかの評価の基準であると考えている。テレビに登場するインタビューアが「あなたにとって**とは?」と問っているのを見かけるが、このような問いは、どのレベルで答えて良いのか分からない問い方である。もちろんこの表現自体がまずいものだと批判するつもりはない。この「**」という題目にそって自分で問いを設定しなさいという表現なのであろう。表現自体に具体的な「問い」が示されていないだけなのである。しかし、何かを明らかにしていこうという探求の場にはふさわしい問い方ではないといえるだろう。

また、ものを考えるときにはさまざまな視点があり、論点がかみあわなくては、「問い」と「応答」は行き違いを起こし、議論にもならない、ということを学習者に意識させる必要がある。論点は、「問い」の中にすでにあるということに気づかせていきたい。

また、具体的に問うということは、すでに思考の枠組みを規定するという側面がある。それと同時に問うことによって思考が生まれるという面もある。そのことにも気付かせていきたい。

(b)「きちんと問い・聞き・答えること」の課題

「きちんと聞く」とは、問いが規定した枠組み(条件)をきちんと理解することであると規定したい。聞き手による勘違いやすり替えも行われるが、聞き手が、「問い」を自分の言葉に言い換えることができれば、少なくとも理解したつもりになることができたということである。また、それが正しいかどうかは、「自分がどういう問いであると理解したか」を述べる活動を取り入れることで、同時に明らかにできるだろう。

「きちんと答える」とは、まずは、問いが要求している論点にかみあう応答になっていることだと考えている。さらに、ただ要求にきちんと応えるだけにとどまらず、また、応答が論理的な意見となり得ているかということ把握する力も付けさせたい。

そのためには、「だから、どうなのか」という結論まで到達しているのか、問題提起までにとどめるのか、そういう応答のレベルも意識できなくてはならないだろう。

学習者の「問い」なり「応答」なりの発話を他の学習者が聞こうとしていなければ、やはり、「発問—応答」のコミュニケーションは、授業者←→応答する学習者だけのものに

なってしまう。応答する者の姿勢も、問いに対しての応答という構図では、やはり直接的には質問者に向かって答える姿勢になりがちであるのは否めまい。直接には質問者に答える形であっても、他の学習者たちに向けて発話することを練習させたい。学習者たちは多くの場合、少数の友達同士の会話ではよくしゃべり、多数の人に向かって話をするのは苦手とする。場の公私の別があるとしても、多数の人を意識すること自体に慣れていないという面もある。そうした現状からも、やはり、多数の人に聞かせるという意識を持つことからはじめたい。教室を、「関係性」の確かにある場とするためにも、これは必要なことである。また、集団の中で発言することを敬遠しがちな学習者の抵抗感・恐れ・めんどくささ乗り越えさせる機会をいかにして作っていくかが課題である。

これらの力を訓練するにあたっては、自分たちの言葉の使い方（言い方、聞き方）を意識化してとらえさせることがその出発点になると考えている。

3. 授業の提案：学習指導演

(1) 授業の構想

「聞くこと」「話すこと」の基礎の段階として、「きちんと問うこと」「きちんと聞くこと」・「きちんと答えること」を意識的自覚的にさせることがねらいである。特に学習者たちのこれまでの「応答のありかた」や「問いのもちかた」に目を向けさせ、自分たちの言葉の使い方（言い方、聞き方）を意識してとらえさせることで、言葉の使い手としての能力を向上させようというものである。

方法は、学習者自身に「問い」と「応答」を作らせ、相互評価させることで、「正確な問い」「正確な応答」を考えさせようというものである。したがって、応答の内容自体を価値判断することは今回の授業の目的ではない。具体的な展開は、学習指導演を参照されたい。

論議のかみあう「問い」を考えるためには「応答」が意識されなくてはならないし、よりよき「応答」を考えるためには「問い」が意識されなくてはならない。だから、「問い」と「応答」は相互依存するものとしてとらえなければならないし、学習指導も、それぞれを切り離してドリル学習するよりも、一組のものとして学習させた方がよいと考えられる。とすれば、この授業の展開の仕方自体も、「問い」の学習と「応答」の学習を往復することになると考えた。また「問い」→「応答」が一度きり行われる単純な一問一答だけではなく、「問い」と「応答」のやりとりがあって論議がまとまっていくというプロセスの学習活動も必要である。

この授業で扱う材料には、「学校の制服」を設定した。稿者の勤務する学校では、生徒会が制服委員会という機関を設けて、何年もかけて全校的に討議したテーマである。そうした学習者が一家言持っているようなものであれば、題については、いろいろ想定できるだろう。

「制服」をテーマにして想定される様々な論点とは、おおよそ次のようなものであると考えている。

○デザインの問題

○衣服としての快適さについての問題

○効率の問題

- ・毎朝着ていくものに悩まないですむ、学校生活から冠婚葬祭までこなせるという経済効率上の利便性。
- ・生徒を華美にはしらせない、学外で行う行事で自校の生徒を識別しやすい、など学校管理上の利便性

○制服の持つ意味性の問題

- ・全体主義の象徴、生徒を没個性化させるもの
- ・集団の伝統・集団への帰属意識・集団のアイデンティティーの象徴

必要か不必要か、好きか嫌いか、といった二元論は、これらの諸相それぞれの検討からそれぞれに帰結される結論としてあるのである。先ほどの制服委員会が主催した討論会では、論点のさまざまな意見が飛び交っていたようである。いろいろな論点が出されることで、問題が多角的にとらえられるわけであるから、これも必要な段階である。しかし、さらに、ではどうするかを考えるときに、それぞれの論点でかみあった議論が必要となるのである。

授業の最初の課題を「この学校の制服についてあなたの考えを述べなさい」としたのは、この表現のあいまいさによって、様々な論点を引き出すためである。

ここで学習者が考える「問い」には、二元論的な「～か、それとも…か」というものも想定されよう。そのような「問い」も、なぜそう考えるのかという根拠をつけて応答させるように「問い」を作らせれば、論点の明確なものになる。

評価の方法は、次の二つである。

- ①各グループで作った「問い」のモデルとそれに対する「応答」を学習者同士が相互に評価する。
- ②自分のことばの姿を意識化してとらえさせるために、これまでの自分の「応答」を最後にふりかえり「どこに問題があったのか、どのように述べるべきだったのか」を検討し、学習の成果を自己評価させる。

これらの評価によって、自分たちの言葉の使い方（言い方、聞き方）を意識してとらえさせることを考えている。

対象 高校生1年生

(2) 各時の学習指導案

第一時の学習指導案

学習目標

- ①一つのテーマについて、いろいろな次元の論点があることを知る。
- ②自分たちの「応答」の諸相を論点に分けてとらえることができる。
- ③「正確な問い」と「正確な応答」に必要な条件を知る。

学習活動	指導上の留意点
1. 現在の自分の「応答」をありのままに	

だす。

・(個人活動)

- 「この学校の制服についてあなたの考えを述べなさい」という要求に対する応答案を考える。

2. 自分たちの「応答」の諸相をとらえる。
(グループ活動)

- ①各自の応答案を口頭で発表する。
- ②出された応答を記録し、分類する。

3. 自分たちの「応答」の諸相を俯瞰的に整理する。

(全体活動)

- ①任意のグループから、分類の視点を発表する。
- ②他のグループは、自分たちの分類の視点と比較して、適宜意見を述べる。

3. さまざまな視点の応答の仕方がたの「なぜか」を考える。

4. 論議をかみあわせるために論点を絞った問いをするにはどうしたらよいかという問題意識をもつ。

(全体活動)

5. 「正確な問い」のモデルを作成する。
(グループ活動)

- ①それぞれのグループで、自分たちの考えた応答の中から一つを取り上げ、

○応答は授業者に対してだけではなく、この場にいる者全員に対して行われるものであることを留意させる。

○応答の内容自体の価値を判断することは今回の授業の目的ではないことを確認する。

○分類の基準は学習者自身で考えるよう指示する。

○「(どうでも) いいんじゃないんですか」というような応答も必ずすべて分類に位置づけさせる。

○分類の視点は、板書に図式化する。

○必要・不必要、賛成・反対という二元論の視点はどこに位置づけるのかを考えさせる。

○他のグループから出された視点を板書の図の中にも書き加え、位置づけていく。

○一つのテーマについて、いろいろな次元で論じることができることを確認する。

○最初の「この学校の制服についてあなたの考えを述べなさい」ということは、大きな題を提示したにすぎず、具体的な問いが明らかになっていないことを確認する。

○次の学習活動の展開予定(各グループから「問い」を発表し、他のグループに「応答」してもらおうこと)を念頭に置いて検討を行うよう指示する。

<p>その応答にかみあう論点を導く「問い」のことばを作成する。</p> <p>②自分たちの作った「問い」に対する応答の評価基準を作成する。</p>	<p>○根拠をあげて応答することを要求する「問い」になるように指示する。</p> <p>○「(どうでも) いいんじゃないんですか」というような応答が返ってくることも想定させる。</p>
---	--

第二時の学習指導案

学習目標

- ①「正確な問い」ができる。
- ②「正確な応答」ができる。

学習活動	指導上の留意点
<p>1. 前時に作った「問い」と評価基準をグループ内で確認する。</p> <p>2. 「問い」と「応答」を実地に行う。 (全体活動)</p> <p>①グループ毎に「問い」を発表する</p> <p>②他のグループから、それに対する「応答」をする。</p> <p>3. 「問い」と「応答」が整合していたかどうかを検証し、かみ合っていないときは、さらに「問い」と「応答」のやりとりを行う。</p>	<p>○「問い」と「応答」が整合していない場合、「問い」のことばと「応答」のことばのどちらのどこに、問題があるのかを検討することを予告する。</p> <p>○応答者には、その「問い」がどういう意味であると受け取ったかを自分のことばで言い換えさせる。</p> <p>○あえて質問者の意図をはずした応答を想定することで、問いの具体性を検証させる。</p> <p>○答えにくい時の答え方も考えさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どこまで分かって、何がはっきりしないのかをことばにさせる。 ・問いの意図が分からないと言う場合は、そのことを述べさせる。 <p>○応答者の指名は、発表グループが行う。</p> <p>○「問い」と「応答」の間に、考える時間をとらせる。</p> <p>○「問い」を出したグループからの評価とその評価基準を発表させる。</p> <p>○その「問い」を出したグループの判断が妥当かどうかを判断させる。</p>

<p>(全体活動)</p> <p>以上2と3を各グループの発表ごとに繰り返す。</p> <p>4. 最初の自分の応答をふりかえり、どこに問題があったのか、どのように述べるべきだったのかを用紙に記す。 (個人活動)</p>	<p>○「応答」は、「問い」の要求を満たしていたかを判断させる。</p> <p>○「問い」と「応答」が整合していない場合、「問い」のことばと「応答」のことばのどちらのどこに、問題があるのかを考えさせ、その問題を解決するためのことばを考えさせる。</p> <p>○同種の「問い」を設定したグループはひとまとまりとして扱い、「問い」の「わかりやすさ」「誤解されないための工夫」を競う。</p> <p>○提出させる。</p>
--	---

4. このレッスンの後に

この度の授業構想では、「問い」「応答」の単純なモデルを想定しているにすぎない。実際の間答というものは、問いが重ねられるものである。応答に対して、感想・意見が発せられたり、さらに問いが発せられたりするものである。もっと複雑な往復運動としてのことばのやりとりの実際に即した学習になって、はじめて生きたことばの学習となるだろう。日々の学習活動の中で、よりよい問い方、よりよい応答はいかにあるべきかを意識させていくとり組みが必要である。たとえば、

- ①授業中の「発問」がどういう意味の問いであるかを自分のことばで言い換えさせる。
- ②授業者の「発問」が何を問うているか不明だと学習者が感じたときは、学習者の方から逆に問いの意図を問いただす。
- ③より良い応答を考える場を作って発言させる。

など、ここで練習したことを日々の授業で意識的に実践してみることが必要であろう。

5. 参考文献

野地潤家『話しことば学習論』（共文社 1974.12）

大村はま『大村はま国語教室2 聞くこと・話すことの指導の実際』（筑摩書房 1983.3）

古田 祐 『聞くことの教育』（習文社 1952.2）

第三章 「事物の価値や文化のネットワーク」を 聴き取る音声表現指導

第一節 情報を聴き取る授業の一試案

単元「ひいきのチームは一体どこ？」を通して

小柳 真一郎

目次

1. 目的および方法
2. メディア・リテラシー
3. 教材選定の理由
4. 授業への提案・学習指導案
5. まとめと今後の課題

参考文献

参考資料

1 目的および方法

まず、中学校段階における学習者の「聴き取った情報について考える」行為について考えてみたい。

人の話を聴く際に、その話の内容を聴くだけではなく、そこに込められた他の情報を聴き取ることを日常生活では要求される。例えば、実際に稿者が勤務する中学校で実際にあった話なのだが、体育の授業で「明日雨だったら教室で授業をします。」と次の時間の説明を行ったところ、生徒の何人かが保健の教科書を忘れてきたという。教師側の説明「教室で授業をします。」ということばの中には、「教室で（保健の）授業をします。」という意味が含まれていたのだが、何人かの生徒にはうまく伝わらなかったのだろう。教師の説明不足だと、この問題を捉えることも出来るが、教師の説明をよく聴き取りその内容をきちんと認識していれば、この問題は防げたはずである。聴き取ったことをそのまま受け取ってしまうことが中学生という年代では起こりがちなのではないだろうか。

携帯電話の普及に始まり、インターネットの一般化とまだまだ社会は情報化の道を突き進んでいる。しかし、そこで交わされる情報の多くは額面通りの意味でしか受け取られないことが多い。その情報の真偽、その奥に潜む発信者の意図は必ずしも考慮されるとは限らない。情報を批評、吟味することなしに上澄みだけを捉えることは、危険な状況に自らを追い込むことがあり得る。マルチ商法に騙されるという事件が、その典型であるといえる。このことだけに限らないが、情報が記号的な意味しか持たず、空虚な物としてやり取りされているのが現状だといえる。また、発信者のことば<情報>に対する責任感というものもおざなりであるように思う。

そこで本稿では、ことばを聴き取り、そこに込められた意味を認識し批評することを、初歩的な段階で指導していくための授業案を提示することを目的とする。

方法としては、テレビ番組の中で、その番組が応援しているプロ野球チームの情報が流される際に、どのようなことばが使用されているのかを聴き取り、そこに込められた意味

を考えて批評する形式を採ることにした。以上のような考察をもとに授業案の作成を行う。

2 メディア・リテラシー

授業において「情報の聴き取り、及びその批評」を活動の主眼とするために、メディア・リテラシーについて言及してみたい。

メディア・リテラシーは、定義が難しく、「メディア・スタディズ」「メディア・エデュケーション」と呼ぶ場合もあるという。ここでは、メディア・リテラシーという表記を使用することとする。その定義を分かりやすく説明したものを以下に引用した。

メディア・リテラシーとは、市民がメディアを社会的文脈でクリティカルに分析し、評価し、メディアにアクセスし、多様な形態でコミュニケーションを創り出す力を指す。

また、そのような力の獲得をめざす取り組みもメディア・リテラシーという。

(『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』鈴木みどり 世界思想社1997P8)

このように、メディア・リテラシーは、これまで、情報の一方的な「受け手」であった視聴者や読者をメディアの能動的な「読み手」に位置づけ直すことが狙いであるといえる。

なぜ、今メディア・リテラシーが必要とされるのかについて、1980年代にメディア・リテラシーの理論形成で主導的な役割を果たしてきたレン・マスターマンはその著書『メディアを教える』の中で、

メディアが偏在する社会の現出
意識産業としてのメディアの影響
宣伝情報の増大による情報格差
メディアの権力化によるデモクラシーの危機
映像コミュニケーションの重要性
メディア時代を生きる世代の教育
メディアの私企業化とグローバル化による情報の商業化
と七つの項目を挙げて説明している。

このことをふまえると、メディア・テクノロジーの高度化、インターネットやBS・CS放送などの普及などにもない、時代の要請ともいえる形でメディア・リテラシーは注目され、必要とされてきているのだといえる。

映像文化の発達により、情報は視覚的な面から受容されることが多くなり、そこで取り扱われる音声情報は、先述したように音声信号とでもいうべき内容のない希薄な存在となっているのではないだろうか。そうした影響を受けて、最近のテレビ番組ではテロップ(スーパーという単語の方をよく使用しているようである)を盛んに使用し、視聴者に視覚的に分かりやすく情報を伝えようとしている。分かりやすいことは良いことなのだが、そこには制作者側の「ここが面白いところだ」「このことばに注目してほしい」という意図が

見え隠れし、稿者が重要視している「聴く」活動を軽視している印象を受ける。この他、視聴率を稼ぐために衝撃的な映像を流すといったことに限らず、注目させるための派手な音楽、関心を向けさせるためだけのわざとらしい台詞などにも込められた、制作者側の意図を批評、批判していくことも十分にメディア・リテラシーだといえる。

ただし、メディア・リテラシーを行っていく際に気をつけなければならないこととして、単なる揚げ足を取るだけの批評、批判にならないようにしなければならない。自らの意見をはっきりと打ち出し、その批判の対象となる、メディアを通じた情報のどこが悪いのか、またどのように改善していけばよいのかを、社会に訴えることこそが望まれる。

メディア・リテラシーは、日本における学校教育の場でも、少しずつではあるが実践されつつある。これは喜ばしいことだと思うし、この動きが更なる広がりを持ってくれば良い。しかし、先日気になるニュースを新聞で見かけた。あるテレビ番組が、PTAから有害番組として指定され、内容を変更していくように訴えられていた。PTAは、その番組のスポンサーにも圧力をかけていたようであった。この事態において、その番組をよく見ていた子どもたちの意志が全く持ち出されていないことに対し、稿者は非常な危機感を抱く。番組が悪いならば、そのことを子どもたちが認識した上で、糾弾されるべきであろう。そうでなければ、子どもたちの中にメディア・リテラシーは根付くことはない。大人たちの一方的なメディア・リテラシーでは、いつまでも世間に広く認知されることはないといえるだろう。

子どもたち、さらには世の中の人々にメディア・リテラシーの意識を持つに至らせるには、学校教育の場において他ならないといえるのではないだろうか。

3 教材選定の理由及びその目的

今回、教材として取り扱うことにしたのは、広島テレビで放送されている『進め！スポーツ元気丸』という地方番組と日本テレビ系列で放送されている『スポーツうるぐす』という全国番組の二つの番組である。その中でも、両番組において放送する、その日のプロ野球ニュースを中心に取りあげる。以下、番組について順に説明していく。

『進め！スポーツ元気丸』は、日本テレビ系列の広島テレビが毎日曜に、広島県のスポーツに関する話題を放送している番組である。その中でも、市民球団である広島東洋カープ（以下カープ）に関する話題は、毎回必ず取り扱われる。広島テレビという地方局であるため、また、カープは市民球団であるため、その話題はカープを応援する内容であることが大半である。カープが連敗しているときには、これから何とか巻き返せるであろうといった内容を流し、連勝しているときには、優勝も狙えるのではないかという内容を流す。

地方番組であり、視聴者の多くは広島県下の人々であろうが、中にはそうでない人もいよう。しかも、違う球団のファンにとっては、そこで流される情報<ことば>の一つ一つが気になるものである。それが「優勝できる」といったものであったなら尚更であろう。「聴く」ことを重視した授業を受けてこなかった中学生という年代では、そういったことに気づかない場合が多いのではないだろうか。

ただし断っておきたいのは、決して番組自体を非難しているわけではない。そういったことが起きうる可能性もある、と言いたいのである。子どもたちにも、そのような観点から物事、ここではメディア、を考える姿勢を持ってほしいという願いから、この教材を選んだのである。もちろん、広島という土地柄を考慮し、カープファンの多い学習者の興味、関心を喚起するであろうことも、教材選定の理由である

もう一つの教材、『スポーツうるぐす』は日本テレビほぼ全局で放送される全国区の番組である。東京読売ジャイアンツ（以下ジャイアンツ）を経営する会社の内の一つが日本テレビであるため、この番組での放送は、ジャイアンツに関する話題が中心を占めている。カープとジャイアンツとを比較する場合、ジャイアンツの方が全国的にファンが多いことは、今更確かめなくてもよいであろう。以上のようなことから、全国番組でジャイアンツを応援する話題を取り扱うことは、ごく当然なことだといえる。しかし、ここでも先と同じように、違う球団のファンが嫌悪感を示す可能性が出てくる。

こうしたことから、この教材も先述と同じような理由で選定した。また、二つの教材を取りあげて、比較することで、よりその内容（どのチームを応援しているのか、それはどういったことばから分かるのか）を捉えやすいと判断したためでもある。さらには、両番組とも、どのチームを応援しているかははっきりしている。それは情報の取捨選択という行為に慣れていない中学生が聴いても十分にわかるものである。内容の聞き取りはもちろんだが、今回はテレビ番組が全て公平に作られているわけではない、という事実が気が付かせることを重要視しているため、こういった形を取った。やや発展的な教材としては、NHKのように公平な立場で放送する番組内のスポーツコーナーか、フジテレビ系列の『プロ野球ニュース』といった、解説者が多く誰がどのチームに対して好意を持って解説しているか聴き取る、といったものもあると考えている。

今回は先にあげた二つの教材を使用しての授業案を、次に示していくことにする。

4 授業への提案・学習指導案

今回は、中学生を対象としていることや、メディア・リテラシーの意識が、まだ完全に世間へ浸透していないことをふまえて、『聴き取った情報に関して、批評的に考察する』初歩的な能力の育成を図る。いわば、メディア・リテラシーの入門的な授業といつてよい。

方法は、同じ日に放送された両番組の、プロ野球ニュース（特集などは削除した）を一つずつ聴き取らせ、どちらの番組がどのチームを応援している印象をもったかを尋ね、その印象はどのことばから受けるのか、もう一度聴き取らせ書き取らせる。

ことばを書き取らせたものを、互いに発表しあうことで、それぞれが受け取ることばの印象の違いを認識することができる考えた。また、違うチームのファンが受けた印象から、メディアが人に与える影響と、情報の多様性を検討、考察させていくことにする。

今回の授業は、『聴き取り批評する』という高度なものではあるが、テレビなどを良く見る中学校一年生を対象として行うことにした。これも、メディア・リテラシーに対する意識の浸透を早くから図りたいためである。

学習指導案

単元 「ひいきのチームはいったいどこ？」 <全五時間>

対象学年 中学一年生

第一時の学習目標

放送の内容を聴き取ることができる。

番組が応援していると感じたことばを聴き取り、書き取ることができる。

学習指導過程

学習活動	指導上の留意点
1 本時の学習目標を確認する	<ul style="list-style-type: none">・テレビのことばを聞いてみることを提案し、本時の学習課題の説明を行う。・『スポーツ元気丸』『スポーツうるぐす』を録音したMDを順に聞かせる。・どちらの放送が、どのチームを応援していると感じたか発表させる。・ノートにその印象を受けたことばを書き取るように指示する。書き取れないようであれば繰り返し流す。
2 二つの放送を聞く。	
3 放送を聞いて自分の意見を発表する。	
4 どのことばに、その印象を持ったか再度放送を聴き書き留める。	

第二時の学習目標

批評的な聴き方を知る。

自分以外の意見に触れることができる。

学習指導過程

学習活動	指導上の留意点
1 ノートを見ながら放送を聴き、確認する。	<ul style="list-style-type: none">・放送を流す。書き取ったことばに間違いがないか確認することを指示し、放送を流す。

<p>2 そのことばを選んだ理由を書く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ どうして、そのことばを選んだか、理由をノートに書かせ、発表させる。
<p>3 人によって選んだことばや理由が違う原因を考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 選んだことばや理由の違いが、なぜ起こるのか考えてみることを提案する。
<p>4 テレビの製作者側が、人による感じ取りの違いを考慮しているか、話し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ メディアが視聴者のことをどのように扱っているか、考えさせる。

第三～五時

- ・ 人の意見を聞き、自己の考えを修正する。
- ・ メディアに対しての働きかけを行うことができる。

学習指導過程

学習活動	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> ・ テレビ業界に対する意見を発表する。 ・ クラス内での意見をまとめる。 ・ 学校のホームページにクラスの意見を載せる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ テレビの制作者が一部の人間に対して放送を行ったりする事を考えさせる。 (情報とはどういったものであるのか、メディアの責任感とはなにか。) ・ 意見が統一されなくても、それをクラスの意見として、学校のホームページにおいて発表することを提案する。 ・ ホームページで発表することは、テレビ放送と同じくらい、責任感が問われることを注意する。

6. まとめと今後の課題

今回、メディア・リテラシーという高度な授業を中学生一年生対象に行うという前提で、授業案を作成した。発達段階を考慮すれば、やや難しい授業だとも考えられる。しかし、テレビという生徒の生活において、大きな比重を占めるものに目を向けずして、豊かな言語生活を送れないのではないだろうか。膨大な情報に対し無防備であることは、これからの社会において避けなければならないからである。

教材に関する課題は、プロ野球に興味を持っている土地柄でないと、生徒の興味関心を得にくいことと、男子と女子で授業への意欲が違うのではないかということである。また、教材はプロ野球のニュースでなくとも、バラエティ番組やテレビコマーシャルなどでも授業を立てることも可能である。ホームページ上での発表なども、いまだ中学生にはなじみが薄いものかもしれないが、これからの社会をにらんで行ってみたいと考えた。中学生に情報を発信することの責任感や倫理観がどこまで身に付くか難しいところではあるように思う。これらは今後の課題として考えていきたい。

参考文献

鈴木みどり『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』（世界思想社 1997）

参考資料

「スポーツ元気丸」「スポーツうるぐす」のナレーションをそれぞれ成文化した。
全てを載せることはできないため、各々一部分を抜き出した。(句読点は筆者による)

<スポーツ元気丸>

ナレーション (以下ナレ)

- ・カープ先発のミンチー中四日のマウンドですが、初回は打者三人をわずか八球で仕留め上々の立ち上がりを見せます。

ナレ

- ・八回ピッチャーミンチーから河野に代わります。その河野ツーアウト二、三塁のピンチ。ここで迎えるは四番ローズ。これをセカンドゴロに仕留め横浜の反撃を立ちます。つづく九回もワンアウト一、二塁となりましたが、谷繁を4、6、3のダブルプレーに打ち取り、ゲームセット。カープ快勝です。

<スポーツうるぐす>

ナレ

- ・巨人七回にチャンスがやってきました。ワンアウトでセカンドに清水をおいて三番江藤が、この一発。中日川上のストレートを完璧に捉え、巨人四対三と逆転に成功します。巨人得意の一発で主導権を握るかと思われましたが、八回、ヒットとフォアボールでノーアウト二、三塁となったところで、なんとまさかのパスボール。巨人同点に追いつかれます。

ナレ

- ・九回、中日岩瀬、ギャラードの継投の前に倒れゲームセット。巨人接戦をものにできませんでした。

第二節 対話の中で話し手のことばを受けとめるためのレッスン

— テレビ番組を使って —

信木 伸一

目次

1. 問題意識
2. 本単元の課題：対話において話し手のことばを受けとめること
3. 授業の提案：学習指導案
4. このレッスンの後に
5. 参考文献

1. 問題意識

人と人とは、話をしても、分かり合えないことがある。いや、分かり合えないことばかりだとさえ言えるだろう。今、学校では、分かり合う場をいかに築き上げていくかということが問題なのである。

その場とは人と人との関係のありようであるから、これは、国語の授業だけでなく学習者の生活全般に関わった問題なのであるが、ことばの学習にかかわる国語科の「聞くことの学習」はこの問題に正面から取り組まなければならない。このとき、互いの主義主張が相容れないことは問題ではない。相互理解とは互いが共通の見解を持つことと同義ではないからである。むしろ、自分とは違った他者の見解を理解しようとするこそが相互理解には必要なのである。これは、相手の意見に同意することではなく、ましてや相手は自分とは違うのだということがわかるだけでもない。相手のことばを受けとめるということは、言い換えると、ことばに託された思いを正面から受けとめるということである。もちろん話し手の考え・思いをそっくり受け止めることは限りなく困難な作業であるが、正面から受けとめようすることはできるはずである。正面から受けとめるとは、賛成するか反対するかということとは次元を異にしていて、相手が「どういう思い・願い・価値観（世界観）・欲求に基づいて、どういう根拠をたてて、なにを主張しているのか」を受け止めるということだと考えている。それがなされてこそ人と人が分かり合える関係を築くことも可能になるはずである。

「伝え合う力」を目指そうというとき、確かに、相手に自分の考え・思いを伝えることばの力は鍛えることは必要である。しかし、「伝え合う」とは、相手の考え・思いを受けとめることを合わせた行為であるはずである。このことを意識していなければ、相手に自分をわからせようとするのが、相手を自分の考えに同化させようすることに転じてしまう危険があるだろう。こうした点にも学習者の意識を向けさせたいと考えている。

以上のような問題意識に基づいて、本稿では、日常的な対話の中で、話し手のことばを受けとめる力をつけることをめざす。

2. 本単元の課題：対話において話し手のことばを受けとめること

まず、「事実」として述べられることも、一つの現実認識なのだということを確認しておきたい。「意見と事実を区別して」と言われるときの「事実」とは、「客観的情報」「客観的データ」などと言い換えることができるものを指すのだろう。しかし、述べられた「事実」の妥当性を言うことができたとしても、多面的・多層的な現実からなぜその一つの「事実」＝「客観的データ」を用いたのかというところに恣意・主観が働いていると考えれば、どんな「事実」であれ、学習者に「客観的事実」として絶対化させることは妥当ではないと考える。むしろ、その「事実」＝「客観的データ」を選んだところに、または、どんな「事実」＝「客観的データ」を切り捨てたのかというところに、話し手のどんな現状認識や主張・意図が表れているのかということを見ぬかせるべきだと考える。

一人ひとりのことばは、多面的・多層的な現実世界から、また多面的・多層的な個人の内面から、その一層・一面を切り取っているにすぎない。そのことを意識させることが、学習者たちを「分かり合うことへのあきらめ」へ向かわせたのではいけない。他者のことば・他者の切り取った世界の面にふれることで、世界の認識を広げ、同時に他者の理解を進める学習でありたいと考える。

また、「事実」として述べられていることの妥当性を検証することも必要である。そのためには、まず、「ほんとうにそう言えるのか」と問いながら聞くことができることをまず目指したい。そしてそのような問いが、実際に、「事実」として述べられたことの妥当性を「調べる」活動に向かうように、学習を仕組んでいかななくてはならない。

本単元では、対話において話し手のことばを受けとめることを授業で練習するために、次のような観点を設定した。

A表層レベルの受け止め

まず、学習者が、話されていることについて、「主張・現実認識・例示・問いかけ」のうち、今何がどのように行われているかを意識して聞き分けることができるようにする。そして、それらがどういう「根拠」に基づいて述べられているかを把握できるようにする。「根拠」とは、「主張・現実認識・例示・問いかけ」という発話事実の関係である。「主張」がどういう「現実認識」を根拠にしているのか、「現実認識」がどういう「事実（例示）」を根拠にしているのか、「問いかけ」はどういうことを前提にしているのかという相互の関係を把握しなくてはならない。この根拠の関係がどこかで示されなければ、論理的な話ではなく、感情的な話だということになる。このとき、「ほんとうにそう言えるのか」「ほんとうにそれが根拠になるのか」と問いながら聞くことも必要である。

①主張をとらえること

話し手が何を要求しているかをとらえる。ただし、ここでいう主張は、額面の要求であり、その奥にある思いや願いとは次元が異なると考える。主張のことばは、たとえば「敬語はなくすべきだ」など、「…したい」「…しよう」「…した方がよい」という方策や案が表わされている。

②現実認識のありようをとらえること

話し手が現実をどのように判断しているのか、どんなことを前提にしているのか

をとらえる。現実認識のことばには、たとえば、「敬語を使うと本当の思いが伝えられない」というような現実や現状についての一定の判断が表されている。

③例示をとらえること

話し手がどんなできごとやことがらを根拠にしているのかをとらえる。例示のことばは、たとえば「自分の学校の先生は私たちがタメ口で話しをするのを気にしていない」というような体験や例えを表したものである。どういうことを言うためのものとしてあげられたのかをとらえさせたい。

④問いかけをとらえること

話し手がその場にいる人に考えてほしいこととして提起している視点をとらえる。問いかけのことばは、たとえば、「^{めした}目下からは敬語を使ってほしいと感じるのはなぜ」など、それに答えることで、問題点を絞るものである。

B 深層レベルの受け止め

Aの段階からさらに、発話行為の根底には、どんな思い・願い・価値観（世界観）・欲求があったのかを聞きとるように意識させたい。前述のように、主張していることとそう主張する理由は次元が違うことも多いからである。聞き手の側から言えば、「思いは理解できるが、主張には反対である」という理解のありようもあるだろう。しかし、「話し手の思いは解らないが、主張は自分にとって都合がよいので賛成」というのは、分かり合うことを拒否した状態に等しいだろう。もちろん、話し手が本音で語ろうとしていないときなど、思い・願い・価値観（世界観）・欲求などが隠されてしまってわからないことも多い。分かり合うためには、話し手が本音で語り、聞き手も真剣に聞きとろうとする両方の行為が行われることが前提である。

話し手は自らを形成している価値観（世界観）・欲求にしたがって発話し、聞き手もまた自らを形成している限りなく価値観（世界観）・欲求にしたがって聞く。そして、各人の価値観（世界観）・欲求はそれぞれ別のものである。聞き手が<他者>である話し手を理解するためには、話し手がどのような価値観（世界観）・欲求のもとに話しているかを意識しなくてはならないだろう。そして、同時に自らがどのような価値観（世界観）・欲求のもとに聞いているのかを意識しなくてはならないだろう。「聞くこと」は、他者理解のための行為であると同時に自己理解や自己変革の行為である。学習者にはこのレベルの理解に向かう意識を持たせたいと思う。

以上のような「観点をもって聞く」ということは「意識して聞くこと」であるが、この学習を通してめざすその先は、無意識に「聞き」ながらも、自分の「聞き取り」を自分のことばで説明できる状態になることである。

3. 授業の提案：学習指導案

前述の「話し手のことばを受けとめるための観点をもって聞くこと」のレッスンを具体的に構想する。

「聞くこと」の学習の最も生き生きとした教材は、今日の前で自分に向かって話されることばである。しかし、いきなりその場に臨んでは、自分がどう応答するかということに気持ちがいきってしまい「聞くこと」を意識的にすることができない。そこで、今回の提案では、段階を踏んで練習することにした。

第一段階 — 聞きことに集中する活動

自分の意見を述べる作業はとりあえずは保留しておく。聞いて受けとめることだけに集中させる。聞くのは、テレビ番組である。しかし、テレビ番組の視聴では、目の前の話者と対話しているのと違って、他者の存在を意識しにくい。つまり、応答責任が切実に感じられないのである。このことは、授業に参加しやすいというメリットでもあり、同時に、人の話を聞く態度を本当に養うことにはなりにくいというデメリットでもある。

活動の内容は、主に次の三点である。

- ①今聞いている発言が、主張・現実認識・例示・問いかけのどれに相当するかを聞き分ける。
- ②根拠となることが示されているか、ほんとうにそう言えるのかということを考えながら聞く。
- ③「どういう思い・願い・価値観（世界観）・欲求に基づいて、どういう根拠をたてて、なにを主張しているのか」を聞き取る。

学習者の聞きとる活動には、聞き逃しもあるだろう。ゆえにグループで、また教室全体で聞き取ったことを出し合って、つきあわせて、まとめていく活動をしていきたい。そうすることで、自分の聞き方の足りない点を他の学習者との比較で意識し修正していくことができると考えている。さらに、確認のための視聴を設定することで、自らの「話し手のことばを受けとめるための観点」について評価をさせたい。

第二段階 — 学習者が、自分の意見を述べたり、他の学習者の話を受け止めて聞く活動

「事実」として述べられていることの妥当性を検証する態度を養うため、自分の意見を述べるに際しては、第一段階の聞き取りの活動の中で「ほんとうにそういえるのか」と疑問に思ったことや、調べてみたら理解が深まるだろうと思ったことについて調べる活動を設けたい。例えば、「身近な方言の中の敬語」や「外国語の中の敬語」などについて調べることで、テレビ番組の内容よりもさらに議論が深まるであろう。

このたび教材として扱う番組は、学習者と年代の出演者が互いに自分の本音をぶつけ合う場となっているため、学習者をして黙って見ていられない気持ちにさせるものになっていると思う。学習者は、自分の考えを整理せずにはいられなくなるだろう。この番組に触発されて、学習者の「話したい」「教室の他の人の意見が聞きたい」という欲求が高まり、自分たちのことばを自分たちが聞く学習の場ができあがっていくことを期待している。

教材としてのNHKのテレビ番組「しゃべり場」について

「聞く」ための教材として、今回は、NHKのテレビ番組「しゃべり場」を使用することにした。この番組は、十代の青少年が討論をする番組である。この番組の話し合いの特徴は、番組では「ルール無し、司会者無し、結論なし、大人の参加は1人だけ」と謳われるが、それらはすべて、とことん本音で話し合い、分かり合うことを目指すためだと言える。このような場は、実は、学校現場が求めている教室の姿でもあろう。番組の出演者が、互いに自分の本音をぶつけ合い、相手の本音を受けとめようとしているところが、「発言

の根底にあった思い・願い、さらには話し手の価値観（世界観）・欲求を聞き取る」というこの授業のねらいにふさわしいと考えている。

今回は、2000年5月27日放送の「敬語は本当に必要か」を使って提案する。番組中、この回の提案者は、

「今日の提案は、敬語は必要かということで、おれは、敬語は上下関係から生まれたことばだと思ふし、対等な関係上必要ないと思ふ。だから、どういうとき敬語を使うとか、目上っていう定義は何かとか、そういうことを聞きたいと思ふ。」と問題提起している。これを受けて他の出演者たちが、議論を戦わせる。

番組中、問題になった点をいくつか例示する。

- 敬語を使うことを要求する権力に対する異議
 - 人と人との関係の築き方。親しくなることと敬語の関係。
 - どんな時に敬語を使いたいのか。
 - 「タメ語」（注：なれなれしい友達言葉のこと）が嫌な場。
 - 互いに敬語を使っているときは対等な関係ではないのか。
 - 敬意をどう表すのか。
 - 上下関係のシステムに自分が取り込まれていること。
 - 一度できた目上・目下の関係は変更しにくいこと。
 - 敬語だと言いたいことが話せないのか。
 - 目下目上の関係は本当に必要か。
 - 自分に対して敬語を使われないと嫌だと感じる人は、どういう意識からそう感じるのか。
 - 敬語とは何か。
 - タメでやるのも、押しつけになるのは危険。
 - 社会で当然のようになっていくものに対して受け入れる前に疑問をもつこと。
- 司会の役もいないので、議論が整理されず、再度同じ問題に戻ってくることもあるが、出演者たちの互いの理解は、確かに進んでいる。

対象 高校生2年生

各時の学習指導案

第一時の学習指導案

学習目標

- ①対話において話し手のことばを受けとめるための観点をもつ。
- ②主張・現実認識・例示・問いかけを意識して聞き分ける姿勢をもつ。
- ③根拠となることが示されているか、ほんとうにそう言えるのかということを考えながら聞きとる姿勢を持つ。
- ④話者がどういった思い・願い・価値観（世界観）・欲求のもとに話しているかを意識して聞く姿勢をもつ。

学習活動	指導上の留意点
------	---------

1. 学習目標・学習計画を把握する。	○人と人が分かり合えるためにする学習であることを伝える。
2. 対話において話し手のことばを受けとめるための観点を把握する。 (授業者による説明)	○補助プリント①を使いながら要点だけを説明する。
3. NHK のテレビ番組「しゃべり場」を視聴しながら、主張・現実認識・例示・問いかけなどのうち、今何がどのように行われたかを聞き分けてメモを取る。	○ワークシートにメモを取らせる ○適宜、ビデオを停止して、今の発言が主張・現実認識・例示・問いかけのどれに相当するかを確認させる。 ○根拠となることが示されているか、ほんとうにそう言えるのかということを考えながら聞きとらせる。
4. それぞれの出演者が「どういう思い・願い・価値観（世界観）・欲求に基づいて、どういう根拠をたてて、なにを主張しているのか」を整理する。	○ワークシートに書き込ませる 自分の意識に残っていることだけでよいこととする。
5. 今後の予定を把握する	○次回は、それぞれの聞きとりを出し合って、つきあわせて、まとめていく活動することを予告する。

第二時の学習指導案

学習目標

- ①自らの聞き方を見つめる。
- ②番組の中で出されたさまざまな論点を整理し、「敬語」に関して、さまざまな現実の側面があること、個人の内面にさまざまな側面があることをとらえる。

学習活動	指導上の留意点
1. グループ内で、それぞれの出演者が「どういう思い・願い・価値観（世界観）・欲求に基づいて、どういう根拠をたてて、なにを主張しているのか」についてそれぞれの聞きとりを出し合い、つきあわせて、まとめていく。	○自分の聞き取りと違うものを、それぞれワークシートに書き込ませる。 ○発表グループ以外の者には、自分たちの聞き取りと違うところをワークシートに書き込ませる。

2. まとめた聞きとりを発表する。(任意のグループ)	○自分たちの聞き取りと違うものが出てきたら、ワークシートに書き込ませる。
3. 他のグループから、質問や異議を出し合い、聞きとりを整理していく。	○聞き取りが食い違った場合は、該当箇所を視聴し、発話事実を検討させる。
4. 番組の中の中で出されたさまざまな論点を整理し、「敬語」に関してさまざまな現実の側面があること、個人の内面にさまざまな側面があることをとらえる。	

第三時の学習指導案

学習目標

- ①主張・現実認識・例示・問いかけを意識して聞き分けることができるようになる。
- ②根拠となることが示されているか、ほんとうにそう言えるのかということを考えながら聞きとる姿勢を身につける。
- ③話者がどういう思い・願い・価値観（世界観）・欲求のもとに話しているかを意識して聞くことができるようになる。
- ④自らの聞き方を評価する。

学習活動	指導上の留意点
1. 聞きとりの結果を確認するため、もう一度視聴する。	○ワークシートに修正するところをを赤ペンで書き込ませる。 ○根拠となることが示されているか、ほんとうにそう言えるのかということは今一度確かめながら聞きとらせる。
2. 改めて聞いて、明確になったことを発表する。 また、合わせて、自らの「話し手のことばを受とめるための観点」を自己評価する。	○数人に発表させる。
3. 「敬語は本当に必要か」についての自分の意見を主張・現実認識・例示・問い	○次回「敬語は本当に必要か」についての自分の意見を述べることを目的に、自分

<p>かけの観点から考える。その際、自分が どのような思い・願い・価値観（世界観） ・欲求を持っているのかについて意識 を向ける。</p>	<p>の思い・願い・価値観（世界観）・欲求。 を整理し、どのように主張・現実認識・ 例示・問いかけを行うかを考えさせる。 ○ここまでの聞き取りの活動の中で、「ほ んとうにそういえるのか」と疑問に思っ たことや、調べてみたら理解が深まるだ ろうと思われることを調べさせる。 例：身近な方言の中の敬語 例：家庭での敬語の使われ方 例：学校での敬語の使われ方 例：会社での敬語の使われ方 例：外国語の中の敬語 （調べ方については授業者が相談にのる）</p>
--	---

第四・五時の学習指導案

学習目標

- ①主張・現実認識・例示・問いかけを意識して聞き分けることができるようになる。
- ②根拠となることが示されているか、ほんとうにそう言えるのかということを考えながら聞きとる姿勢を身につける。
- ③話者がどのような思い・願い・価値観（世界観）・欲求のもとに話しているかを意識して聞くことができるようになる。
- ④自らの聞き方を評価する。

学習活動	指導上の留意点
<p>1. 調べてきたことや考えてきたことをもとに、「敬語は本当に必要か」についての意見を述べ合う。</p>	<p>○他者の発言について、主張・現実認識・例示・問いかけを意識して聞き分けることを意識させる ○根拠となることが示されているか、ほんとうにそう言えるのかということを考えながら聞きとらせる。 ○他者の発言について、どのような思い・願い・価値観（世界観）・欲求を持っているのかについて意識を向けさせる。</p>
<p>2. これまで出た発言について、そこにはどのような思い・願い・価値観（世界観）・欲求があるように聞きとったのかを発</p>	<p>○他者からの指摘と発言者本人の思いが食い違っている場合、それで、聞きとり方が誤っていたということにはならない。</p>

表する。

・ 思い・ 願い・ 価値観（世界観）・ 欲求
を指摘された発言者本人は、その聞きと
りに対する意見を述べる。

3. 「これまで自分の聞き方」を振り返っ
て、今回の学習についての感想を書く。

5. このレッスンの後に

このレッスンは、話し手のことばを受けとめる視点を持つためのものであり、この時間だけで「聞いて受け止める力」が身に付くわけではない。この後、「講演を聞く」「討論をする」「意見を発表する」などの様々な場面を通して、日々鍛えられていかななくてはならない。学習者が、無意識に「聞き」ながらも、自分の「聞き取り」を自分のことばで説明できる状態になることが目標である。

5. 参考文献

難波博孝 「モジュール化した自己の、複数の発達」

(井上尚美 編集『言語教育理論の探求』東京書籍 2000.3 P34-P49)

須貝千里 著『<対話>をひらく文学教育—境界認識の成立』(有精堂出版 1989.12)

対話において話し手のことばを受けとめるための観点

「事実」について

「事実」として述べられることに対して、「ほんとうにそう言えるのか」と問いながら聞く。

また、述べられた「事実」の妥当性を言うことができたとしても、多面的・重層的な現実からなぜその一つの「事実」＝「客観的データ」を用いたのかというところに恣意・主観が働いている。その「事実」＝「客観的データ」を選んだところに、または、どんな「事実」＝「客観的データ」を切り捨てたのかというところに、話し手のどんな現状認識や主張・意図が表れているのかということを見ぬく。

今回の授業で用いる観点

A表層レベル

まず、話されていることについて、「主張・現実認識・例示・問いかけ」のうち、何がどのように行われているかを意識して聞き分けることができるようにする。「根拠」とは、「主張・現実認識・例示・問いかけ」という発話事実の関係である。「主張」がどういう「現実認識」を根拠にしているのか、「現実認識」がどういう「事実（例示）」を根拠にしているのかという相互の関係を把握しなくてはならない。この根拠の関係がどこかで示されなければ、論理的な話ではなく、感情的な話だということになる。このとき、「ほんとうにそう言えるのか」「ほんとうにそれが根拠になるのか」と問いながら聞くことも必要である。

①主張をとらえること

話し手が何を要求しているかとをとらえる。ただし、ここでいう主張は、額面の要求であり、その奥にある思いや願いとは次元が異なると考える。主張のことばは、たとえば「敬語はなくすべきだ」など、「…したい」「…しよう」「…した方がよい」という方策や案が表わされている。

②現実認識のありようをとらえること

話し手が現実をどのように判断しているのか、どんなことを前提にしているのかをとらえる。現実認識のことばには、たとえば、「敬語を使うと本当の思いが伝えられない」というような現実や現状についての一定の判断が表されている。

③例示をとらえること

話し手がどんなできごとやことがらを根拠にしているのかをとらえる。例示の

ことばは、たとえば「自分の学校の先生は私たちがタメ口で話しをするのを気にしていない」というような体験や例えを表したものである。どういふことを言うためのものとしてあがられたのかをとらえる。

④問いかけをとらえること

話し手がある場にいる人に考えてほしいこととして提起している視点をとらえる。問いかけのことばは、たとえば、「目下からは敬語を使ってほしいと感じるのはなぜ」など、それに答えることで、問題点を絞るものである。

B 深層レベル

その上で、発話行為の根底には、どんな思い・願い・欲望があったのかを聞きとる。前述のように、主張していることとそう主張する理由は次元が違うことも多いからである。聞き手の側から言えば、「思いは理解できるが、主張には反対である」という理解のありようもあるだろう。しかし、「話し手の思いは解らないが、主張は自分にとって都合がよいので賛成」というのは、分かり合うことを拒否した状態に等しいだろう。もちろん、話し手が本音で語ろうとしていないときなど、思い・願い・欲望などが隠されてしまっていてわからないことも多い。分かり合うためには、話し手が本音で語り、聞き手も真剣に聞きとろうとする両方の行為が行われることが前提である。

話し手は自らを形成している価値観（世界観）・欲求にしたがって発話し、聞き手もまた自らを形成している限りなく価値観（世界観）・欲求にしたがって聞く。そして、それぞれの価値観（世界観）・欲求はそれぞれ別のものである。聞き手が「他者」である話し手を理解するためには、話し手がどのような価値観（世界観）・欲求のもとに話しているかを意識しなくてはならないだろう。そして、同時に自らがどのような価値観（世界観）・欲求のもとに聞いているのかを意識しなくてはならないだろう。「聞くこと」は「他者理解のための行為であると同時に自己理解や自己変革の行為である。

松本 提案者、 劇 作 努 衣 提 案 者、	黒 国 沢 幸 生 子 ヨー カ 一	黒 寺 沢 憲 人 フ ー ト バ ス ト	宮 崎 か お り ツ ン 上 白	小 野 仁 黒 ス ト ラ イ フ
発言メモ				
価値観・世界観				

第三節 プレゼンテーションを使用した聞くことの授業

石窪 太郎

目次

- 1、本稿の目的
- 2、プレゼンテーション使用の意義
- 3、プレゼンテーションにおける「聞くこと」
- 4、授業への提案・学習指導案
- 5、まとめと今後の課題

参考文献

1、本稿の目的

コミュニケーション能力がもてはやされる今日、特に聞く態度に注目が集まる。そこで、本稿では、聞く態度の中でも「耳を傾ける」ということに注目していく。「耳を傾ける」という行為は、話し手の話しに対して聞き手が「耳を傾ける」というシュチュエーションのみで働く行為ではない。つまり、さらに進んで、口には出さないが、相手の思っていることを想定する。そして、自分の論に反映させる際に、話し手は、相手の内言を予想する。そうした意味で「耳を傾ける」行為も日常生活ではあり得る。その際、日常生活に即して、相手の内言の中でも反論や中傷を想定した上で立論していくことも必要であることを生徒たちに理解させる。その初歩段階としてこの2つの働きをプレゼンテーションによって認識することを目的とする。

2、プレゼンテーション使用の意義

現代は情報に溢れ、人はその情報を受動的に受け入れている場合も多いのではなかろうか。〇〇ブームなどというのはいい例だと言える。受け入れることも大切ではあるが、受け入れる側に取捨選択という意識がなければ情報はバンクしてしまう。この取捨選択ということは、情報を受け取る時のみではなく、情報を発信する側にも大切なことである。そこで今回は、情報を受け取る側に注目するのではなく、情報を発信する側に注目したい。そこで、プレゼンテーションという形態をとり、情報の発信の方法に目を向けさせる。

プレゼンテーションは、もとは、広告業会から発したことばであり、広告案をクライアント（依頼人、顧客）に提案し、説明・説得することを意味する。（『日本語会話表現法とプレゼンテーション』P. 86）

ここでは、広告業会に限られて述べられているが、実際には学会の場でも、企業でも広くプレゼンテーションという形式はとられており、広まっていると言える。日本では、音声言語（話しことば）の授業への関心と要望がいつそう高まり、プレゼンテーションを教育の一環に取り入れようとする動きもある。そこで、今回は、プレゼンテーションにおける聞く態度に注目していきたい。

3、プレゼンテーションにおける「聞くこと」

プレゼンテーションにおける「聞くこと」には2つの意味合いがあると考えられる。まず1つは、プレゼンテーションを聞く側がプレゼンテーションをする側の意図や考えを受け取った上で、自己の考えと照らし合わせて、改めて考えを構築し直すこと。2つ目は、プレゼンテーションを行う側が、聞き手の反応を予測してプレゼンテーションに活かす際に、聞き手の内言を想定し、「耳を傾ける」という行為である。

プレゼンテーションは、多かれ少なかれ、最終的には、自分を受け入れてもらうことを視野に入れた行為である。つまり最終的に受け入れてもらうためには、聞き手の反論や、中傷を予測しなければならない。その行為は、聞き手の反論などを直接耳で聞く前に予想するという高度な能力が必要となり、そこでは、相対的な思索しかできないのだと認識することもできる。プレゼンテーションは、自己の意見を他者の前に提示するというだけでなく、相手の立場になって考えるという行為も同時に行わなければならない。さらにその中でも、相手の反論を予想する際に、その反論に対する反論を考えることも必要になる。

4、授業への提案・学習指導案

4-1 授業への提案

修学旅行は、高校生活でも大イベントの1つである。その行き先を4つの選択肢の中から選ぶ行為は、なかなか頭を悩ますものである。そこで、それぞれの行き先を決める際にプレゼンテーションを行う。今回は、韓国、東京、沖縄、北海道の4つにしぼり、それぞれプレゼンテーションすることにする。まだ行き先を決めかねている人は、このプレゼンテーションを聞いた上で参考にする。それぞれ、単に行きたいだけだからという理由で決めるのではなく、そこになぜ行きたいのか、なぜその行き先を薦めたいのかをよく考える場にする。そのようなプレゼンテーションを行うにあたっては、当然メリット、デメリットがあるわけで、デメリットを突かれる可能性を考慮しつつ、メリットをどこまでアピールできるかに関わる。プレゼンテーションを聞く側も、それぞれに「耳を傾ける」態度が要求されるし、行う側も聞き手に「耳を傾ける」態度が要求される。今回は、そのような「耳を傾ける」態度に焦点を当てていく。

4-2 学習指導案

対象：高校2年生

全4時間

第1時～第2時の学習目標

- ・ものごとを相対化して考えることができる。

- ・模擬プレゼンテーションによって相手に訴えるにはどのようにするかを模索する。

学習指導案	指導上の留意点
1、まずグループ分けされたグループごとになぜその行き先に行きたいのかを考える。 2、期待や目的をそれぞれ見つけさせる。 3、プレゼンテーションを行うための準備をする。(チラシなどを使用して自分たちのことばを使い説得力のある工夫をする。) 4、グループ内で模擬プレゼンテーションを試みる。	<ul style="list-style-type: none"> ・その行き先に対してホームページなどで情報を得させる。 ・期待や目的を考えさせる際に、修学旅行であることを特に認識させる。 ・聞き手にどのようにすれば、自分達が薦める行き先に行きたくなるのかを考えさせる。 ・プレゼンテーションを行う側と聞き手側に別れ問題点を追求し本番に備える。

第3時～第4時の学習目標

- ・聞き手の反論を踏まえた上でプレゼンテーションができる。
- ・プレゼンテーションを行った上でさらにどのような問題があるかを認識できる。

学習活動	指導上の留意点
1、模擬プレゼンテーションで出た問題点などを話し合う。 2、プレゼンテーション打ち合わせをする。 3、それぞれのグループごとにプレゼンテーションを行う。 4、ワークシートの発表をしあう。	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合う際に様々な反論などを模索させる。 ・誰が、プレゼンテーションを行うかなどの打ち合わせをさせる。また、出てくるであろう反論をワークシートに書き入れさせ、その対応策も書き入れさせる。 ・他のグループの評価をワークシートに書き入れさせる。 ・他人の意見を聞きどのようにしたらより相手に伝わるか考えさせる。

5、まとめと今後の課題

今回プレゼンテーションという形をとったわけであるが、ふだん人前で話をするということに慣れていない生徒にとって動機づけという点で少し強引すぎた面も窺える。その一方で、自分の考え方を人前で話すという場を提供できることは意義深いと考える。また、ふだん自然に流されがちな、相手の内言に「耳を傾けよう」とする態度を身につける第1歩になるのではなかろうか。

参考文献 古閑 博美『日本語会話表現法とプレゼンテーション』（学文社 1999年4月）

[ワークシート]

名前

自分の行きたい行き先をプレゼンテーションしてみよう

- ・自分達の行き先に対してどのような反論が出るのだろうか？

- ・それに対してどのようなプレゼンテーションにすれば良いのか？

- ・他のグループの工夫されている点（それぞれのグループについて）
 - ・ グループ
 - ・ グループ
 - ・ グループ

- ・他の人の意見を聞いて、自分達のプレゼンテーションをどのように変えるか。

第二部

相互発信型の音声表現教室

第一章 意味発表の指導

第1節 素敵なスピーチを目指した授業

石窪 太郎

目次

- 1、目的・方法
- 2、スピーチとは
- 3、良い話し手を育てるには
- 4、授業への提案・学習指導案
- 5、今後の課題

1、 目的・方法

平成11年度の学習指導要領の中学校国語科の総括目標は、「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。」とされている。元来、「国語をし適切に表現し正確に理解する能力」とは、音声言語と文字言語の両方を含んでいる。したがって、「国語を適切に表現し正確に理解する能力」とは、「話し言葉」と「書き言葉」それぞれを表現するということである。しかし、今まで「話すこと」と「書くこと」とを比較すると「書くこと」に重点を置いていたように思われる。

そこで、本稿では話し言葉教育の中でもスピーチを取り上げ、現代の言語生活の中でどのようなスピーチがあるかを分類する。話し手に注目し、目的にそった話し方、何を話すのか、どのように言い表わすのか、どう伝えるのか、相手を動かす話し方とはどのようなものなのか、非言語コミュニケーションとはどのようなもののかなど、よりよく聞き手に伝えるにはどのような手段があるかを模索するものである。

2、 スピーチとは

スピーチは、表現の目的から大きく分けて三つの形態に分けられる。まず、伝達・報告型である。これは、日常の言語生活の中で、基礎をなす表現活動である。中学校生活の場では、友だちとの情報交換、委員会の報告、生徒会や部活動での説明などがあげられる。次に、意見・主張型のスピーチである。いわゆる自己主張を中心にしたものである。生徒会や各委員会での提案や意見、学級会での意見や批判などがある。最後に感想型のスピーチがある。これは、自己の想像力を働かせ表現する活動である。読書感想や感動体験のスピーチがこれに当たる。伝達・報告型は、情報の正確な把握や収集が何より大切であり、適確な説明や報告などの表現力が要求される。意見・主張型は、事実を正確にとらえ、根拠に基づいてスピーチできる能力が必要であり、相手を説得する技術や論理的に考えを展開する表現力が要求される。感想型は、自分の興味・感心のあるものを、自由な発想の中、楽しく表現し、聞き手に伝える能力を要求される。それぞれ、スピーチの型によって要求されることが少し異なる。しかし、どのようなスピーチでも相手や目的に応じて行われる言語表現活動であり、それは、言語によるコミュニケーションなのであり、聞

き手に対しての配慮はどの型にも必要な要素である。

3、良い話し手を育てるには

良い話し手とは、聞き手が耳を傾けたいくなる話をする事ができるということである。このことは大変難しいことである。コミュニケーションということ考えた場合、人間関係も軽視できない。学校教育において、特に教師と生徒との好ましい人間関係が根底になるのとともに、学習者間の好ましい人間関係も重要となる。いくら素晴らしい授業を作ったとしても良い雰囲気作りがなければそれは成立しない。こうしたことを前提に言語技術の指導に入りたい。話すという行為は書くという行為と表現するという意味では同じであるが、話すという行為が、聴覚に訴え、瞬間的で、感覚的である一方、書くという行為が、視覚に訴え、永続的で、思考的で、論理的であるという意味では異なる。当然、こうした要素は流動的である。しかし、話すという行為が聴覚に訴えるという特徴を常に頭に入れておかなければならない。つまり、話のスピード、大きさ、強弱、間の取り方などが大切になる。また、それと同時に手ぶり、身ぶりなどの非言語的な行為も考慮に入れなければ良い話し手は育成できない。

4、 授業への提案・学習指導案

4-1 授業への提案

新しい学力観に立つ国語科教育が目指す国語科で養う力は、特に話し言葉の指導を重視している。また、知識・理解中心の学力観から、表現する学力観への転換も進んでいる。このような中で、子どもたちはこれから起こるであろう課題や問題に対し、主体的に考え、判断し、解決していく力が必要となる。今回、自分の考えを持ち、表現するということに注目し、スピーチを取り上げた。中学生の段階においてスピーチは特定の人にしかその場は与えられていない。そこで、スピーチが子どもたちにとって、どのように捉えられているのかを確認する上でも、また、そのイメージを広げさせるという意味でも、イメージマップを取り入れた。学校生活で、あるいは社会に出てからもスピーチは様々なところで存在していることに気づかせたい。また、「話す」という行為は相手を意識した行為であり、何かを伝えるためには、相手への心遣いが必要となる。従って、スピーチも相手を意識した行為であるとともに、相手にわかりやすく伝えるための工夫が必要となる。伝達・報告型のスピーチでは、情報の正確な把握や収集が必要であるのとともに、相手にわかりやすく伝えるには、適確な表現力が特に要求される。意見・主張型は、相手を説得させる技術が要求される。感想型は、楽しく表現し、聞き手に伝える能力を要求される。これらのことに付け加え、声の大きさやスピード、目線の取り方、手ぶりや身ぶりの仕方など、内容とは離れた要因も、工夫しなければならないと考える。そのような工夫に気づくことにより今後のスピーチ活動に役立たせるための準備段階としてこの授業を提案したい。

4-2 学習指導案

対象：中学2年生

全3時間

目標

- ・学校生活と社会でのスピーチの違いを認識する。
- ・スピーチにおいてどのようなことが求められているかを認識することができる。

第1時

学習目標

- ・スピーチとはどのようなものかをイメージマップ作成することで認識する。
- ・学校生活の中、あるいは社会ではどのようなスピーチがあるのかがわかる。

学習活動	指導上の留意点
1、スピーチと聞いてどのようなものを想像するか、板書しながら、イメージマップを作成する。（学校生活と社会でのスピーチを比較しながら） 2、イメージマップをもとに学校生活においてどのようなスピーチの場があるか考える。 3、次時の予告をする。	・イメージマップを作る際には、イメージを誘導するような発問は控える。 ・学校生活において、スピーチは、限られた人にしか、その場が与えられていないことを認識させる。 ・学校生活の場以外でのスピーチをTVなどで予習させる。（工夫シートを配っておく。）

第2時

学習目標

- ・学校生活以外の場でのスピーチにはどのようなものがあるかがわかる。
- ・自分たちで調べたスピーチを選別できる。

学習活動	指導上の留意点
1、図書館、あるいはインターネットでスピーチを探す。(家で調べてきたことも含める。) 2、それぞれのスピーチがどのような型になるか考える。 3、次時の予告をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの生活の周りには、様々なスピーチがあることを認識させる。 ・スピーチが伝達・報告型、意見・主張型、感想型、またはその他、どの型になるのかを考えさせる。 ・次時に、それぞれの型の工夫を班ごとで話し合うため、その予習として、個人で考えさせる。

第3時

学習目標

- ・それぞれのスピーチの型における工夫を知り、スピーチに役立たせることができるようにする。

学習活動	指導上の留意点
1、班ごとにそれぞれの型についてどのような工夫があるのか考える。 2、班でまとめたものを発表する。 3、他の班の発表を聞いて、さらに工夫シートに付け加える。	<ul style="list-style-type: none"> ・班ごとに考える際、前時で個人で考えた工夫をもとに班で考えをまとめさせる。 ・班の代表者が、それぞれの型の工夫を発表させる。 ・他の班の発表を聞いて自分たちでは気づかなかったことを工夫シートに付け加えさせる。

4、今後の課題

中学生段階では、まだまだスピーチには馴染みが薄いと考えられる。そこで本発表では、スピーチに対して抱いているイメージを、より現実のスピーチと照らし合わせるとともに、スピーチがどのようなものであるかということを認識できる導入的な授業を提案できたと考える。

スピーチは話し手と聞き手が存在して成り立つものである。しかし、今回は話し手に注目して、聞き手の方には触れていない。スピーチを題材にした授業には話し手、聞き手の両方の育成を考えなければならず、今後の課題としたい。また、実際にスピーチを行う授業と連動していかなければ、この授業は孤立してしまう可能性も考えられる。したがって、今後聞き手の反応を自分のスピーチに役立たせることができるような授業も考えていきたい。

名前

イメージマップ作り

スピーチ（何かを相手に伝えることとは）

イメージマップとは

イメージマップとは、ある事柄に関してそれぞれイメージすることを地図化し、さらに出てきたものに対し、さらにイメージを深めるものである。これを製作することにより、各自がもつ既存の知識を他人のそれと比較することにより、さらに深める効果をもつ。

工夫シート1

A、伝達・報告型

内容

魅力的な工夫がされているか。（総合的に分析する。）

- ・繰り返し
- ・話題のもっていき方
- ・根拠のある話し方
- ・表情
- ・具体的であるか など

B、意見・主張型

内容

魅力的な工夫がされているか。（総合的に分析する。）

- ・繰り返し
- ・話題のもっていき方
- ・根拠のある話し方
- ・表情
- ・具体的であるか など

工夫シート2

C、感想型

内容

魅力的な工夫がされているか。(総合的に分析する。)

- ・繰り返し
- ・話題のもっていき方
- ・根拠のある話し方
- ・表情
- ・具体的であるか など

D、その他

内容

魅力的な工夫がされているか。(総合的に分析する。)

- ・繰り返し
- ・話題のもっていき方
- ・根拠のある話し方
- ・表情
- ・具体的であるか など

第二節 スピーチクレームを通して他者の考えに触れ、 自己の考えを育てる授業

滑川史子

目次

- 1, 目的及び方法
- 2, スピーチについて
 - (1) 従来のスピーチ学習の問題点
 - (2) 問題の解決にむけて
- 3, 単元設定の理由
- 4, 学習指導案
- 5, 反省と今後の課題

1, 目的及び方法

平成11年度の新学習指導要領では「話すこと・聞くこと」が重視され、「伝え合う力を高める」ことが新たに加えられた。国語教育の雑誌を見ると、「伝え合う力を高める」ことに着目した「話すこと・聞くこと」の授業が盛んに行われていることが分かる。しかし、言語活動をいかに工夫して授業で行っていくのが先立って、「話すこと・聞くこと」の授業で学習者にどのような力をつけさせたいのかが疎かになっているのではないだろうか。「話すこと・聞くこと」にまつわる問題について考えてみたい。

「伝え合う力」は、話者が言いたいことを表現して伝達し、受け手がそれを正しく理解するというレベルの問題ではないということである（読むこと書くことも同様）。つまり、発話は、社会文化的な権力関係によって規定されている。また、アイデンティティとの関わりで、自己と他者との関係を閉塞した状況にも追い込んでいく。したがって、私たちはこういうコミュニケーションの特質を理解し、それを相対化したり、ずらしたりする必要がある。つまり、社会的文化的な状況への反省的な認識力を育てることが大事なのである。（松崎正治「社会的文化的な状況への認識力を育てる」『月刊国語教育』2000年1月号p31）

発話は「社会文化的な権力関係によって規定されて」おり、「アイデンティティとの関わりで、自己と他者との関係を閉塞した状況にも追い込んでいく」という特質があるということが分かる。学習者は、コミュニケーションのこのような特質について日々の生活の中でなんとなく感じるがあっても、はっきりと自覚していないのではないだろうか。

「話者が言いたいことを表現して伝達し、受け手がそれを正しく理解する」ために言語技術の育成を重視しているだけでは、これまでの実践と変わらない。コミュニケーションのこのような特質を学習者に自覚させるように促す必要があるのだが、何よりもまず教師が自覚することが必要だろう。学校という場、授業という場において、「教師」と「生徒」

という権力関係が存在しているからである。その関係を教師自身が自覚しなければ、「話すこと・聞くこと」の授業をいくら行っても生徒の本当の声を聞くことができないと考える。

更に「コミュニケーション」の捉え方について検討したい。

コミュニケーションはまだ「伝達」のレベルでしかとらえられず、話しことばの相互交流や共同作業性はなかなか自覚されなかった。（『日本語学』 p 17）

コミュニケーションを話し手、聞き手の両者が作っていくもの、つまり、相互に発信するコミュニケーションとしてとらえ直してみる必要があると考える。

学習者は自己と他者との違いを、互いを尊重し合いながら調和をとっていこうとする態度ではなく、他者を排除しようとする傾向があると考えられる。そこでまず、他者へ関心をもったり、自己の考えを話したいという気持ちをもたせた上で、自己の考えを深化・拡充することを目指したい。

よって今回は、スピーチを通して相手の考えに触れ、自らの考えを育てる授業を構想する。スピーチは自らの考えをまとめ話すことで他者に自分の考えを知らせることができるからである。しかし、従来のスピーチ学習では、相手の考えに触れることができても、それによって自らの考えを深化・拡充すること（自分とは異なった他者の考え方を知ること、自分の主張を強化したりすること）は困難であったように思われる。そこで、次項では従来のスピーチ学習における問題点とその対策について述べていく。

2. スピーチについて

(1) 従来のスピーチ学習の問題点

『音声言語指導大辞典』によると、スピーチは以下のように定義されている。

スピーチとは、場の目的や趣旨に即し、一人の話し手が一人または多数の聞き手に対して、一方的に行う独話形態のことである。話の全過程を通して、話し手は話し手、聞き手は聞き手に固定される。スピーチは、その目的からヒューマン・コミュニケーション型「情報伝達型」「説得型」などに、内容から「体験スピーチ」「自己紹介スピーチ」などに、形態から「テーブルスピーチ」「あいさつ（式辞）」などに分類される。教育の場では、「〇分間スピーチ」と称して、国語科授業はもとより、学級活動などにおいても行うことがある。

スピーチを行うことで、「場の目的や趣旨に即」して話す力をつけることができると言えるが、「一人の話し手が一人または多数の聞き手に対して、一方的に行う独話形態」であるために、話し手聞き手の相互的な交流がないということが問題であろう。

更に、スピーチ学習における問題点を明らかにするために高等学校における実践を見ると、現行の学習指導要領である1997年（平成9年）では、「自己主張」に着目した「話

し方」が行われていた。これは、話し手中心の考え方であると言える。

新学習指導要領公布後の2000年(平成12年)では、「伝え合う力」、「コミュニケーション能力」を育成することに重点がおかれている。これは、話し手と聞き手の相互交流を目指しているためであろう。このように、新学習指導要領によって話し手中心から話し手・聞き手双方を重視するようになってきているが、スピーチ後の評価に問題が残っていると言える。

スピーチ後の評価は、批評カードに採点するもしくは短くコメントするという形式が多く見られる。スピーチを行った学習者は点数を見て、自らのスピーチの長所・短所について具体的に認識することは困難であると考えられる。話し手・聞き手両者について考慮した評価が必要であろう。

『話すことの指導』

- ・進んで自分の経験を話したり、他の人の経験を聞いたりすることで、お互いを知り、心の豊かさを養おうとする態度を身につける。
- ・自らの経験を適切な内容をまとめて、わかりやすく話す工夫をする。
- ・他の人のさまざまな話を正しく聞き、自分の新たな経験として取り入れる。

評価：聞き取りシートに「話の内容」「話し方」「態度」について「大変よい」「よい」「普通」「もう少し」の4段階で評価する。「良かったこと」「気づいたこと」について一言書く。

先に述べたように、評価の方法に問題があることが分かる。「大変よい」と「よい」、では何がどれくらい異なるのであろうか。それは個人の感覚によるところが大きく、そのような評価をされたところで、学習者はどのような点が良く、どのような点を改善すればいいのか分からないだろう。

以上の実践から、スピーチ学習において最も大きな問題は、話し手・聞き手の相互交流があまりなされていないこと、それは聞き手の評価の問題に起因するということ、という二点が挙げられる。

(2) 問題の解決にむけて

前項で挙げた二点の問題について、話し手・聞き手それぞれの問題の解決策を考えてみたい。

a、話し手の問題

①話したいという気持ち

学習者が安心して話したくなるのかということが非常に重要であると言える。例えば、学級内に仲の悪い友達がいるとすれば、自分の思っていることを素直に表すことができないだろう。また、教師との関係をうまく結べていなければ自分の本当の思いを話すことはなく、授業のために作り出した気持ちの入っていない思いを話すことがあるかもしれない。

そのような状況下で話させようとしても、学習者には何の力もつかないと考えられる。

しかしそのために、学習者にクラスメートの前で話す活動をさせない、というのもますます関係を結ぶことを困難にさせ危険であると思われる。活動の際の班編成などに注意を払い、学習者が安心して話ができる場をつくる必要がある。

②スピーチ後のフィードバック

先に挙げたようにスピーチは、「一方的に行う独話形態」を指す。しかし、一方的に話し手が話し聞き手が聞くだけでは、話しっぱなし聞きっぱなしになってしまっていて相互に交流がない。

スピーチを行った後、聞き手からの反応がなければ話し手の思いは宙に浮いてしまう形になるとともに、何を学習したのかの実感もないままだろう。

子どもは、自分の意見に対立した意見の存在を知ることによって、思考の混乱（認知的葛藤）を経験する。（中略）思考力の発達は、知識を教えられたり、手本を模倣したりすること以上に、矛盾に直面した時の認知的葛藤の力によるところが大きい。とくに意見の対立によって生じた矛盾の意識は、重要な意味をもっている。（滝沢武久『子どもの思考力』）

「矛盾に直面した時の認知的葛藤の力」、「意見の対立によって生じた矛盾の意識」によって思考力が発達するということが分かる。つまり、スピーチを行う際「意見の対立」が起こる場を設けることで、「矛盾の意識」を持たせることが重要であると思われる。

b、聞き手の問題

スピーチ学習の実践において、聞き手はスピーチの最中にメモをとり、終了後には話し手への評価や感想を書くという形態が多く見られた。

しかし、評価カードに記入させることで、聞き手は話し手の考えを知りたいと思いがながら聞くようになるだろうか。特に5段階という数字での評価を行わせたところで、それは話し手の話を注意深く聞くことにはつながらないと思う。感想にしても「おもしろかった」、「楽しかった」という言葉が飛び交うだけでは、聞き手の聞く力がつかないだろう。

聞き手がいかに話し手の考えを知りたいと思って話を聞くことができるのかが、スピーチ学習において重要な問題であると考えられる。そこで、「スピーチ」に対する「スピーチクレーム（スピーチに対する主張）」を設定する。そうすることで、真剣に話を聞かざるをえないという状況をつくることできると思われる。

3、単元設定の理由

学習者が他者の考えに触れ、自己の考えを育てることを目的とし、自由なテーマでスピーチを行わせる。スピーチを行うにあたってはまず、自らの考えを明確にもたなければならぬ。そして話すことで、聞き手は話し手の考えに触れることができる。しかし今回、

スピーチクレーンを行うことで、話し手は他者の考えに触れることができるとともに、自らの考えを捉え直すことができると思われる。また、聞き手もスピーチしなければならないという状況であるために、話の内容をより注意深く聞くことができるだろう。

スピーチを行うにあたってはまず、スピーチ原稿をつくり、それをもとにスピーチメモをつくらせる。これは、スピーチの最中に原稿をそのまま読みあげること防ぐためである。班内でスピーチを行い、話し合うことでスピーチ原稿とメモを推敲する。班は、スピーチの内容を深めるために、スピーチのテーマごとに編成するが、その際、人間関係に留意することが必要である。

スピーチはスピーチメモを参考にしながら行う。そしてその様子をビデオにとっておく。カセットやMDに録音するより、ビデオの方が話し方（表情や目線など）にも気付くことができるとともに聞き手の反応についても振り返ることができるからである。

聞き手の方はメモをとりながら聞く。後にスピーチクレーンを行わなければならないので、ただ漫然と聞くのを防ぐことができる。

スピーチ終了後に聞き手は共感点や反論点を書いたメモをもとにスピーチクレーンを行う。この時、先にスピーチを行った学習者は聞き手となる。自らのスピーチについて意見されるという状況であるため、自然と注意深く聞くことができるだろう。他の学習者にとっても自分の考えとは異なる考えに触れる機会となる。つまり、スピーチクレーンによって話し手・聞き手両者にとって自分の気付かなかった他者の考えを知ることが可能になる。

スピーチクレーン終了後に、ビデオを見ることで自己評価を行い、スピーチクレーンによって他者から評価をうけることとなる。そして、スピーチクレーンに対する同意点や反論点をまとめることは、自らの考えを振り返り、それを深化・拡充することにつながると思われる。

4. 学習指導案（全6時間）

対象学年 高校2年生

単元目標 ・自らの意見を明確にする。

・話し聞くことで他者の考えを知り、自らの意見について考える。

・自らの話し方（表情や目線、話す速度など）を知る。

第1～2時の学習目標

・主張したい事柄について考える。

・他者の考えを考慮に入れて、自分の考えを明確にする。

学習活動	指導上の留意点
1、本時の学習目標を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習目標を告げる。 ・スピーチを行う手順を説明する。

2、スピーチ原稿をつくる。	・ワークシートをもとにスピーチ原稿をつくる。
3、スピーチ原稿をもとにスピーチメモをつくる。	・スピーチメモはキーワードやキーセンテンスのみで構成する。
4、班内でスピーチを行い、話し合いをもとにスピーチ原稿・メモを推敲する。	・班ごとにスピーチを行う ・班で長所・短所について話し合い、それをもとに各自、スピーチ原稿・メモを推敲する。
5、次時予告	・スピーチとスピーチに対する主張を行うことを告げる。

評価の観点 ・他者の考えを考慮に入れて自分の考えを明確にすることができたか。

第3～5時の学習目標

- ・聞き手に自らの意見を伝えることを意識して話す。
- ・話し手の意見への共感点・反論点を考えながら聞く。

学習活動	指導上の留意点
1、本時の学習目標を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習目標を告げる。 ・スピーチを行う手順を確認する。
2、スピーチを行い、聞き手はメモをとりながら聞く。	<ul style="list-style-type: none"> ・スピーチメモを参考にしながらスピーチを行う。(1人3分間) ・聞き手はメモをとりながら聞く。 ・スピーチを行っている様子をビデオで撮影する。
3、スピーチに対する主張をスピーチで行い、聞き手はメモをとりながら聞く。	<ul style="list-style-type: none"> ・メモをもとにスピーチメモをつくらせる。 ・指名し、スピーチを行わせる。 ・聞き手はメモをとりながら聞く。
4、次時予告	<ul style="list-style-type: none"> ・自宅や学校でビデオを各自見て、自分のスピーチを行っている様子をビデオで見ながらワークシートに記入しておく。(できない場

	合は第六時で行う。) <ul style="list-style-type: none"> ・スピーチに対する主張をもとにスピーチの内容について考えることを告げる。
--	---

評価の観点 ・聞き手に自らの意見を伝えることを意識して話すことができたか。
 ・話し手の意見への共感点・反論点を考えながら聞くことができたか。

第6時の学習目標

- ・自分の話し方を知る。
- ・自分のスピーチに対する他者の考えを知り、自らの意見について考える。

学習活動	指導上の留意点
1、本時の学習目標を確認する。	・本時の学習目標を告げる。
2、・ビデオを各自見てワークシートに記入する。 ・聞き手のメモやスピーチクレームをもとにスピーチの内容について考える。	・各自自分のスピーチを行っている様子をビデオで見ながらワークシートに記入する。 ・聞き手のメモやスピーチクレームをもとにスピーチの内容について考える。
3、まとめ	・ワークシートを提出させ、まとめた上で配布する。

評価の観点 ・自分の話し方を知ることができたか。
 ・自分のスピーチに対する他者の考えを知り、自らの意見について考えることができたか。

5、反省と今後の課題

今回、スピーチ学習の実践を見ることでその問題点を明らかにしたいと考えた。評価の仕方に問題があることは分かったが、高等学校のスピーチ学習に関する資料を十分に集めることができなかった。そのため、問題点の把握が不十分であると思われる。今後、より多くの資料や実際に行われている授業を見ていくことで、更に問題点について考えていきたい。

スピーチを行うだけではなく、スピーチクレームを設定することで、話し手は聞き手の反応を知ることができただろう。それによって話し手は、自分の思いがうまく伝わらないことに気付いたり、自分とは違った視点からの意見を知ることができたりと、必ずしも自分が意図した通りに聞き手に伝わるわけではないということを実感したはずである。これ

はまさに、コミュニケーションが「話者が言いたいことを表現して伝達し、受け手がそれを正しく理解するというレベルの問題ではない」ということが本授業で明らかになっていると言える。しかし本単元だけではなく、他の「話すこと・聞くこと」の授業も通じてより一層学習者に考えさせなければならない問題である。

〈参考引用文献〉

- ・平成11年度学習指導要領高等学校国語
- ・滝沢武久『子どもの思考力』（岩波新書 1984年7月20日）
- ・高橋俊三『音声言語指導大辞典』（明治書院 1999年4月）
- ・高橋俊三『話すことの指導』（明治図書 1995年3月）
- ・『日本語学』（1998年7月号）
- ・『月刊国語教育』（東京法令出版 1997年6月号 2000年1月号 4月号・6月号）

青年の主張！

氏名 ()

私は () について主張するぞ！	
反論予想	その対処

スピーチメモ

氏名 ()

キーワード	キーセンテンス

青年の主張に対して主張するぞ！(スピーチクレームメモ)

氏名()

私は()さんの()という主張に対して

という同意点・共感点があり、

という反論点があります。

その他に、私はこのように思います。

ビデオに映る自分の姿は？

氏名 ()

私の長所は

という点です。そして、

私の改善すべきだと思った点は、

ということです。

その他

スピーチクレームを聞いて。

氏名 ()

() さんのスピーチクレームを聞いて私は、

という同意点・共感点があり、

という反論点があります。

みんなの意見を聞いた後、主張は変わりましたか？

授業を終えて

氏名 ()

・自分の主張に対して行われたスピーチクレームを聞いて、自分の考えは相手に伝わりましたか？伝わった場合、伝わらなかった場合、それぞれ理由を考えてみましょう。

第二章 情報適応教育の実践

第一節 価値を見定める力を育成する国語教育

— 買い物シミュレーションを通じて —

森 宣浩

目次

1. はじめに - 問題の所在と目的
2. 方法
3. 学習指導案
4. 問題点と課題
5. 資料

1. はじめに 問題の所在と目的

現在、我々は、インターネット環境の普及（携帯電話を含む）や、BS・CSをはじめとした放送チャンネルの多様化などをはじめとして、増加し続ける様々な新しいメディアにさらされていると言えるだろう。無論、これらにより、生活はより便利になるし、新たなコミュニケーションの可能性もあるのだから、むやみに排除しようとするのは、時代に逆流した行為であり、大きな間違いであるのは言うまでもない。

しかしながら、それらを目的に応じて適切に利用するというのは、なかなか難しいことであろう。特に、若い世代は、企業による流行の仮面を被った商業戦略の犠牲に自ら進んでなってしまう傾向があるのは否めないという現実がある。自身にとって、何に価値があり、何に価値がないのかを種々雑多な中から正確に見極める能力を育むことが肝要である。この点、新しい時代に向け、教育の分野が積極的に取り組まなければならない課題であるのは明らかであろう。

時に、インターネットでは、「e-ビジネス」と呼ばれるように、新しい市場が生み出され、参入する企業、利用する消費者ともに増加し続けている。どんな商品でも居ながらにして簡単に手に入る。その便利さは言うまでもない。しかしながら、ネット世界は、未だに不透明な部分も多い。自明ではあるが、実際に商品を自身の目で見、手で触れて選択することすら出来ない。クレジットカード、現金書留、銀行振込、郵便振替と、支払い方法は様々であるものの、統一したシステムというものは未だになく、安全面も含め、消費者として安心できる購買が保障されているわけでもない。例えば、一つのページで買い物をしたら、知らない複数のページから宣伝メールが多く送りつけられ来る、つまり、消費者の個人情報他に漏らされることは、別段、珍しくもないのである。それぞれのホームページは、新聞・雑誌の広告やテレビ・ラジオなど電波媒体のCM同様、美辞麗句はもとより様々な宣伝で彩られ、必要以上に購買意欲をかきたてられる。このような情報の海の中

から、自身の望む物一つを的確に見つけだし、更に他と比較対照し、最も有利な条件で、安全に購入するという事は、買い物に限らず、様々な情報を正確に見極める力へ応用されるのは言うまでもないだろう。

そこで、今回は、インターネットを中心にしたあらゆるメディアを利用して買い物をしてみるという、これからの学習者にとってはより身近であり、かつ、情報利用の根本とも言える力の育成を目指した授業を構想してみたいと思う。

2. 方法

インターネットを利用して買い物のシュミレーションをする。その際、何を買うかは、学習者の任意によるが、どれを買うかについて、商品の機能面や信頼性を含めた価値、及び価格も含めて、インターネットのみならず、新聞・雑誌、カタログなど諸々の出版物からテレビCM・番組に至るまで、手に入るだけの情報を集め、それらを正確に評価して決定するという過程に主眼をおく。この過程を逐次記録し、どうしてその商品はその店で買うに至ったかをまとめて、発表し、評価し合う。例えば、学習者が二輪車を買うと決めたとする。その場合、排気量はどれだけか、何故、その排気量なのか、新車か中古車か、中古車だとしたら、どの点が買う価値があるのか、使用目的とそれに適合したものか、選んだ車種の燃費はどうか、維持費はどうか、性能や安全面はどうか、どの店が一番安くて信頼できるか…、など様々な判断基準が必要となる。このように、学習者が次々と判断基準を発見し、それに対し、情報を収集し、選択・決定してゆくことで、最終的に評価し合う。有意義な買い物できたか、できていなければ、どの点を改めるべきかということを確認する。それ故、同じ分野の商品を買うグループは最低二つは必要である。又、予算や用途などの想定すべき条件は、ある程度、教師側で制限してゆく必要があるだろう。

尚、あくまでシュミレーションであるが、実際に購入するかしないかは、学校の予算の問題もあり難しいところであり、任意とする。勿論、授業の中で実際に購入できた方が、生徒の意欲が段違いになるのは、言うまでもないだろうが。

3. 学習指導案

単元名 買い物シュミレーションを通じた実習

単元設定の目的

インターネットをはじめとして、様々なメディアを利用することを通し、買い物のシュミレーションをする。これにより、日常の社会生活における情報を活用する力の育成を目指す。

単元時間 3時間

対象学年 高等学校第一年学年

第一限目

設定された条件に応じて、どんな情報が必要となるか想定し、収集できる。

学習活動	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> ・購入する品目毎にグループ分けをする。 ・予算などの状況設定を話し合う。 ・設定した状況に応じた選択・判断基準の項目を話し合う。 ・立てた項目毎にどんな情報をどこから集めるかを話し合う。(⇒部に記入してゆく) ・実際に情報を収集、話し合って処理し、その結果を記入してゆく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一つのグループは三、四名、一品目に二、三グループをつくる。 ・時間がかかる場合、随時、教師側から状況設定してゆく。その際、品目毎に多少異なる状況設定をする。 ・情報の入手先など、随時、指導してゆく。 ・学校内で収集できないものがある場合、班内で分担して宿題とする。

第二限目

収集した情報を分析して、最良と思われる買い物を選択できる。

<ul style="list-style-type: none"> ・前時の続き ・最終的に何をかうかを班内で相談して決める。 ・「発表に向けて」を班内で相談して記入しておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作業が進まないところは、他の班に相談させてもよい。 ・「情報収集中に気づいた点」には、次の単元に向け、収集過程で見つけた面白い広告の表現などはメモをとっておくとよい。 ・時間に余裕があれば、本時から発表を始めてもよい。
--	--

第三限目

他班の意見を参考として自己評価できる。

<ul style="list-style-type: none"> ・用意した内容を発表し、簡単な質疑応答をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発表内容は簡潔に。何を何処でいくらで買ったのか。又、それは何故か。結果、その首
---	--

<ul style="list-style-type: none"> ・他班の発表を聞きつつ、随時、ワークシートに記入してゆく。 ・次時まで、記入し終わったワークシートを提出できるようにしておく。 	<p>尾はどうか。質疑応答は品目毎にまとめて行うとよい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・記入のために、話し合う必要がある箇所は宿題とする。
--	---

4. 問題点と課題

今回、買い物のシュミレーションを通じて、情報収集を行い、それを見極める能力の育成を目指した授業を試案してみた。派手な宣伝・広告などに惑わされず、的確に適切な情報を選び出すのであるが、日常的に商業の分野で行われるそれは、学習者にとって身近であり、且つ現実に盛んであるが故に、教材として適当だと、筆者は判断した訳である。しかしながら、商業的ではないもの、つまり、ある集団なり個人なりの商業的なそれとは別の利害による宣伝・広告は、その多くは政治的な意図によるものであろうが、そういったものも現実には存在する。そういったものにさらされた場合、対処する能力というものは、根底は同じだとしても、今回の学習活動では、学習者にあまり意識されないのではないだろうか、という不安が残る。この点に関しては、指導するものの微妙なバランス感覚と豊かな知識・見識が要求されるだろうが、必ず必要とされる方面の能力であることは間違いないであろう。この点、今後の課題としたい。又、今回の試案について言えば、極力、学習者の自主的な発見を望むが故に、学習者自身で決定すべき事項を多く設けた。このため、授業に混乱を招くかも知れず、危うさがある。この点、どの程度、教師が指導をするのか、そのさじ加減といったものも考慮する余地は十分にあると思われる。

5. 資料

○状況設定と作業過程

購入品目 _____

_____ 班

購入目的と用途 _____

設定予算 _____

円

選択・判断条件 _____

○発表に向けて

我が班のアピールできるところ

他班と比較しての相違点や質疑応答で判ったこと

ふり返って考えたこと

名前：

名前：

名前：

名前：

第二節 情報を批判的に捉え、発信する授業

—ポスター・CM・ホームページづくりを通して—

滑川史子

目次

- 1, 目的及び方法
- 2, 広告について
- 3, 授業への提案
- 4, 学習指導案
- 5, 反省と今後の課題

1, 目的及び方法

現在、私たちの周囲には様々な広告があふれかえっている。広告の手段、形態、場所、など多岐にわたっている。そこで毎日のように目にするテレビCMについて取りあげて、広告の受容の問題について考えてみたい。CMディレクターの山内健司氏は現在のCMの流れを次のように捉えている。

いまはCMの全体の流れが、映像主義に寄っているふうに見える。(『広告批評』p92)

山内健司氏の見解は、CMディレクターの中島哲也氏の、自身の手がけるCMについてのインタビューの中で確認することができる。

突き詰めれば、ストーリーも言葉もどうでもよくて、フィルムの質感やムードが自分にぴったり来るとか、映像の伝えたいもの、あるいは発信するものを自由に解釈してもらおう。(『広告批評』p85)

中島哲也氏は「言葉でなく映像を自由に解釈してほしい」という思いのもとにCM制作に携わっていることが分かる。それでは、CMを見る側、視聴者はCMをどのように受容していくのかということについて考えてみたい。

映像が中心となることで、視聴者に「自由に解釈」できるという側面が生じる一方で、視聴者はより感覚的にCMを受容するようになると思われる。「自由に解釈」できると言っても、CMとはそもそも何らかの商品を売り込むために企画されているものであるから、視聴者がそのCMに対して何らかの反応を示すことは、購買意欲につながっていくと思われる。また、感覚的に受容するようになればなるほど、商品をイメージとして捉え、無自覚に受け入れてしまうようになるのではないだろうか。つまり、商品の長所・短所を考えると、批判的な見方ができなくなってしまうと考えられる。

そこで、感覚的にもしくは無自覚に捉えていた、新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、インターネット

など、様々なメディアの宣伝や、キャッチコピーを、言葉で捉え直すことで批評的に見る授業を構想したい。様々なメディアをとりあげることで、メディアの違いによる広告の特色が見えてくるだろうと思われる。

そして、実際に各メディアの特性に即した広告をつくらせたい。そうすることで、すでにつくられた広告について検討するだけでは気付かない特色を発見することができるだろう。

方法としては、文化祭でのとりくみとして、クラスの出し物を効果的に宣伝することを目標として行わせる。作ったものは実際に街角で配布したり、学校や店で流したり、ホームページを公開したりする。実際に行わせることで学習者は真剣に取り組むであろうし、自分たちがつくったものに対して反応があるため、自己評価のみならず、様々な層からの評価を得ることができるだろう。

平成11年公布の学習指導要領、第4款「総合的な学習の時間」に「グループ学習や個人研究などの多様な学習形態、地域の人々の協力も得つつ全教師が一体となって指導に当たるなどの指導体制、地域の教材や学習環境の積極的な活用などについて工夫すること。」とあり、開かれた学校づくりの推進に重点が置かれていることが分かる。今回の活動は、地域社会とも関わる契機にもなるうらと思われる。

2. 広告について

広告媒体の種類については以下のように述べられている。

広告メッセージを見込客に到達させるための伝達手段を広告媒体といいます。広告媒体には新聞、雑誌、ラジオ、テレビ、屋外、交通、映画・スライド、DM、新聞折込広告、POP広告、ノベルティー、その他があります。(清水公一『広告の基本』p62)

また、「広告のプラス機能」、「広告のマイナス機能」として次のように挙げられている。

広告のプラス機能

- 広告は選択の幅を広げ生活を豊かにする
- 広告は商品やサービスに対する信頼を高める
- 広告は生活に潤いをもたらす
- 広告は潜在的欲望を引き出す
- 広告はコストを引き下げる

広告のマイナス機能

- 情報過多の社会を作り出す
 - マスメディアをコントロールする可能性がある
 - 街の景観を悪くしてしまう
 - 広告は浪費を生み出す
 - 消費の画一化、嗜好の均一化をもたらす
- (清水公一『広告の基本』p11)

活動を行っていく中で、このような機能に気付かせ、考えさせたい。先に挙げたように様々な広告媒体があるのだが、今回はポスター・チラシ、CM、ホームページを作成することとする。

<ポスター・チラシについて>

「広告コピーの構成要素」には次のようなものがある。(『広告の基本』p97)

見出し	ヘッドラインともいい、読者の注意を引く短い言葉 興味を抱かせる・本文の閲読を誘因する・見込客の拾い上げに役立つ・本文は読まない人に対しては短いメッセージになる
副見出し	サブヘッドともいい、主見出しを補完するもの 主見出しを補足し、本文の内容を理解させる・本文の内容が二つ以上にわたる場合、各ポイントを強調するのに役立つ
イラスト	イラストレーションの略称で絵や写真、模様の部分 読者の目を捕らえる・本文の閲読を誘引する・形態を具体的に理解させる・インパクト効果がある・イメージ創成に役立つ
シグ	シグナチュアの略称で広告主を明示する部分 広告主独自のトレードマークやロゴタイプはコーポレート・アイデンティティーに役立つ・読者を信頼させる
ボディ	ボディ・コピーともいい、広告コピーの中心部をなす本文 広告主や広告商品を認知、理解、確信させ、行為への誘発を刺激づける・イメージ創成に役立つ

ポスター・チラシ制作において、①見出し②副見出し③イラスト④シグ⑤ボディを観点とした。

<CMについて>

「テレビCMの制作プロセス」として、次のように説明されている。

CMの流れを数コマの絵にし、その左右に映像に関する説明と音声に関する説明を入れたものをストーリーボードといいます。これはCMの台本のようなもので、CMプランナーやCMディレクターが作ります。(『広告の基本』p97)

CMの制作にあたってはストーリーボードを作らせたい。ストーリーボードを作ることで、映像を

言葉で表現させ、感覚的につくることを防ぐことができると考えられる。

<ホームページについて>

「インターネットとホームページ」については次のように説明されている。(『広告の基本』p84)

マルチメディアとはデジタル信号による文字、音、画像等の情報形態の融合システムで、情報形態の変換や情報交換の双方向化、ネットワーク化を含めた総合概念です。その中心にインターネットがあります。(清水公一『広告の基本』p84)

インターネット環境が普及しており、新学習指導要領においてもコンピュータなど情報手段の積極的な活用が重視されている。多くの学習者は受容するにとどまり、ホームページなどを発信する側に立つは少ないと思われる。発信者になることで、受容するだけでは気付かない、発信者側の視点に気付かせたい。

3. 授業への提案

まず、新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、インターネットなど、様々なメディアの宣伝文、キャッチコピーを集め、分析する。

<キャッチコピー例>

新聞	2000年11月6日朝日新聞	朝ごはん実行中！！	朝ごはん実行委員会
テレビ	マックスファクター	「リップフィニティ」	私の唇はなかなか落とせない
チラシ	ハイパーマート東広島店	「2日間限りの激選得値」	
インターネット	激安・アウトレット商品が勢揃い！		
音楽雑誌	「ROCKIN ON JAPAN」	WELCOMEBACK	SPITZ！！2年振りのニュー・アルバム、先行取材ゲット！！
ファッション誌	「オリーブ」	全国9大都市街のおしゃれ大調査。	
	「an・an」	遺伝子が決める、あなたの運命。 女の三大願望叶えます。 すべての「恋愛の悩み」を解決する36のヒント	
	「MENS NON-NO」	Tシャツノチカラ	
マンガ	「少年マガジン」	秋の夜長も大満足！日本一の少年誌！！	

気に入った広告を發表し、なぜその広告(キャッチコピーなど)がいいと思ったのか、理由を考え、發表し、各メディアの特性について考えさせる。

次にチラシ作成・CM・ホームページ作成に分かれて、各メディアの特性を生かすことを考慮に入れ、分析した工夫を生かして、文化祭の広告を作成する。

<ポスター・チラシ班>

・デザインの検討

文章(見出し・副見出し・シグ・ボディなど)、写真、イラスト等の編集

- ・何枚制作するか？
- ・いつ、どこで配布するか？
- ・誰をターゲットにするか？

<CM班>

- ・構想(カット割、時間の検討)
- ・いつ、どこで流すか？
- ・誰をターゲットにするか？

<ホームページ班>

- ・様々なホームページを見て、デザインの参考にする。
 - ・デザインの検討
 - 文章、写真、イラスト等の編集
 - タグ・文字の大きさ太さ、背景に色をつける。
 - 画像の取り込み
- (学校のホームページの中に文化祭のページとして作る。)

各班が学級内でプレゼンテーションを行い、他班の意見をもとに広告を改善し、実際に配布したり流したりする。受容者の反応について話し合い、メディアの違いによる宣伝の特色について再び考えさせることで、受容側と発信側における意識の違いについて気付かせたい。

4, 学習指導案(全6時間)

対象学年 高校1年生

- 単元目標
- ・自らの広告の受容の仕方について考える。
 - ・自らが情報の発信者になることで、情報を発信する各メディアの特色について考える。

第1時の学習目標

- ・自らの広告の受容の仕方について考える・
- ・各メディアの違いによる広告の特色について考える。

学習活動	指導上の留意点
1、本時の学習目標を確認する。	・ 本時の学習目標を告げる。
2、お気に入りの広告を発表する。	・ 各自、用意したお気に入りの広告、好まない広告について、理由とともに発表する。

3、次時予告	・ <ポスター・チラシ班>、<CM班>、<ホームページ班>に分かれて、実際に広告をつくることを告げる。
--------	---

- 評価の観点
- ・自らの広告の受容の仕方について考えることができたか。
 - ・各メディアの違いによる広告の特色について考えることができたか。

第2～4時の学習目標

- ・各メディアの違いによる広告の特色を生かして広告を制作する。

学習活動	指導上の留意点
1、本時の学習目標を確認する。	・ 本時の学習目標を告げる。
2、各班に分かれて、広告をつくる。	・ <ポスター・チラシ班>、<CM班>、<ホームページ班>に分かれる。 ・ 更に情報を集めて検討した上で、広告を作成する。 ・ 各活動は適宜教師に指導をあおぎ、報告書を作成する
3、次時予告	・ 学級内で発表会をすることを告げる。

- 評価の観点 各メディアの違いによる広告の特色を生かして広告を制作することができたか。

第5時の学習目標

- ・制作した広告について批判的に捉える。

学習活動	指導上の留意点
1、本時の学習目標を確認する。	・ 本時の学習目標を告げる。
2、プレゼンテーションを行う。	・ 各班ごとにプレゼンテーションを行い、批評する。 ・ 各班で意見をもとに話し合い、最終的な広告をつくる。
3、次時予告、	・ 実際にポスターを貼る、チラシを配布する、CMを流す インターネットにホームページを流すことを告げる。

- 評価の観点 制作した広告について批判的に捉えることができたか。

第6時の学習目標

- ・受容者の反応をもとに各メディアの違いによる広告の特色について考える。
- ・受容側と発信側における意識の違いについて考える。

学習活動	指導上の留意点
------	---------

1、本時の学習目標を確認する。	・ 本時の学習目標を告げる。
2、広告の反応について話し合う	・ 各班で広告の反応について話し合い、ワークシートにまとめさせる。
3、話し合ったことを発表する。	・ ワークシートをもとに班ごとに発表する。 ・ 各班の反応の共通点と相違点をワークシートにまとめさせる。
4、各広告媒体の特徴について発表する。	・ ワークシートをもとに発表し、新たな意見はワークシートに書き込ませる。

評価の観点 受容者の反応をもとに各メディアの違いによる広告の特色について考えることができたか。

受容側と発信側における意識の違いについて考えることができたか。

5、反省と今後の課題

今回、ポスター・チラシ、CM、ホームページの3つのメディアを取りあげた。複数のメディアを取りあげ、それらを比較・検討することで、各メディアの特色が明らかになると思われる。しかも、教室内の活動にとどまらず、地域社会やインターネットという世界規模に向かって実際に情報を発信するという事は、学習者の学習意欲を高めるだけでなく、情報受信・発信に対しての意識も強まるだろう。

今後は今回取りあげたメディア以外を扱うこと(音声だけのメディアとして校内放送を行うなど)によって、情報発信・情報受信について更に考える授業を構想したい。

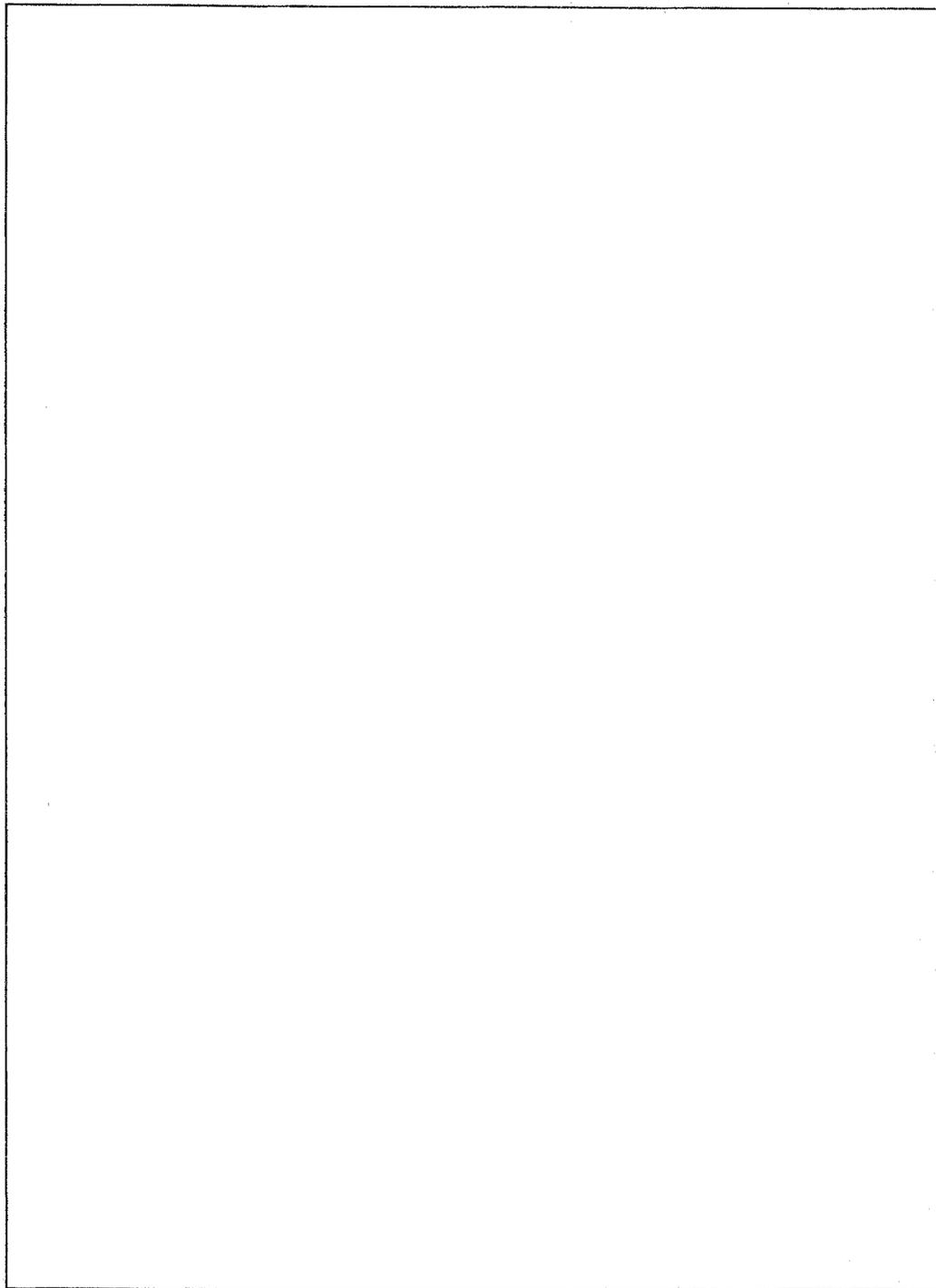
<参考引用文献>

- ・『広告批評』 マドラ出版2000年10月
- ・清水公一『広告の基本』 日本経済新聞社1998年9月18日
- ・『ROCKIN ON JAPAN』7月号 ロッキング・オン平成12年7月16日
- ・『オリープ』2000 7・18 マガジンハウス2000年7月18日
- ・『an・an』 2000 6. 23 (2000年6月23日) 2000 10. 13(2000年10月13日)
2000 10. 20 (2000年10月20日) マガジンハウス
- ・『MENS NON-NO』6月号 集英社平成12年6月1日
- ・『少年マガジン』2000 11/15 講談社平成12年11月15日
- ・<http://www.rakuten.co.jp/>
- ・2000年11月6日朝日新聞

<ポスター・チラシ班> ポスター・チラシをデザインしよう! ~基本編~

氏名()

①見出し②副見出し③イラスト④シグ⑤ボディを考えて基本形となるポスター・チラシをつくろう。



<ポスター・チラシ班> ポスター・チラシをデザインしよう！～応用編～

氏名()

①見出し②副見出し③イラスト④シグ⑤ボディの配置をかえて、レイアウトを考えてみよう。

バージョン①	バージョン②
長所・短所	長所・短所
バージョン③	バージョン④
長所・短所	長所・短所

<CM班> ストーリーボードをつくろう!

氏名()

時間

映像
の説明

音声

①

②

③

④

<ホームページ班> ホームページをひらこう！

氏名()

①タグ・文字・背景の大きさ、太さ、色②イラスト③写真を考えてホームページをデザインしよう。

バージョン①	バージョン②
長所・短所	長所・短所
バージョン③	バージョン④
長所・短所	長所・短所

<ポスター・チラシ><CM><ホームページ>の違いは？

氏名()

班	共通点	相違点
ポスター・チラシ班		
CM班		
ホームページ班		
気づき・意見		

第三章 言語攻略の指導

第一節 サブカルから問題を考えて意見文を書く授業

森 宣浩

目次

- 1 はじめに
- 2 方法
- 3 学習指導案
- 4 問題点と課題
- 5 資料

1 はじめに

a 無気力・無関心は事実か—現状の考察から

現代の若者を批判する際、よく無気力や無関心という言葉が用いられる。では、何に対して、「無気力」「無関心」なのかというと、社会一般ということになるだろう。政治や経済をはじめとして、現代社会で問題とされることに対して無気力・無関心というわけである。

しかしながら、選挙だけを見ても、所謂「無党派層」や投票率の減少など、一方的に若者ばかりが無気力・無関心という訳ではあるまい。今日の日本人全体が自身を含んだ世界に対しての積極的な働きかけを拒否しているかのように見えるのである。

そのような中、将来を担う若者たちに対し、依然として昔と変わらぬ指導法を以てしたところで、つまり、教科書や新聞など、権威的なものを押しつけ、読ませるなどしたところで、変わらずに拒絶されるのは明らかである。寧ろ、そんな旧態然とした指導法にこそ、今日の「無気力」「無関心」の病根であったのではないだろうか。勿論、筆者は、それらが全く無価値だということではない。が、今日的な状況の中では、もはや、別の方策を選択する必要があると言わざるを得ないのである。

例えば、現在、若者たちに絶大な人気を誇る『ゴーマニズム宣言』（以下『ゴ一宣』）というマンガがある。マンガにより、作者・小林よしのりの政治的・社会的主張を著したものであるが、いささか内容に偏りがあり、陳腐であるのは否めない。しかし、マンガという受け入れられやすいメディアに拠るが故に、この作品は若者たちに社会を意識させる格好の入門書となり得ているのである。

が、問題は、それを受容する若者たちが、『ゴ一宣』のみに留まり、他の意見・主張に接しないがため、それを絶対視してしまうことである。これは、ある意味では洗脳に他ならない。単一の価値観やイデオロギーに取り込まれてしまう危険性が十分に考えられる。

そのような現実も知らずに、変わらず学習者の現実と乖離した授業を展開するという教育者がいるとしたら、全く残念だと言わざるを得ないだろう。『ゴー宣』の例を挙げるまでもなく、学習者は決して大人が考える意味で無気力・無関心なのではない。学校教育が時代の流れというものに対して、遅鈍過ぎたまでのことである。新しい時代に対応した、つまり、現在、そして近い将来の学習者たちに適した指導を模索することこそ急務なのである。

b 問題はどこにでもある一考える契機としてサブカルを

さて、『ゴー宣』の例を挙げたが、今日では、漫画が一大メディアとなっていることは疑うまでもない。例えば、この呼び方には多少の問題があるのだろうが、最近の所謂「純文学的」な書籍は、マンガの前に風前の灯火と言って良いだろう。もし仮に、国語教育が文学教育を放棄したとすれば、文学はその大きな宿り木の一つを失い、経済面での瓦解は免れないだろう。

このように、マンガをはじめとした、アニメ、ゲーム、ノベルズなど所謂「サブカル」系メディアは、もはや「サブ」と言う名に相応しくないほどに「メインカルチャー」を凌いでいる。そして、幸か不幸か、公教育という名の下、現行の体制では、このメインカルチャーこそがカリキュラムとなっているわけである。当然、それらは、現代の若者の間では、受験という制度もあって、忌み嫌われるものとなっており、それに対してサブカルが歓迎されているという図式が成り立っていると言えよう。

そのような中、『ゴー宣』は、それ自体の善し悪しはさておき、サブカルながらも、若者の目を社会に向けさせる格好の契機となっているという、現実がある。皮肉にも、学習者を向社会的にさせるはずの教科書がその役割を果たさず、対立するところのマンガがその代わりを果たしているのである。このような現実を省みるに、指導する側としてこの状況を利用しない手はないのではないだろうか。それは、多くの社会学者がサブカルを自身の論に援用するのを見れば、容易に理解できよう。

無論、だからといって、すぐに『ゴー宣』を教材にしろというのではない。学習者が考える契機となり得るものは、教科書だけではなく、むしろ、学校の外でも学習者の身の回りに存在している、ということに気づき、気づかせる必要がある、ということなのである。問題はどこにでもある。学習者が生活している日常の中には、社会と関係のないものは何もないのである。

マンガ、アニメ、ゲーム、ノベルズ、と学習者の身の回りにはサブカルが溢れている。その多くは、消費され、すぐにでも忘れ去られる物語ばかりである。しかしながら、その中には、常にそれを受容する者に現実を喚起させるものもある。特に、優れたSF作品は、教科書に採られるような文学作品とは異なり、独自に物語世界を構築するものの、その世界自体が現実の世界の問題との類似の上に成り立っている場合が多い。普段は、何気なく観、聴き、読み流しているものの中に、現実の世界の問題を見出し、それを考える糸口として利用することで、学習者は抵抗感なく、真剣に実社会の様々な問題を考えることが出来るのではないだろうか。そして、幸いなことに、それらサブカルの世界では、物語とい

う性質上、対立する複数の意見・主張を見出すことも可能であるということも注目しておくべきである。

以上、ここでは、学習者が日頃から親しむサブカルから考え、意見文を書く授業の一試案を提案してみたいと思う。勿論、サブカルを契機としながらも、そこから見出した問題に対し、書籍等他のメディアで補完することにより、学習者の思考が深まることを目指したい。学習者が自身で問題に気づき、自身で調べ、考え、自身で論説文を書く。教師はその手助けをするだけでよい。その出発点が自身の慣れ親しんだサブカルであるが故に、その発見に意義があり、その後の学習活動にも意欲が湧くのではないだろうか。

2 方法

とはいえ、学習者にとって、サブカルはその世界には入りやすいものの、今回のように、そこから問題を取り出すというのは、そのような思考のし方に慣れていないこともあって、なかなか難しいことであろう。そこで先ず、教師がサブカルの中から問題を発見し、考えてゆく方法の具体例を示す。例としては、アニメ『攻殻機動隊』を、生命と身体の問題、つまり、脳死やクローニングなどの問題を考えてゆく契機として用いることができよう。その他、例えば、『銀河英雄伝説』（ノベルズ・アニメ）から民主制の問題、つまり、民主主義の意義と危険性を君主制との比較の中で考えてゆくこともできよう。或いは、『機動戦士ガンダム』（アニメ）から、官僚制の問題や差別の問題、又、『新世紀エヴァンゲリオン』（アニメ）から自己と他者の関係性の問題などを考える契機をそれぞれに発見できるのではないだろうか。これらは、現代社会の様々な問題点を扱っているのと同時に学習者の問題意識とも容易に繋がることと思われる。

さて、実際に、学習者が任意のサブカル作品から問題を発見し、その問題に応じて、資料を探して読み、考察した結果を論説として書いてゆくことになる。教師はそれぞれの段階ごとに、助言と適切な指導をする必要がある。例えば、生徒がAという作品を選んで来たとする。このAからXという問題を発見出来れば良いのだが、どうしても上手く問題の焦点が絞れないこともあるだろう。その場合、Yという問題が発見できないだろうか、という助言をするか、或いは、別のBという作品から問題を探すことを提案するなどの必要があるだろう。勿論、後者の場合も、Bは学習者自身が知っているものでなくてはならない（授業時間の制限という理由もある）。

次に、Xという問題について、学習者は図書室やインターネット等を利用して、資料を収集をすることになる。その際、資料の発見方法に対しての助言や提示するのは勿論だが、Xが〈aはbである〉というものであるとして、それに対しての〈aはcである〉という別の対立する見解も考慮できているか指導する必要もある。それは作品中から見出すことが出来ない場合もあるだろう。例えば、前に挙げた『銀河英雄伝説』では、「最高の君主制」と「最低の民主主義」が対立し、それぞれ、ラインハルトという名君とヤンという名将が代表している。ラインハルトに対立するヤンは、彼が名君で極めて民主的な善政を施

す君主であることを十分に理解しながらも戦いを挑むのである。「最高の君主」に比べれば、「最低の民主」は圧倒的に劣るように思える。その理由を考えなくてはならないのである。(これは、作中から知ることが出来る場合である。)

そして、最後に文章を書く作業に入るのだが、この時も、作品のどこからどのような問題を抽出し、それを現実のどのような材料を用いて考察して、その結果、自身はどういう意見になったのかと、思考の筋道と論理の明確さが判る文章になるよう、構成・内容の両面で指導してゆく必要があるだろう。尚、作品別に班を構成することができれば、次の単元でのディベートに生かせることもできるだろう。

3 学習指導案

単元名 身近なサブカルから社会を考え、意見文を書こう

単元設定の目的

学習者が日頃親しんでいるサブカルからさえ、そこに現代社会の様々な問題を見出すことができるという発見を通じて考えることで、意見文を書く。

設定時間 3～4時間

対象学年 高等学校第二学年

第一時

普段、何気なく親しんでいたサブカル作品から、自身と関わりのある世界の問題点を見いだすことができる。

学習活動	導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> ・教師の例を聴く ・自分が経験した過去のサブカル作品からどんな問題が取り出せるか考えてみる。 ・思い当たった点を問題として整理し、どんな資料（作品自体に関わるものは含まない）を探すべきかを考える。 ・実際に資料の収集に入る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・随時、個別に指導してゆく。 ・作品が出揃ったら、班分けが出来るかどうか、人数を確認する。班分けが可能ならば、話し合わせる。 ・最低でも、作品の他に一つは別の資料を集めうに指導する。資料の発見方法が難しい場合は、随時、助言をする。

第二時

発見した問題点に関して、収集した資料を用い、考えを深めることができる。

<ul style="list-style-type: none">・ 前回までの作業の続き。・ 資料が集まったら、整理し、論点を絞って、自身の考察をする。・ 考えがまとまったら、実際に意見文を書き始める。	<ul style="list-style-type: none">・ 特に時間を限らず、随時、個別に次の作業へ進ませる。・ 必ず、二項以上の主張が考慮されているように注意する。・ 特に原稿用紙の枚数に制限はしない。が、段落は基本的にワークシートに従うように指導するとよい。
---	---

第三時

前次までに行った作業から、実際に意見文を書くことができる。

<ul style="list-style-type: none">・ 前時間の作業の続き。・ 出来上がったら、推敲し、提出する。	<ul style="list-style-type: none">・ 次の単元に繋げない場合は、簡易な文集をつくるなどしてもよい。
--	--

4 問題点と課題

今回、学習者の社会への関心を喚起させ、自身と社会とが接している機会はどこにでもあることを確認させるため、敢えて、サブカルという学習者の馴染みが深く、且つ、学校のカリキュラムとは最も縁遠いと思われる分野から出発させるという授業を提案した。

意見文を書くという作業は、論説・評論文にせよ、文学的文章にせよ、読解中心になりがちな授業のなかにあっては、どちらかと言えば軽視されがちであり、そのせいもあって、学習者にとっても面白くない場合が多いのではないだろうか。又、作文を書く契機にしても、教科書など、学習者にとっては、それだけで硬くて、話題にしても縁遠いと感じられ、意欲の面でも最初から削がれてしまっているように思える。

そんな事情を打開するため、見方によっては小手先だけのように見える授業を提案した。しかしながら、実際のところ、サブカルというものが常に若い世代に、そして、時代ごとの社会に伴って変化するというのは疑いない。そこから、現代の問題を取り出すというのは、学習者の意欲も含めて、有効なのではないかと考えられるからである。

さて、この授業の問題を想定してみると、先ず、教師が或る程度、サブカルに精通していることが条件となる。が、これは、教師が常に学習者の日常の実体というものを配ることができていれば、特に問題はないだろう。次に、単なる感想文に陥る可能性があるということが考えられる。これを回避するため、他の資料の収集と考察が重要になってくる。この点を注意して指導すべきであり、用意したワークシートを有効に利用させる必要があるだろう。最後に、次のディベートの単元に繋げない場合、どのように発表の場を設けるか、或いは、設けずに教師の添削や評価に留めるかという点がある。が、これは、まずは学習者と授業に実状に応じて決定してゆけばよいだろう。尚、評価に関しては、どのような問題を取り出したかという点よりも、当の問題に対立する意見などにも目を向け、論理的に考察できているかどうかという点に重きを置くこととするべきであろう。

5 資料 — ワークシート

- ① 選択した作品名：

- ② 問題点を取り出した箇所とその要旨：

- ③ ②に対立する別の意見の要旨とそれを取り出した箇所：

- ④ 参照した資料の要約：

- ⑤ ④を参考としての考察：

- ⑥ 結論：

第二節 楽しめるディベート学習の試み

ーディベートによる「話し合う」活動を楽しむためにはー

小柳 真一郎

目次

1. 研究の目的と方法
2. 国語科におけるディベート
 - 2.1 ディベートの問題点
 - 2.2 ディベートの可能性
3. 論題設定について
4. 方法
5. 学習指導案
6. 問題点
7. 資料

1. 研究の目的と方法

本稿では、国語科における「ディベート」の授業について論じていく。その指導を行う際に生じる問題点や、「ディベート」により、どのような力が養われるのか、それを行う際に生徒側にどのような力が必要なのかを明らかにしたい。加えて、情報端末分野の肥大化や新しいメディアの登場などによって、膨大な情報が流布するであろうきたる21世紀にむけて、学習指導案の一例を提示したい。

平成十一年度の新学習指導要領では「話すこと・聞くこと」が重視され「伝え合う力」についての記述がよく目に付いた。当然のように新しい指導実践においてはこの「伝え合う力」を取り扱ったものが多く出回り、また注目されている。「伝え合う力」自体は必要なものであろうし、おおいに研究実践されるべきものであろう。

しかし、近年インターネット環境の普及などにより、新たなコミュニケーションの方法が提示されている。その一例として「eメール」や「携帯電話（PHSを含む）による会話」、「携帯電話のメール」などがあり、今やそれらの存在は無視できない。特に「携帯電話による会話及びそのメールのやりとり」は、中高生にとって日常生活の中で大きな位置を占めている。親としても、顔は見えなくとも、声が聞こえることでその存在を確認できるから安心、という考えからか自分の子どもにも率先して持たせていることが多いようである。顔の見えない会話、身振りや表情が分からない会話に着実に浸透しているのである。当然子どもたちは、携帯をもつもの同士でメールのやりとりを始めることになり、今度は音声を使用しない会話にそのシフトをずらしていくこととなる。

こうして「話し合う」ことは、直接相手と対峙した時にばかり起こるものではなくなってしまった。昔から家の回線電話による会話もあったであろうという指摘もあるだろうが、現在のように所かまわず電話する、という状況は最近できあがったものであろう。最近、日常生活の中でも、知人との

会話の最中であるのに、携帯電話に電話がかかってきたという理由で席を外す、などという状況もしばしば見受けられる。これは会話のマナーからすればひどく失礼にあたるが、自分に対してもそのような事態が起こることを考え、注意することもなく仕方のないことだと受け取りがちである。顔を突き合わせて会話することだけが「話し合う」ことだとは限定しないが、少なくともそういった機会が減っていることは言えるのではないだろうか。それならば、学校の授業において対峙しての会話をもう一度見直してみたいと考えた。しかも、日ごろの会話に通じるような楽しいものを、である。

2. 国語科におけるディベート

2.1 ディベートの問題点

学校教育においてディベートは数年前から注目された。それというのも国際化社会の影響を受けてか「日本人はディベートに弱い」「外交力がない」などという論議がまきおこったからである。しかし、こういった意見はディベートを、「相手をやり込めるだけの話術」「口先がうまくなるもの」という偏った見方をしたために出てきたものであった。ディベートによって養われる力が「話す技術」だけに焦点化されてしまい、誤解を招いてしまったのであろう。

「話す技術」ではなく「話し合う力」をどうやって育成するべきかを考え、その方法の一つとしてディベートの授業が生徒の発達段階に合わせて組み込まれるべきである。あくまでディベートは話し合いの一形態であり、「ディベートを教える」ではなく「ディベートで教える」形を探らなければならないと考える。もちろんディベート入門期はディベートの形式を教えることになり「ディベートで教える」形は採りにくいかもしれないが、いくらか段階を経ることで克服できると考える。取り立て指導ではなく、長期的な計画を立てることが要求される。

また、これまでのディベート学習の過程の中では、先述のように「話術がうまくなる」という認識があったせいか「話し合う力」のうち、論理的に聞き、論理的に思考する力に対する配慮がやや欠けていたように思う。ディベーター同士ならば話を聞かないと反論の立てようがないため、相手の話を聞こうとするが、中学生の段階だと、どうしても審判となるディベーター以外の生徒達の多くはディベーター同士の話を真剣に聞こうとする姿勢をとることができない。これは「自分たちの番ではない」「他人の優劣に関心はない」という思惑が見え隠れする。これに対して生徒の興味関心のある出来事を取り上げるなど、論題の選定を工夫したり、審判に判定用のプリントの書き込みをさせるなど数々の対処がなされてきた。どれも有効的な方法だといえる。だがもっと望ましいのは、次の瞬間どうなるか分からない話し合いではないだろうか。これには観客、審判の話し合いへの参加が必要となってくる。詳しくは後述したい。

さらには、ディベートの持つゲーム性が度々問題となってきた。ディベートの多くは二元論構造（パネルディベートなどはやや異なる）で行われる。そのため（ディベートは決して勝負ではないのだが）勝ち負けが判別しやすく、生徒に「勝った」という達成感が生じる。また、現在の中学生など生まれつきのゲーム世代であり物事に勝ち負けがあると熱中しやすい。こうした生徒の状態をふまえて勝ち負けを重視して、これまでディベートが授業の中で使用されてきたのではないだろうか。そこにはやはり「ディベートを教える」という考えから抜け出していないように思う。「ディベートで教える」ならばその話し合いの過程を焦点化すべきであろう。かといって稿者はディベート

のゲーム性を否定するわけではないことである。ディベートを通して話し合うことは、学習者に表面上勝ち負けということにこだわらせながらも、そこにはどちらが勝ちであり負けなのか判断することを迫っているのである。勝ち負けだけでなく、社会には物事を判断する機会が多く存在する。自らの意見を持ち何らかの判断を下すということに対して学んでおく必要があるに違いないのである。私は判断するといことを学びつつ、楽しく、ディベートという話し合いへ全ての生徒が参加できるかどうか、にこだわっていくべきだと考える。

2.2 ディベートの可能性

ディベート授業の可能性として、一つにある議題について、クラスの全員が話し合いの場を作れることである。現在の若者は好き勝手に話すことは得意であるが、互いに意見を交換するなどという話し合いに関しては不得手であるように稿者には感じられる。そういった機会が少ないことが一つの要因であろう。人の話を聞こうとせず、一方的に自分の意見を主張する、そんな状況がテレビでもよく目につく。あれは「話し合い」というより「化かし合い」に近い。話し合いは、コトバをやりとりすることで生まれる緊張感も含まれているはずである。一定のルールに従って行われるディベートはそういった緊張感の中で存在し、クラスに一つの話し合いの場をもたらしてくれる。

また、ディベートにおいては、相手側の話を聞かなくては反論や質問を立てることが出来ないために相手の話を論理的に聞き理解しようとする。加えて自分の意見に対してこれには相手の立場に立って考えようとするという、多角的な視野を持つことも含まれるのである。さらには、観客（審査員）を意識することで論理的に話そうと筋道立てて自分の論のどこが有効であるかアピールしようとする。この論理的思考力、論理的に聞き話す力は、特にディベートにおいて顕在化しやすいと考える。

だが注意したいのは、ひとりよがりな論理を展開する学習者を認めてはいけない。そのようなことが起きれば、議論を成り立たせることは不可能に近い。そういった学習者がいた場合論拠を明らかにするように指導しなければならない。そもそも、論議を成り立たせるには、自分の論理の整合性がどこにあるのか、相手の論理のどこに問題があるのか、その根拠となる資料を提示し科学的に論じていく必要がある。科学的に論じていくことで相手の論理の欠点や論理の整合性が明確となり、より高度な次元での論議が可能となり、建設的になっていくのである。もちろん、準備段階において資料などの情報収集がきちんと行われていることが望まれる。このように、21世紀というさらなる情報化社会にむけて必要な能力がディベートにおいて養われるといえるだろう。

3 論題設定について

ディベートの論題については、生徒の興味関心のあるもの、また実生活に即したものが多く取り扱われていた。しかし、それらはどこかしら「学校」という規範の枠組みを意識したものでしかなく、現実的な話をしているように見えても、自分たちとは違う世界の話をしているようにしか感じられなかった。環境問題を新聞から引き抜いてきたり、生命倫理や紛争を論題にしたところで、狭い範囲でしか周りを認識していない学習者にとって絵空事、また綺麗事を論じているようにしか感じられないのではないだろうか。そういった状況だからこそ広く世界に目を向けさせてやるべきであるとの意見もあろうが、もっと身近なことから問題を見つけてやることで、話し合いに参加しや

すい状況を作り出すことができると考える。

学習者にとって最も身近なことは、先稿で示されたように、「サブカル」系メディアであろう。現在マンガやアニメなど学習者の周りをサブカルが取り巻いている。サブカルはフィクションという設定の上で描かれている場合でも、現実の問題と同じような事柄を取り扱うことが多い。学習者がどこまで真剣に問題意識を持ってサブカルと接しているのか言及できないが、よく見聞きするものから現実の問題を抽出してやることで、抵抗無く興味を持って話し合いに望めるのではないだろうか。

4. 方法

教師がまず、複数の意見が対立するようなサブカルを見つけ、その問題に対して考える方法の具体例を提示してみる。先稿で提示された『新世紀エヴァンゲリオン』(アニメ)や、『銃夢』(マンガ)から自己の確立と社会との関わり方の問題などを考えることができる。具体例を示すには学習者がそのサブカルについて通じていることが望ましいが、必要があればその問題が分かりやすい場面などを、マンガやノベルズならばコピー、アニメならば実際に映像を見せてやるとよい。

教師側の提示の後、学習者それぞれが任意のサブカル作品から問題を発見して、ごく簡単にまとめてもらい次時にプリントの形で配布する。プリントをもとに提示された問題について学習者間で意見交換をしてもらい、比較的ディベートしやすい作品を選ぶ。その後作品別に班を振り分け、問題についての賛否を考えてもらい資料を探して自分たちの意見を固めていく。その後資料を基にしたディベート活動をしてもらう。

また、話し合いを楽しく進める方法として、意図的に反駁を拒否し審判にどのような思惑があるのか考えさせてみるのもよい。審判にはディベートの途中で中間発表をしてもらい聴く姿勢の活性化をはかり、ディベーターはそれを見て論を展開する上で参考にしてもらう。審判の話し合いへの参加を更にうながすために、ディベーターには審判の証人喚問を容認し、ディベーター同士で話し合うのではなくクラス全員を巻き込んだものにしていく。

5. 学習指導案

単元名 身近な問題を話し合ってみよう

設定時間 5時間

対象学年 高等学校一年生

第一時

本時のねらい 身近なサブカルから取り出せる問題を考えてみる

学習活動	指導上の留意点
・教師側の例を聞く。	・例を説明する。必要ならばプリント等を用意する。
・自分が触れたことのあるサブカル作品から、問題が取り出せるか考えてみる。	・個別に指導を行う。

・問題を見つけたらその作品名や理由を簡単にプリントまとめてもらい提出する。

・プリントの回収と次時の予告。

第二・三時

本時のねらい ・様々な問題について考え論題を決定する。

・相手側の質問、反駁を予想することができる。

・自分たちの論拠となる資料などの情報収集とそれを活用することができる。

学習活動	指導上の留意点
<p>・プリントをもとにしてディベートの論題にできる自分たちが考えてみたい問題について話し合わせる。</p> <p>・班に分かれて意見の交換、資料の収集の確認。</p> <p>・ディベートのワークシートを使い、準備を進める。</p>	<p>・プリントの配布</p> <p>・論題が決定したら、作品ごとに班を分ける。</p> <p>・ワークシートの配布。 班ごとに随時指導を行う。</p>

第四・五時

本時のねらい ・話し合いに全員が参加することができる。

・肯定、否定の論を吟味し、新たに論を提示することができる。

学習活動	指導上の留意点
<p>・ディベートを行うことを確認する。</p> <p>・ディベートの流れを確認する。</p> <p>①肯定側立論 4分</p> <p>②否定側立論 4分</p> <p>③肯定側反対尋問 2分</p> <p>④否定側反対尋問 2分</p> <p>⑤肯定側第一反駁 3分</p> <p>⑥否定側第一反駁 3分</p> <p>中間発表</p> <p>⑦肯定側第二反駁 3分</p> <p>⑧否定側第二反駁 3分</p>	<p>・ディベートの流れを説明する。その際に審判には評価プリントを配布し、証人喚問などがあった場合には答えられるようにする。</p> <p>・審判にディベーターのやりとりを見聞き評価シートへ記入させる。</p>

勝敗を決定する

・最後に教師が互いの班に対しコメントする

評価シートは後日まとめた形でプリントにして配布する。これにより、話し合いを行った学習者に対し客観的な意見や感想を提示することができる。また、新たな論への参考にしてもらい授業を終えてからもそのまま忘れさってしまうことを避けることができる。

6. 問題点

今回は学習者にとってできるだけ身近な論題で、なおかつ話し合いに全員が楽しく参加できるような学習指導案を提案した。ゲームとして楽しむだけではないように考えてみたが、まだ話し合いを楽しむ方法は他にもまだまだあるように思う。考え、話し合うという場を通して学習者がそこに学ぶものがあれば幸いである。

サブカル作品から現代に通ずる問題を抽出する作業は多少の困難が付随するであろうが、学習者の問題意識を本当に身近なところから喚起できる方法の一つであろうから根気よく行えばよいであろう。そのためにも、教師側が常に自らを取り巻く環境に対し、感受性豊かで鋭い視点を持つことが要求される。

7. 資料

ディベートワークシート 氏名()

論題「 」

肯定側・否定側

1. 立論とその論拠となる資料

立論 資料

相手側の立論 資料

2. 質問・応答

予想される質問 用意する応答

実際の質問 応答

3. 反論・反駁

予想される反論 用意する反駁

実際の反論 反駁

ディベート評価用紙

氏名 ()

肯定側 班 否定側 班

①論点がしっかりしているか。(五点満点)

肯定側 点 理由

否定側 点 理由

②資料を活かしているか。論拠となっているか。

肯定側 点 理由

否定側 点 理由

③質問や応答が的確であるか。

肯定側 点 理由

否定側 点 理由

④論理展開がおかしくないか。

肯定側 点 理由

否定側 点 理由

⑤反論や反駁が的確であるか。

肯定側 点 理由

否定側 点 理由

合計点数

肯定側 点 否定側 点

判定

肯定側・否定側 班の勝ち(引き分け)とする。

判定理由・コメント

第四章 筋道立てて考える指導

第一節 論文体験学習の試み

小柳 真一郎

目次

1. はじめに
2. 論文の必要性
3. 題材
4. 学習指導案
5. 今後の課題
6. 資料

1. はじめに

稿者自身の学生生活を振り返ってみると、受験というシステムに対し漠然とした疑問を持ち続けながらも受験用の勉強を長く続けてきたように思う。それは、英単語の丸暗記であったり、受験校の傾向を見てそれにあった勉強しかしなかったりというものであった。そのような勉強を続けてきたせいも、大学に入った当初多くの講義で提示されるレポート、また論文のテストといったものを苦手としてきた。それは今の若い世代(中、高生)にも変わらないことだと考えられる。

中学、高校の生活の中では特に論文を書く機会もなく、また求められてもいない。その理由を説明するために高校生の例をあげるとするならば、大学への進学率が年々高まってきていることで敷居の低くなった大学の門戸を、高い次元のものに戻すためにセンター入試の試験科目を五教科七科目に増加しようとしていることが適当であろう。より広い知識を求めていることなのだが、これは逆に受験勉強のテクニックを磨くことに対してさらなる追い風となっているような気がしてならない。

国語でいうならば、論理的に思考する能力を確かめる説明文の問題よりも、システマチックで暗記に向く古典文法や、漢文の問題などに対して勉強の時間の多くを割くようになるであろう。点数の取りやすい方へとその志向は変化していく。また、週休二日制で科目数が減少した中学校の中でさらに、総合的な学習の時間を受け、学歴偏重ではない方向へと向かっていた学習者を、高校では強引に逆の方向へと引き戻す羽目になるのである。これでは満足に文章を書く、レポートや論文を書くという時間が生まれるはずもなく、小手先のテクニックを学ぼうとしかしなくなってくる。そんな時にいざ大学の入試で小論文があるなどと言われても、小、中学校では作文指導も満足に受けてこなかった学習者が対応できるとは考えにくい。高校では現在小論文指導が積極的に行われているが、それも付け焼き刃的な印象をぬぐい去れない。中学校などにおいて教師側への負担の大きさからやや避けられがちであった作文指導の欠如も一つの要因としてあげられるが、その前に現代の若者が自分の関心があること以外に対して思考することを嫌っていることが大きな要因であるように思われる。

現代の若者は決してよく言われるように「無関心」であるわけではなく、ごくごくわずかな範囲でしか事象を認識していないだけであり、いまだ世間を把握しきれていないだけなのである。自分の周りのことで手一杯であり、少し自分とは離れた事柄に対しては考える余裕がなく、考えることを嫌う。極端な話「自分はどうすれば異性からもてるのか。」ということに対しては悩み、「人間らしく生きるとは何か。」ということに対してはその思考を停止する。

レポートや論文を書くにあたっては、筋道立てて論理を展開していくために自分の意見や考えというものを常に把握すること、また様々な考え方に触れ、知見を広め、より自らのそれを深化拡充し、変化し続ける世界に対応することが求められる。上記のように自分の周り以外の世界を認識しようとしないうちは、文章を書くことはままならない。相手に自分の論旨を理解してもらうということに、どのような価値があるのかよく学習者が理解する必要があるだろう。

2. 論文の必要性

現在は今更に確認する必要もなく、情報メディアは隆盛を極めている。音楽の世界などに目を向けてみても、ストリートミュージシャンやインディーズのバンドなどに注目が集まるようになってきている。自らの考えや意見をメロディに載せてという方法で世間へアピールしようとしていると受け取れる。そういった活動ができるものはいいが、できないものは特に自分の考えを表現することなく日々の生活に埋もれて行き、自らの存在する世界との関わりが薄れてしまう。

個性の尊重が叫ばれて久しいが、それを自分の殻に閉じこもることだと受け取ってしまい、自分の意見だけが正しいのだという風潮があるのではないだろうか。メディアの拡大とともに無責任な意見の垂れ流しが支配し始め、インターネットの世界ではそのような状態が当たり前のようにになっている。受け取る側がそういったものをきちんと取捨選択できればよいが、どこまでその無責任さを受け取る側が良しとするのかは明確な判断は下せないであろう。

レポートや論文を書くならば、自分がある問題に対してこう思うのだ、という確固たる意見をまず持つ。それは必要である。そこで責任を(というよりも文章を書く上での義務といえる)負うためにも、自分の意見への理由が明確である必要がある。なぜそう思うのか、なぜそう考えるのか、はっきりとした文章という形で表すことによって自分の思考の概要、道筋といったものを改めて認識することができる。

論文には結論が必ずあり、そこに繋がるように書くよう指導しなければならない。自身の結論に至るまでにどのような判断があったのか、その論拠は何かといったことを書かせなければ、その論理は空虚で実に軽薄なものになってしまう。判断するに足るような証拠とは、誰がそのデータを使っても同じ結論が出るものを用意するように指導するべきである。

3. 題材

題材に関しては、これまでのように学習者が興味関心のあるサブカルを取り扱うのも良い。しかし、今回はまず学習者全員が同じテーマでレポート及び論文を書く授業としたいため

に、誰もが経験するような悩みが望ましい。そこでディベートなどでも取り扱われることの多い「校則」についてのレポート及び論文を書かせる授業を提案したい。これまで自らの学校の校則について何かと論じられることは多かったように思われるが、他校の校則を自校と比較する機会はありませんでしたのではないだろうか。他校と比較することにより自校の校則を客観的に捉え直し、問題を見つけ出すことができるはずである。それは、単なる一例にすぎないが、法律で認められているはずのバイクの免許取得やアルバイトについて、何の法的根拠もなさない校則によって禁止されていることなどである。

広く他校の事情を知るには、インターネットが適当であろう。学校自身がHPを開いていることは今や珍しいことでもなくなってきた。少なくとも学校が運営しているわけであり、授業で使いたい旨を明確に伝えられたならば、その学校の校則に関しての情報を教えてくれるであろう。電話とファックスの併用も考えられるが、インターネットを使用すれば、よりスムーズに事が運ぶうえに、学習者自らがその手続きを行うことも含めて鑑みるに、情報処理などの経験を積むこともできるはずである。

方法としてはまず、自校の校則の中で疑問に思うものや、特殊だと(こんなことまで義務づけられていると)感じられるものを取り上げ整理させる。その後インターネットを介し他校の校則を調査してもらい、両者の相違点と共通点をまとめさせて提出してもらおう。さらには、相違点と共通点に関して自分の思うところを論文としてまとめさせる。その時に、スムーズに論文が書けないようであればそういった共通点や相違点がどうして生まれたのか、どういった校則があればよいか、また無ければよいのか、といった観点を示すとよいであろう。

ちなみに、インターネットの検索では、HPを開いている広島県下の高校は50校以上見つけることができた。このことから学校教育の現場にインターネット環境が整ってきたことがよく分かる。上で電話とファックスを使用する方法もあると述べたが、仮に海外までその視野を向けた場合、やはりインターネットの方が好都合であるように思う。学習者は海外の高校の校則を調べ、自校の、ひいては日本のそれと比較することで、グローバルな視野を持つことができるであろう。

4. 学習指導案

単元名 校則に疑問反論オブジェクション

設定時間 七時間

対象学年 高等学校一年生

第一時

本時のねらい 自分の学校の校則について考察する。

学習活動	指導上の留意点
・自校の校則について知っていることを挙げる。	・自校の校則を知っているか尋ねる。 ・校則を疑問に思ったことなどないか尋ね

<ul style="list-style-type: none"> ・疑問に思う校則や不思議に思うものをノートに整理しまとめる。 ・それらを発表する。聞く側は自分と違った意見が出ないか注意し、異なるものがあれば書き込む。 	<ul style="list-style-type: none"> それについて考えてみることを提案する。 ・事前に自校の校則が載っているプリント等を用意する。 ・何人か指名し書いたものを発表してもらおう。
---	---

第二・三時

本時のねらい 他校の校則と比較し客観的に校則を見つめ直す。

情報を処理してまとめる。

学習活動	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> ・他校の校則をインターネットを利用し探る。 ・自身の高校との相違点や共通点をワークシートにまとめさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習者自らに手続きさせる。その際相手側の高校に教師側から連絡を取っておく。 ・自校の校則で疑問に思ったことが他校ではどの様に扱われているのか注意させる。 ・論文の結論を導き出せるようなデータを厳選して集めるように指示する。

第四・五時

本時のねらい 前時までにまとめたものを使って論文を書く。

学習活動	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> ・「他校と自校の校則を比較して自らの思うところを述べよ。」という題目で書くことを確認する。 ・ワークシートにまとめたものを参考にし論文を書く。(1000字程度) ・推敲を行い、ワークシートと合わせて提出する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・題目を指示する。 ・結論をまず明確にするように指示する。その後その結論に至った理由を論拠となる資料を参考にさせながら書かせる。 ・悩んでいる生徒などには観点を示すなど、随時指導を行う。 ・誤字脱字、論理展開等の推敲を行うように指示する。 ・どれか一本を学校のHPに載せることを伝えておく。

・論文は後日、学習者が閲覧可能な形にまとめらる。

*生徒の意見をできる限り尊重するように配慮し、校則を批判したところで何ら問題のないことをあらかじめ確認しておく必要がある。

第六・七時

本時のねらい 自身の論文に責任を持ち、HP上で発表させる。

学習活動	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちのクラスの意見を代表しているものはどれか、学校のHPに載せるにはどれがよいか話し合う。 ・論文をHP上に載せる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスの意見を代表する論文はどれか話し合うことを提案する。 ・意見が分かれた場合は、複数載せる。

5. 今後の課題

今回インターネットを利用して他校の協力を願うとしたが、学校内での様々な事情により難しい場合があると考えられる。毎日のように、その学校がメールやその他掲示板などをチェックしているか分からない。さらには校則を知りたいという要望について、学校長の許可等が必要となる場合があれば、返事をもらうのに時間がかかってしまい、結果、授業がスムーズに進まないという恐れもある。ただし、学校同士ですら協力し合わないとなると開かれた教育界を目指すことなど到底不可能である。そのようなことが無いと願う意味でもこの授業を提案した。

資料

校則に疑問反論オブジェクション 比較対象とした高校「		氏名() 」	
自校との共通点		自校との相違点	
共通点がある理由を考えてみよう		相違点がある理由を考えてみよう	

第2節 科学的にレポートを書く授業

—超掃除人—

石窪 太郎

目次

- 1、目的と方法
- 2、レポート能力の現状
- 3、学校生活における掃除
- 4、授業への提案・学習指導案
- 5、まとめと今後の課題

1、目的と方法

「書くこと」の授業において、かな・漢字・表記を含めた文字を正しく書く力、話し言葉か書き言葉かの区別、語句を適切に使う力、学習した内容や方法についての感想を書く力などはよく取り上げられている。しかし、筋道をたてて書く能力は、まだまだ身につけていないように感じる。そこで、今回は、掃除という普段だらだらしてしまうものを題材として取り入れつつ、科学的にレポートを書く力を育成することを目的とする。

2、科学的なレポート力の育成

科学的なレポート学習においては、情報・資料を集める能力、実験をする能力、さらには、出てきたデータを目的に合わせ、分析する能力などが必要となる。私の経験上、実験をする能力などの技術面においては、生徒たちは、ある程度身につけているように思われる。しかし、生徒たちは、データを何のために集めるのか、また、それを分析する能力は身につけていないように思える。そして、レポートを書く際には、「・・・と思う」や「・・・だろう」などの類推や主観に基づき文章を締めくくることが多い。そこで本稿においては、「・・・である」というように、事実に基づき客観的なレポートを書く授業を提案したい。また、だらだらやりがちな掃除に対して科学的なメスを入れることで掃除を効率良くするようにしたい。

3、生徒の掃除に対する態度

子どもたちにとって掃除は苦痛なものであろう。家では、親が自分たちの部屋を掃除してくれることが多いと聞く。掃除は誰かがやってくれるものだと考えている子どもも多い。だから、コンビニエンスストアなどで買った、おやつや弁当のゴミを道ばたに捨てるし、空き缶なども投げ捨てる。これは、すれ違う大人達の影響も大きいはずである。つまり、たばこのポイ捨てなどを現実としてみており、「大人もやっているから別に捨ててもいいじゃん。」といった考えも生み出している。

学校生活においては、教室は、みんなが使うものであり、掃除をするということは、誰かが汚したものを自分たちできれいにしなければならないということである。人のためにやるのであったら、余計「なんでぼくたちが掃除しなければならないの？」と思う子どもは多いはずである。しかし、勉強をするにあたっての環境として、汚いより、きれいな方がよいはずである。また、嫌なことであつたら、長い時間やるより、短い時間で効率良くきれいに掃除した方がよいはずである。そこで、教室での掃除に科学的なメスを入れることで効率良くしかも、きれいにするにはどうしたらよいかを模索する。

4、授業への提案・学習指導案

4-1 授業への提案

レポートは、大学生にとっては身近なものであるが、中学生にとっては馴染みの薄いものである。しかし、社会に出ると、様々な形でのレポートが要求される。科学的なレポートに絞ることにより、レポートのひとつの形態を知り、その特徴に合わせた書きわけができることを目標とする。科学的なレポートにおいては、心情本意の感想文にならないように、事実に基づいた客観的なものにしなければならない。

本発表では、普段、科学的なメスを入れることのないようなものに、メスを入れることで、新しい発見をしてくれることを期待する。また、掃除という生徒たちにとって、苦痛なもの、あるいは適当に過ごす時間になっているものに対して、少しでも積極的に参加できるようにする。

その方法として、ある視点に立ち、それを徹底的に追求する。たとえば、ゴミを出さないようにするにはどうすれば良いのか、ヨーロッパなどでは、ゴミに対してどのように対応しているのか、ゴミを分別する際どうするべきかなど、考えるテーマ、あるいは、具体的に、教室内のゴミにはどのような物質が含まれているのか、ほうきで教室を掃くのに効率的な人数、あるいはその方法はどのようにすれば良いのか、雑巾はどのような生地が教室のゴミをよりきれいにするのか、あるいは、雑巾にどれほどの水を含ませる（雑巾の絞り方も含めて）とより教室を効率的に拭くことができるのか（なお、水拭きは窓と床との比較を通してその方法の違いを模索しても良い）、机や椅子を腰や手にできるだけ負担のかけない持ち上げ方はどのようなものかなど、様々な視点で考えることで、普段何の考えもなしに行っている掃除を省みたい。

4-2 学習指導案（全4時間）

対象学年 中学2年生

単元目標

- ・ 普段、何気なくしている物事に対して、徹底的に科学的なメスをいれることができる。
- ・ 実験などを通して客観的なレポートが書くことができる。

第1時の学習目標

- ・ より良い学習環境を模索することができる。
- ・ ゴミの性質について考える。

学習活動	指導上の留意点
1、 普段の教室の環境を振り返る。 2、 教室内にどのようなゴミがあるかを考える。 3、 次時の予告をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教室内をじっくりと見る。(普段見ないようなところ) ・ 実際にゴミを集める。(実験に必要なであることを伝える。) ・ 次時は実験をすることを予告する。

第2～3時の学習目標

- ・ それぞれのテーマに関して実験の方法を考えることができる。
- ・ 実験を通して結果を追求する。

学習活動	指導上の留意点
1、 班ごとに追求する課題を決める。 2、 選んだ課題に対して仮説をたて、実験方法などを考える。 3、 実験を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・ テーマはある程度教師側からだしても良い。 ・ 仮説をたてたり、実験方法を考える過程で、アドバイスを与える。 ・ メモに実験経過などを書かせる。

第4時の学習目標

- ・ 実験結果に基づいてレポートを書くことができる。
- ・ みんなの前で発表でできる。

学習活動	指導上の留意点
1、メモを中心に整理する。 2、結論を考える。 3、レポートを書く。(レポート用紙に) 4、書いたレポートを班で回し読みをする。 5、みんなの前で発表する。 6、良かった点などを自分のレポート活かす。	<ul style="list-style-type: none"> ・何が必要か必要ではないかを判断させる。 ・レポートにおいて結論が大切であることを伝える。 ・実験をふまえて書かせる。 ・回し読みをすることで、それぞれのレポートに対して意見を出し合う。 ・班ごと1名ずつ書くテーマに従って、自分たちのレポートを発表する。 ・発表の際にメモをとらせ、後でわかりやすいようにする。

5、まとめと今後の課題

今回、科学的にレポートを書く授業を提案したわけであるが、実験を取り入れたため活動中心になってしまう恐れがある。

その一方で、科学的なメスを入れないようなところに入れることで、少しは子どもたちの視野を広げる手助けにはなったと考える。あくまで、実験方法を考えたり、実験をするということはレポートを書くための手段にしか過ぎないことを伝えきれていない。また、掃除という題材を使ったわけであるが、どこまで、子どもの興味を引き付けることができたか疑問である。掃除に対して、何の考えを持たずにやっている子どもたちにとって、掃除とは何のためにするのかという単元を組み込んでも良いと考える。そのことを含め今後の課題としたい。

<全体での実験>

教室のきれい度 (ゴミにはどのような種類があるのだろう?)

・床

・窓

・机

・天井

・その他

資料2

名前

テーマ

・実験方法

・実験過程

・結果

・実験の結果何が言えるのか

おわりに

最近の流行語は、「情報」「国際」「環境」だそうです。国語科は、それらのどれにも関わらないできています。しかし、数学や理科や社会科は、正に時代の動きに敏感でなくてはやっていけません。国語科だけは、古い体質のままでもいいのかというと、本当はいけないのですが、時代の流れに対応してこなかっただけのことなのです。たしかに、国語科は時代遅れでも構わないという一面は、ございます。基礎を教えるのが教育の根本だからです。定番の教材であるところの『源氏物語』や『平家物語』の古典解釈を行っている限りは、多少の波風が吹いてこようが大勢には余り関係なく、やっていけます。近現代文学にしても、定番に従っていれば、何とかこなせます。文法でも、解釈文法に則っていれば、何とか泳いでいけます。別に、「ら抜き言葉」とか新しい若手の作家の教材に関心を示さなくても、基礎固めで十分に指導が可能だからです。

しかし、それはそれで根本的には構わないとは存じますが、新しい時代に生きる子供たちが、バランスの取れた能力を身につけていくためには、他の教科と同様に時代に敏感でなくてはならないでしょう。国語だけが、旧態依然としていては、子供たちがかわいそうな気がします。

しかし、はじめに示しました三つの流行語の概念は、みな、国語科の教材の外周に存在するものばかりです。今まで関わらなくても済んできた事項です。内面化ではなくて、外面化ということです。なかなか骨が折れますし、答えのない所為ですので、厄介です。しりごみしがちになりましょう。できれば、〇×に慣れてきているので、答えのあることに関わりたいと思いいなるのもよく分かります。しかし、もう現代以降は、正解をちらつかせて指導する時代ではないようです。プロセスを評価するようにならなくては、真の指導にはなりにくいでしょう。また、導いていくというよりは、参加指導するというところに重点が置かれていくのでしょうか。

知識を教え込むという授業ではなく、行為や行動を通して、納得させていく授業です。これは、やってみるまで、なかなか億劫なものです。自分の不備を見透かされそうで、不安になるからです。プライドに寄りかかっている限り、とてもやる気がでないでしょう。

今回の音声表現の教室は、未開拓な領域への挑戦です。広島大学教育学部の院生が、砂上の楼閣を作ってみてくれました。これらは、単に根っこのない植物と同じだと言ってしまうとそれはさうでしょう。しかし、このような真剣な構想を試みさせることによって、新しい時代に期待される「言語攻略能力」が少しでも開拓されていけば、何よりも幸せなことだと思われれます。これから10年先に役立つものと考えて、このような試案をさせています。今はまだ、現場には、役に立たないだろうと思いますが、どこか、心の隅に読後感をしまっておいていただければ幸いです。読み返してみますと、院生の未熟な授業案ばかりで恥ずかしいのですが、ありのままを、お示しして、ご批判に供したいと存じます。

ご一読くださいますと、有り難う存じました。

(江端 義夫)

21世紀教育実践の手引き
言語攻略の音声表現教室

印刷 2001年1月7日
発行 2001年1月14日

〒739-8524 広島県東広島市鏡山1-1-1
広島大学教育学部国語文化教育研究室
(代表) 江端 義夫
Tel・FAX 0824-24-6789
非売品